
加 須 市

長 竹 遺 跡 I

首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生・久喜地区）における
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 1 4

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



長竹遺跡遠景



長竹遺跡近景



B区第一面全景（南東から）



A区畝状遺構A・B地点（北西から一地山の黒色土は環状盛土遺構）



長竹遺跡出土 犬形土製品



長竹遺跡出土 縄文土器



長竹遺跡出土 耳飾り



長竹遺跡第9号住居跡出土土器

序

埼玉県北東部を流れる利根川は、都市用水や農業用水を供給するなど首都圏の社会・経済活動を支える重要な河川です。しかし、利根川の堤防がひとたび決壊すれば、首都圏の中核機能に甚大な被害をもたらす恐れがあります。国土交通省では、このような災害に備え、安心・安全な地域づくりのため、さまざまな河川の整備事業を実施しています。首都圏氾濫区域堤防強化対策事業もその一環です。

事業地のある加須・羽生・久喜地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回発掘調査を行った加須市の長竹遺跡もその一つです。発掘調査は、同事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

長竹遺跡は、縄文時代後晩期の人々がドーナツ状に土を積み上げた環状盛土遺構や多量の遺物が発見されるなど、県内最大級の遺跡であることが判明しました。今回の報告では、環状盛土遺構の周囲に広がる縄文時代の住居跡をはじめ、古墳時代後期の住居跡と大規模な畠跡、奈良・平安時代の住居跡、中近世の溝跡や井戸跡など、長い間この地で人々の営みが連綿と繰り返されてきたことが明らかになりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、加須市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成26年6月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 樋 田 明 男

例 言

1. 本書は、加須市大字大越に所在する長竹遺跡（第1・2次調査）の発掘調査報告書である。

長竹遺跡の調査成果については以下のように巻を分け、順次報告する予定である。

- ・A～C区古墳時代以降、B区南半～C区縄文時代（長竹遺跡Ⅰ：本書）
- ・D区古墳時代以降（長竹遺跡Ⅱ）
- ・環状盛土遺構南半（長竹遺跡Ⅲ）
- ・環状盛土遺構北半（長竹遺跡Ⅳ）

2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は以下のとおりである。

第1次調査

埼玉県加須市大字大越字樋ノ口702-1 他

平成22年4月23日付け 教生文第2-8号

第2次調査

埼玉県加須市大字大越字樋ノ口696-1 他

平成23年4月14日付け 教生文第2-7号

3. 発掘調査及び整理報告書作成事業については、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

委託事業の名称は下記のとおりである。

発掘調査事業

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須市）における平成22年度埋蔵文化財発掘調査」

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須地区・羽生地区）における平成23年度埋蔵文化財発掘調査」

整理報告書作成事業

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生・久喜地区）における平成24年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生・久喜地区）における平成25年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

発掘調査（整理）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・羽生地区）における平成26年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

4. 発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、第1次調査を平成22年5月1日から平成23年3月31日まで結間孝志、富田和夫、岩瀬謙、黒坂植二、吉田稔、大屋道則、大和田暁が、第2次調査を平成23年4月1日から平成24年3月31日まで黒坂、吉田、大屋、渡辺清志、堀内繁明、青木弘、中泉雄太が担当した。

整理報告書作成事業は、平成24年度から平成26年度まで実施した。平成24年度は10月1日から平成25年3月29日まで赤熊浩一が、平成25年度は6月1日から平成26年3月31日まで赤熊、矢部暁が、平成26年度は4月1日から4月30日まで上野真由美がそれぞれ担当した。

報告書は、平成26年6月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第413集として印刷・発行した。

5. 発掘調査における基準点測量は、第1次調査を有限会社ジオプランニング、第2次調査を中央航業株式会社に委託した。
6. 空中写真撮影は中央航業株式会社に委託した。
7. 放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
8. 遺物の巻頭写真撮影は合資会社池澤に委託した。
9. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は赤熊、矢部が行った。
10. 出土品の整理・図版作成は、赤熊、矢部、上野が行い、小野美代子、黒坂、大屋、渡辺、古谷渉の協力を得た。
11. 本書の執筆は、Ⅰ-1を埼玉県教育局市町村

- 支援部生涯学習文化財課、Ⅱを黒坂、Ⅴを赤熊、Ⅳ-3-(2)を小野、その他を矢部が行った。
12. 本書の編集は赤熊、矢部、上野が行った。
13. 本書にかかる諸資料は、平成26年7月以降増

玉県教育委員会が管理・保管する。

14. 発掘調査、報告書刊行にあたり、加須市教育委員会をはじめ関係機関及び古代生産史研究会の皆様からご教示・ご協力を賜った。

凡 例

1. 本書におけるX・Yの数値は、世界測地系、国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各種図に示した方位は全て座標北を指す。

調査区のM-10グリッド北西杭の座標は、X = 20750.000、Y = -19690.000。北緯36° 11' 12" 5578、東経139° 36' 51" 8888である。

2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッドの名称は北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、例えばA-1グリッド等と呼称した。
4. 調査区は着手年次の関係上、北西より南東方向にD、A、B、Cと地区割りしている。本書が扱う地区では縄文時代と古墳時代以降の文化層に間隙があり、それぞれ確認面が二面識別できた。これらは以下の別で呼称した。

第一面…古墳時代以降（上層/下層）

第二面…縄文時代（上層/下層）

5. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は以下のとおりである。
- S J…住居跡 S B…掘立柱建物跡
S D…溝跡 S E…井戸跡
S I…竪穴状遺構 S K…土坑
S X…性格不明遺構 P…ピット・柱穴
6. 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を一部振り替えた。

7. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もある。

全体図 1 : 1200

遺構図 1 : 60 遺構拡大図 1 : 30

縄文土器 1 : 4 土器拓影図 1 : 3 1 : 4

土師器・須恵器 1 : 4 陶磁器 1 : 3 1 : 4

石器 2 : 3 1 : 3 1 : 4 1 : 6

土製品・石製品 1 : 2 鉄製品 1 : 2

8. 遺物断面図に表記した水準数値は、海拔標高（単位m）を表す。

9. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・口径・器高・底径はcm単位である。

・（ ）内の数値は推定値を示す。

・[]内の数値は残存高を示す。

・胎土は土器中に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A・雲母 B・片岩 C・角閃石 D・長石

E・石英 F・軽石 G・砂粒子 H・赤色粒子

I・白色粒子 J・白色針状物質 K・黒色粒子

L・その他（小礫）

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・色調は、『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。

・備考には出土位置、注記No.、推定される須恵器の生産地等を記した。

10. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50000地形図、加須市1/2500都市計画図を編集、使用した。

目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(6) 石製品	158
1. 発掘調査に至る経過	1	V 古墳時代以降の遺構と遺物	159
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	1. 古墳時代の遺構と遺物	159
(1) 発掘調査	2	(1) 住居跡	161
(2) 整理・報告書の作成	2	(2) 竪穴状遺構	167
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4	(3) 畝状遺構	170
II 遺跡の立地と環境	5	2. 奈良・平安時代の遺構と遺物	182
1. 地理的環境	5	(1) 住居跡	182
2. 歴史的環境	7	(2) 掘立柱建物跡	243
III 遺跡の概要	9	(3) 竪穴状遺構	244
IV 縄文時代の遺構と遺物	29	(4) 土壌	245
1. 第二面下層の遺構と遺物	29	(5) 井戸跡	248
(1) 住居跡	29	3. 中近世の遺構と遺物	250
(2) 竪穴状遺構	46	(1) 土壌	250
(3) 土壌	47	(2) 溝跡	264
(4) 礫集中	61	(3) 杭列	290
(5) ビット	65	(4) 井戸跡	292
2. 第二面上層の遺構と遺物	69	(5) 性格不明遺構	297
(1) 住居跡	70	(6) ビット	302
(2) 土器埋設遺構	91	4. グリッド出土遺物	305
(3) 土壌	92	5. 旧堤防跡	309
(4) 柱穴列	103	VII 自然科学分析	313
(5) ビット	105	VII 調査のまとめ	316
3. グリッド出土遺物	110	1. 縄文時代の様相	316
(1) 土器	110	2. 古墳時代の様相	319
(2) 土偶	146	3. 奈良・平安時代の様相	321
(3) 耳飾り	150	4. 中近世の様相	322
(4) 土製品	150		
(5) 石器	151		

写真図版

挿図目次

第1図	埼玉県地形	5	第35図	第12号住居跡出土遺物(4)	42
第2図	周辺の遺跡分布	6	第36図	第12号住居跡出土遺物(5)	43
第3図	遺跡位置図	9	第37図	第12号住居跡出土遺物(6)	43
第4図	基本土層	10	第38図	第12、15号住居跡出土遺物	44
第5図	縄文時代の遺構全体図(上層、下層)	11	第39図	第12号住居跡出土遺物(7)	45
第6図	縄文時代の遺構(1) B区下層	12	第40図	第4号竪穴状遺構	46
第7図	縄文時代の遺構(2) B、C区下層	13	第41図	土壌(1)	48
第8図	縄文時代の遺構(3) C区下層	14	第42図	土壌(2)	50
第9図	縄文時代の遺構(4) B区上層	15	第43図	土壌(3)	51
第10図	縄文時代の遺構(5) B、C区上層	16	第44図	土壌(4)	53
第11図	縄文時代の遺構(6) C区上層	17	第45図	土壌(5)	55
第12図	古墳時代以降の遺構全体図	18	第46図	土壌(6)	56
第13図	古墳時代以降の時期別遺構全体図	19	第47図	土壌(7)	57
第14図	古墳時代以降の遺構(1) A区上層	20	第48図	土壌(8)	59
第15図	古墳時代以降の遺構(2) A、B区上層	21	第49図	土壌出土遺物(1)	60
第16図	古墳時代以降の遺構(3) A、B区上層	22	第50図	土壌出土遺物(2)	61
第17図	古墳時代以降の遺構(4) B区上層	23	第51図	第1、2号礫集中位置図	62
第18図	古墳時代以降の遺構(5) B、C区上層	24	第52図	第1号礫集中	62
第19図	古墳時代以降の遺構(6) C区上層	25	第53図	第2号礫集中	63
第20図	古墳時代以降の遺構(7) C区下層	26	第54図	ビット出土遺物	65
第21図	古墳時代以降の遺構(8) A区下層	27	第55図	第二面下層ビット分布図(1)	67
第22図	古墳時代以降の遺構(9) A区下層	28	第56図	第二面下層ビット分布図(2)	68
第23図	縄文時代の遺構(第二面下層)	29	第57図	縄文時代の遺構(第二面上層)	69
第24図	第17、18号住居跡	30	第58図	第11号住居跡	71
第25図	第18号住居跡埋襲・遺物出土状況	31	第59図	第11号住居跡遺物出土状況(1)	72
第26図	第17号住居跡出土遺物(1)	31	第60図	第11号住居跡遺物出土状況(2)	73
第27図	第17号住居跡出土遺物(2)	32	第61図	第11号住居跡出土遺物(1)	74
第28図	第18号住居跡埋襲	33	第62図	第11号住居跡出土遺物(2)	75
第29図	第12、15号住居跡(1)	34	第63図	第11号住居跡出土遺物(3)	76
第30図	第12、15号住居跡(2)	36	第64図	第11号住居跡出土遺物(4)	77
第31図	第12号住居跡遺物出土状況	37	第65図	第11号住居跡出土遺物(5)	78
第32図	第12号住居跡出土遺物(1)	39	第66図	第11号住居跡出土遺物(6)	79
第33図	第12号住居跡出土遺物(2)	40	第67図	第11号住居跡出土遺物(7)	81
第34図	第12号住居跡出土遺物(3)	41	第68図	第11号住居跡出土遺物(8)	82

第69図	第11号住居跡出土遺物 (9)	83	第106図	グリッド出土遺物 (14)	128
第70図	第13号住居跡	85	第107図	グリッド出土遺物 (15)	129
第71図	第13号住居跡遺物出土状況	86	第108図	グリッド出土遺物 (16)	130
第72図	第13号住居跡出土遺物 (1)	87	第109図	グリッド出土遺物 (17)	131
第73図	第13号住居跡出土遺物 (2)	88	第110図	グリッド出土遺物 (18)	132
第74図	第13号住居跡出土遺物 (3)	89	第111図	グリッド出土遺物 (19)	133
第75図	第13号住居跡出土遺物 (4)	89	第112図	グリッド出土遺物 (20)	134
第76図	第13号住居跡出土遺物 (5)	90	第113図	グリッド出土遺物 (21)	135
第77図	第1号土器埋設遺構	91	第114図	グリッド出土遺物 (22)	136
第78図	第1号土器埋設遺構出土遺物	91	第115図	グリッド出土遺物 (23)	137
第79図	土壌 (1)	93	第116図	グリッド出土遺物 (24)	138
第80図	土壌 (2)	95	第117図	グリッド出土遺物 (25)	139
第81図	土壌 (3)	97	第118図	グリッド出土遺物 (26)	140
第82図	土壌 (4)	98	第119図	グリッド出土遺物 (27)	141
第83図	第492号土壌遺物出土状況	99	第120図	グリッド出土遺物 (28)	142
第84図	土壌出土遺物 (1)	100	第121図	グリッド出土遺物 (29)	143
第85図	土壌出土遺物 (2)	101	第122図	グリッド出土遺物 (30)	144
第86図	土壌出土遺物 (3)	102	第123図	グリッド出土遺物 (31)	145
第87図	第1号柱穴列	103	第124図	グリッド出土遺物 (32)	146
第88図	第2号柱穴列	104	第125図	グリッド出土遺物 (33)	147
第89図	第1、2号柱穴列出土遺物	105	第126図	グリッド出土遺物 (34)	149
第90図	第二面上層ビット分布図 (1)	106	第127図	グリッド出土遺物 (35)	150
第91図	第二面上層ビット分布図 (2)	107	第128図	グリッド出土遺物 (36)	152
第92図	ビット出土遺物	108	第129図	グリッド出土遺物 (37)	153
第93図	グリッド出土遺物 (1)	111	第130図	グリッド出土遺物 (38)	154
第94図	グリッド出土遺物 (2)	112	第131図	グリッド出土遺物 (39)	155
第95図	グリッド出土遺物 (3)	114	第132図	グリッド出土遺物 (40)	156
第96図	グリッド出土遺物 (4)	115	第133図	古墳時代の遺構全体図	159
第97図	グリッド出土遺物 (5)	116	第134図	K、L-8グリッド周辺の住居跡	160
第98図	グリッド出土遺物 (6)	118	第135図	第6号住居跡・出土遺物	161
第99図	グリッド出土遺物 (7)	119	第136図	第8号住居跡	163
第100図	グリッド出土遺物 (8)	120	第137図	第8号住居跡出土遺物	163
第101図	グリッド出土遺物 (9)	121	第138図	第34号住居跡	164
第102図	グリッド出土遺物 (10)	123	第139図	第34号住居跡遺物出土状況	165
第103図	グリッド出土遺物 (11)	125	第140図	第34号住居跡出土遺物	165
第104図	グリッド出土遺物 (12)	126	第141図	第35号住居跡	166
第105図	グリッド出土遺物 (13)	127	第142図	第35号住居跡出土遺物	166

第143図	第2号竪穴状遺構	167	第179図	第10号住居跡・遺物出土状況	202
第144図	第2号竪穴状遺構遺物出土状況	168	第180図	第10号住居跡カマド・遺物出土状況	203
第145図	第2号竪穴状遺構出土遺物	168	第181図	第10号住居跡出土遺物	204
第146図	第3号竪穴状遺構・出土遺物	169	第182図	第16号住居跡	206
第147図	畝状遺構分布図	170	第183図	第19号住居跡	206
第148図	A区畝状遺構と地形	171	第184図	第19号住居跡出土遺物	207
第149図	A区畝状遺構 A、B地点	172	第185図	第20号住居跡・遺物出土状況	208
第150図	A区畝状遺構 C地点	173	第186図	第20号住居跡遺物出土状況	209
第151図	C区畝状遺構と地形	176	第187図	第20号住居跡出土遺物	210
第152図	C区畝状遺構 A、B地点	177	第188図	第21号住居跡	211
第153図	C区畝状遺構 C地点上層	178	第189図	第21号住居跡出土遺物	212
第154図	C区畝状遺構 C地点下層	179	第190図	第22号住居跡	213
第155図	畝状遺構出土遺物	181	第191図	第22号住居跡遺物出土状況	214
第156図	第1号住居跡	182	第192図	第22号住居跡出土遺物	214
第157図	第1号住居跡カマド	183	第193図	第23号住居跡	215
第158図	第1号住居跡遺物出土状況	184	第194図	第23号住居跡出土遺物	215
第159図	第1号住居跡出土遺物(1)	185	第195図	第24号住居跡・出土遺物	217
第160図	第1号住居跡出土遺物(2)	186	第196図	第25号住居跡・遺物出土状況	218
第161図	第2号住居跡	187	第197図	第25号住居跡カマド	219
第162図	第2号住居跡出土遺物	188	第198図	第25号住居跡出土遺物(1)	220
第163図	第3号住居跡	188	第199図	第25号住居跡出土遺物(2)	221
第164図	第3号住居跡カマド・遺物出土状況	189	第200図	第26号住居跡	222
第165図	第3号住居跡出土遺物	189	第201図	第26号住居跡出土遺物	223
第166図	第4号住居跡・遺物出土状況	190	第202図	第27号住居跡	225
第167図	第4号住居跡出土遺物	191	第203図	第27号住居跡出土遺物	225
第168図	第5号住居跡	192	第204図	第28号住居跡	226
第169図	第5号住居跡カマド・遺物出土状況	193	第205図	第28号住居跡カマド1、2	227
第170図	第5号住居跡出土遺物	194	第206図	第28号住居跡カマド3	228
第171図	第7号住居跡	195	第207図	第28号住居跡出土遺物	229
第172図	第7号住居跡出土遺物	195	第208図	第29号住居跡・遺物出土状況	231
第173図	第9a号住居跡・出土遺物	196	第209図	第29号住居跡カマド・遺物出土状況	232
第174図	第9b号住居跡	197	第210図	第29号住居跡出土遺物	233
第175図	第9b号住居跡遺物出土状況	198	第211図	第30号住居跡	235
第176図	第9b号住居跡カマド・遺物出土状況	199	第212図	第30号住居跡出土遺物	236
第177図	第9b号住居跡出土遺物(1)	200	第213図	第31号住居跡・遺物出土状況	237
第178図	第9b号住居跡出土遺物(2)	201	第214図	第31号住居跡出土遺物	238
			第215図	第32号住居跡	239

第216図	第32号住居跡出土遺物	239
第217図	第33号住居跡・遺物出土状況	240
第218図	第33号住居跡出土遺物	241
第219図	第36号住居跡	242
第220図	第1号掘立柱建物跡・出土遺物	243
第221図	第1号竪穴状遺構	244
第222図	第7号竪穴状遺構	245
第223図	奈良・平安時代の土壌	247
第224図	土壌出土遺物	248
第225図	第1、7号井戸跡	249
第226図	第1、7号井戸跡出土遺物	249
第227図	土壌(1)	251
第228図	土壌(2)	253
第229図	土壌(3)	255
第230図	土壌(4)	257
第231図	土壌(5)	259
第232図	土壌出土遺物(1)	260
第233図	土壌(6)	261
第234図	土壌出土遺物(2)	262
第235図	土壌出土遺物(3)	263
第236図	土壌(7)	263
第237図	溝跡区割り図	264
第238図	溝跡(1)	265
第239図	溝跡(2)	266
第240図	溝跡(3)	267
第241図	溝跡(4)	268
第242図	溝跡(5)	269
第243図	溝跡(6)	270
第244図	溝跡(7)	271
第245図	溝跡(8)	272
第246図	溝跡(9)	273
第247図	溝跡(10)	274
第248図	溝跡(11)	275
第249図	溝跡(12)	276
第250図	溝跡(13)	277
第251図	溝跡(14)	278
第252図	溝跡(15)	279

第253図	第1号溝跡出土遺物(1)	280
第254図	第1号溝跡出土遺物(2)	281
第255図	第2号溝跡出土遺物	283
第256図	第5、6、9号溝跡出土遺物	284
第257図	第10～13号溝跡出土遺物	286
第258図	第21号溝跡出土遺物(1)	288
第259図	第21号溝跡出土遺物(2)	289
第260図	第23、26、34号溝跡出土遺物	290
第261図	第1号杭列	291
第262図	井戸跡(1)	293
第263図	井戸跡(2)	294
第264図	井戸跡出土遺物(1)	295
第265図	井戸跡出土遺物(2)	296
第266図	第1号性格不明遺構	298
第267図	第2、3号性格不明遺構	299
第268図	性格不明遺構出土遺物	300
第269図	第5号性格不明遺構	300
第270図	第6、7、8号性格不明遺構	301
第271図	ビット(1)	302
第272図	ビット(2)	303
第273図	ビット(3)	304
第274図	ビット出土遺物	304
第275図	グリッド出土遺物(1)	305
第276図	グリッド出土遺物(2)	306
第277図	グリッド出土遺物(3)	307
第278図	旧堤防跡(1)	310
第279図	旧堤防跡(2)	311
第280図	旧堤防跡(3)	312
第281図	暦年較正年代グラフ	315
第282図	縄文時代早期土壌分布図	317
第283図	グリッド出土縄文時代後晩期土器分布図	318

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	7	第35表	A区畝状遺構一覧表	174
第2表	第17号住居跡柱穴一覧表	31	第36表	A区畝状遺構一覧表	175
第3表	第18号住居跡柱穴一覧表	31	第37表	C区畝状遺構一覧表	180
第4表	第17号住居跡出土遺物観察表	32	第38表	畝状遺構出土遺物観察表	181
第5表	第12号住居跡柱穴一覧表	38	第39表	第1号住居跡出土遺物観察表	186
第6表	第15号住居跡柱穴一覧表	38	第40表	第2号住居跡出土遺物観察表	188
第7表	第12、15号住居跡出土遺物観察表	44	第41表	第3号住居跡出土遺物観察表	189
第8表	第12号住居跡出土遺物観察表	45	第42表	第4号住居跡出土遺物観察表	191
第9表	土城出土遺物観察表	61	第43表	第5号住居跡出土遺物観察表	194
第10表	第1号礫集中構成礫計測表	64	第44表	第7号住居跡出土遺物観察表	195
第11表	第2号礫集中構成礫計測表	64	第45表	第9a号住居跡出土遺物観察表	196
第12表	ビット一覧表(1)	65	第46表	第9b号住居跡出土遺物観察表	201
第13表	ビット一覧表(2)	66	第47表	第10号住居跡出土遺物観察表	205
第14表	第11号住居跡柱穴一覧表	72	第48表	第19号住居跡出土遺物観察表	207
第15表	第11号住居跡出土遺物観察表(1)	80	第49表	第20号住居跡出土遺物観察表	210
第16表	第11号住居跡出土遺物観察表(2)	84	第50表	第21号住居跡出土遺物観察表	212
第17表	第13号住居跡柱穴一覧表	86	第51表	第22号住居跡出土遺物観察表	214
第18表	第13号住居跡出土遺物観察表(1)	87	第52表	第23号住居跡出土遺物観察表	215
第19表	第13号住居跡出土遺物観察表(2)	90	第53表	第24号住居跡出土遺物観察表	217
第20表	土城出土遺物観察表	102	第54表	第25号住居跡出土遺物観察表	221
第21表	第1号柱穴列柱穴一覧表	103	第55表	第26号住居跡出土遺物観察表	224
第22表	第2号柱穴列柱穴一覧表	104	第56表	第27号住居跡出土遺物観察表	225
第23表	第1、2号柱穴列出土遺物観察表	105	第57表	第28号住居跡出土遺物観察表	230
第24表	ビット一覧表(1)	108	第58表	第29号住居跡出土遺物観察表	234
第25表	ビット一覧表(2)	109	第59表	第30号住居跡出土遺物観察表	236
第26表	グリッド出土遺物観察表(1)	148	第60表	第31号住居跡出土遺物観察表	238
第27表	グリッド出土遺物観察表(2)	157	第61表	第32号住居跡出土遺物観察表	239
第28表	グリッド出土遺物観察表(3)	158	第62表	第33号住居跡出土遺物観察表	241
第29表	第6号住居跡出土遺物観察表	161	第63表	第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	243
第30表	第8号住居跡出土遺物観察表	163			
第31表	第34号住居跡出土遺物観察表	165	第64表	土城出土遺物観察表	248
第32表	第35号住居跡出土遺物観察表	166	第65表	第1、7号井戸跡出土遺物観察表	249
第33表	第2号竪穴状遺構出土遺物観察表	168	第66表	土城出土遺物観察表(1)	260
第34表	第3号竪穴状遺構出土遺物観察表	169	第67表	土城出土遺物観察表(2)	263

第68表	第1号溝跡出土遺物観察表	282
第69表	第2号溝跡出土遺物観察表	283
第70表	第5、6、9号溝跡出土遺物観察表	285
第71表	第10～13号溝跡出土遺物観察表	287
第72表	第21号溝跡出土遺物観察表	289
第73表	第23、26、34号溝跡出土遺物観察表	290

第74表	井戸跡出土遺物観察表	297
第75表	性格不明遺構出土遺物観察表	300
第76表	ピット出土遺物観察表	304
第77表	グリッド出土遺物観察表	308
第78表	試料の諸元と補正年代	315
第79表	未補正年代	315

写真図版目次

巻頭図版1	長竹遺跡遠景 長竹遺跡近景
巻頭図版2	B区第一面全景 A区畝状遺構A、B地点
巻頭図版3	長竹遺跡出土 犬形土製品 長竹遺跡出土 縄文土器
巻頭図版4	長竹遺跡出土 耳飾り 長竹遺跡第9号住居跡出土土器
図版1	B区縄文時代確認面（下層） C区縄文時代確認面（下層）
図版2	第12、13、15号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版3	第17、18号住居跡、第4号竪穴状遺構、第1号礫集中遺物出土状況
図版4	第50、70、113、121号土壌 C区縄文時代確認面（上層）
図版5	第11号住居跡、第492号土壌、遺物出土状況
図版6	第1号土器埋設遺構、第21、36、37、39、99、106号土壌、遺物出土状況
図版7	B区遺物包含層全景、遺物出土状況
図版8	A区古墳時代～中世確認面（第一面） B区古墳時代～中世確認面（第一面）
図版9	C区古墳時代～中世確認面（第一面） 第1号住居跡
図版10	第1～3号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版11	第4～8号住居跡

図版12	第9 a、9 b号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版13	第10号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版14	第16、19、20、21号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版15	第22、23、25号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版16	第20、25、26号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版17	第28号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版18	第29、30号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版19	第31、33、34号住居跡、カマド、遺物出土状況
図版20	第1、2、4、5、8～10、12号土壌、遺物出土状況
図版21	第13～16、19、76、79、81号土壌、遺物出土状況
図版22	第83、90～93、95、97、166号土壌
図版23	第484、485、487号土壌、第1号掘立柱建物跡、第1～3号竪穴状遺構、遺物出土状況
図版24	第1号杭列、第1、2、10～12号溝跡
図版25	第1号杭列、第2、4、6、10～13号溝跡
図版26	第3、5、6、8～10、13号溝跡
図版27	第13、21、23、24、27、33号溝跡
図版28	A区畝状遺構北、A・B地点、C地点
図版29	A区畝状遺構北、A・B地点、C地点、C

区畝状遺構A・B地点

図版30	C区畝状遺構A・B地点、C地点	図版61	グリッド出土遺物 (23) (24)
図版31	第1～8号井戸跡	図版62	グリッド出土遺物 (25) (26)
図版32	第9～12、19、20号井戸跡、旧堤防跡現況	図版63	グリッド出土遺物 (27) (28)
図版33	旧堤防跡土層断面	図版64	グリッド出土遺物 (29) (30)
図版34	旧堤防跡、第1～3、5号性格不明遺構	図版65	グリッド出土遺物 (31) (32)
図版35	第12、18号住居跡出土遺物	図版66	グリッド出土遺物 (33) (34)
図版36	第11～13号住居跡、第130号土城出土遺物	図版67	グリッド出土遺物 (35) (36)
図版37	第12、13、17号住居跡、第1号土器埋設遺構、第21、28、39、492号土城出土遺物	図版68	グリッド出土遺物 (37) (38)
図版38	第12号住居跡出土遺物 (1) (2)	図版69	グリッド出土遺物 (39) (40)
図版39	第12号住居跡出土遺物 (3) (4)	図版70	グリッド出土遺物 (41) (42)
図版40	第12、15号住居跡出土遺物	図版71	グリッド出土遺物 (43) (44)
図版41	土城、ビット出土遺物	図版72	グリッド出土遺物 (45) (46)
図版42	第11号住居跡出土遺物 (1) (2)	図版73	グリッド出土遺物 (47)
図版43	第11号住居跡出土遺物 (3) (4)	図版74	グリッド出土遺物 (48)
図版44	第11号住居跡出土遺物	図版75	グリッド出土遺物 (49)
図版45	第13号住居跡出土遺物 (1) (2)	図版76	グリッド出土遺物 (50)
図版46	第13号住居跡、土城出土遺物	図版77	第1、3、34、35号住居跡、第2、3号竪穴状遺構出土遺物
図版47	土城、第1、2号柱穴、ビット出土遺物	図版78	第4、5、9a、9b号住居跡出土遺物
図版48	第11～13、17号住居跡、土城、第2号柱穴出土遺物	図版79	第9b、10、19～22号住居跡出土遺物
図版49	グリッド出土遺物 (1) (2)	図版80	第22、23、25号住居跡出土遺物
図版50	グリッド出土遺物 (3) (4)	図版81	第25、26、28、29、31号住居跡出土遺物
図版51	グリッド出土遺物 (5) (6)	図版82	第29、31、33号住居跡、第1、3、7、12号井戸跡出土遺物
図版52	グリッド出土遺物 (7) (8)	図版83	第1、5、9、11、21、23号溝跡出土遺物
図版53	グリッド出土遺物 (9) (10)	図版84	グリッド、第1号溝跡、第27、28号住居跡、ビット出土遺物
図版54	グリッド出土遺物 (11) (12)	図版85	第1、6、10～13号溝跡出土遺物
図版55	グリッド出土遺物 (13) (14)	図版86	第21、26号溝跡、第10、12号井戸跡、第13、81号土城、グリッド出土遺物
図版56	グリッド出土遺物 (15)	図版87	第1、26号住居跡、性格不明遺構、第484、485号土城出土遺物
図版57	グリッド出土遺物 (16)	図版88	第4号井戸跡、第21号溝跡、グリッド出土遺物
図版58	グリッド出土遺物 (17) (18)		
図版59	グリッド出土遺物 (19) (20)		
図版60	グリッド出土遺物 (21) (22)		

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、新たな堤防整備のため、平成16年度から首都圏氾濫区域堤防強化対策事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴う埋蔵文化財の所在及び取り扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成17年1月20日付け利上沿第18号で埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。事業予定区域内には埼玉県指定旧跡と周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な所在状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成17年3月17日付け教文第1780号で回答した。

当該箇所はこの回答の時点では周知の埋蔵文化財包蔵地になっていなかったため、平成21年5月から6月にかけて試掘調査を実施した。その結果、縄文時代を中心とした遺構・遺物が確認された。この箇所は長竹遺跡（No.69-038）として平成21年6月16日、遺跡台帳に登録された。

また、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成21年6月24日付け教文第623-1号で次の内容の回答を行った。

1 埋蔵文化財の所在

名称：長竹遺跡（No.69-038）

種別：集落跡

時代：縄文

所在地：加須市大字大越字長竹他

員数：1

2 手続

工事予定地内には別図のとおり上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事を行う場合には、工事着手前に文化財保護法第94条の規程による発掘通知を提出してください。

3 取り扱いについて

別図「発掘調査を要する区域」については工事計画上やむを得ず現状の変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

同「今後試掘調査を要する区域」については、今回の調査結果から埋蔵文化財の所在が予想されます。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課と協議の上、試掘調査等を実施してください。

その取扱いについて協議を重ねたが、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。そのための発掘調査は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時。現在は公益財団法人）が受託することになった。

利根川上流河川事務所長からの文化財保護法第94条第1項の規程に基づく発掘通知及び事業団理事長からの第92条第1項の規程に基づく発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次の通りである。

発掘通知に対する勧告：

1次調査：平成22年1月9日付け教文第4-1001号

2次調査：平成23年3月18日付け教文第4-1404号

発掘調査届に対する指示通知

1次調査：平成22年4月23日付け教文第2-8号

2次調査：平成23年4月14日付け教文第2-7号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

長竹遺跡の発掘調査は、平成22年度（第1次）・平成23年度（第2次）に実施した。調査対象面積は、8,067㎡である。

平成22年度（第1次調査）

長竹遺跡第1次の発掘調査は、平成22年5月1日から平成23年3月31日まで、3,289㎡を対象に実施した。調査範囲はA区第一面の南半・B区の第一、二面である。

5月中旬に調査区の保護と安全確保のため、囲柵工事を行い、発掘事務所を設置した。

6月上旬から重機による表土除去をB区で開始した。その後、人力による遺構確認作業に着手し、遺構精査を実施した。

6月中旬に基準点測量を業者に委託し、基準杭を打設した。これを基に断面図・平面図等を作成し、写真撮影を行った。

8月中旬に重機により第一面をさらに掘削し、遺構確認・精査を行った。

9月中旬にB区第一面の遺構精査・記録類の作成を終了し、空中写真撮影を行った。

10月中旬には重機による表土除去をA区で開始し、人力による遺構確認・精査を実施した。下旬に基準杭を打設した。

11月上旬にはB区第二面の調査のため、重機による上層土の除去を行った。

12月上旬に基準杭を打設した。B区全面に広がる遺物包含層を全面的に掘り下げたことから、2月上旬に再度基準点を打設した。その後、遺構確認・精査を行った。

2月下旬に調査をほぼ終了し、空中写真撮影を行った。

3月上旬までに遺構精査・記録作業を終了し、B区の埋戻しを行った。3月31日にすべての作業を終了した。

平成23年度（第2次調査）

長竹遺跡第2次の発掘調査は、平成23年4月1日から平成24年3月31日まで、4,778㎡を対象に実施した。調査範囲はA区第一面の北半・C区の第一、二面である。

4月中旬に囲柵工事を行い、中旬からC区で重機による表土除去を行った。表土除去後、基準杭を打設した。その後人力による遺構の確認・精査を開始した。

6月下旬にC区第一面の遺構精査・記録類の作成を終了し、空中写真撮影を行った。その後、C区第二面まで重機による掘削を行い、C区第二面の遺構確認・精査を行った。

7月下旬に基準杭を打設した。

9月下旬にはC区第二面の調査をほぼ終了し、空中写真撮影を行った。

10月中旬に記録類の作成を終了し、C区の埋戻しを行った。

11月上旬から重機による表土掘削をA区で開始した。中旬に基準杭を打設した。

12月中旬には重機による掘り下げを再度行った。

1月中旬にA区第一面の調査を終了し、空中写真撮影を行った。

1月下旬にA区第一面を重機で掘削し、A区第一面下層の調査を行った。3月下旬までに遺構精査・記録作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

長竹遺跡の整理・報告書作成作業は平成24～26年度に実施した。

平成24年度

平成24年10月1日から平成25年3月29日まで実施した。平成24年度は、古墳時代～中近世の遺構と遺物を対象とした。

10月当初から、遺物の水洗・注記作業を行った。

その後、コンテナ87箱分の遺物について接合・復元作業を行った。

11月から遺構図面の修正、第二原図の作成を行った。作成した第二原図をスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、遺構図版の版下を作成した。

1月から実測・拓本の採取を行った。遺物の機械実測には、3スペース、オルソイメージャー等を使用した。

2月から遺物実測図のトレースを行い、図版作成を行った。

2月中旬から作成した版下をもとに原稿執筆を行った。

2月下旬に遺物の写真撮影と版組を行い、写真図版を作成した。

平成25年度

平成25年6月1日から平成26年3月31日まで実施した。平成25年度は、縄文時代の遺構と遺物を対象とした。

6月当初から遺物の水洗・注記作業を行った。その後、83箱分の遺物について接合・復元作業を行った。

6月中旬に掲載遺物を抽出し、実測・拓本の採取を行った。遺物の機械実測には、3スペース、オルソイメージャー等を使用した。

6月下旬から遺構図面の修正、第二原図の作成を行った。第二原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、遺構図のデジタルトレースを行った。

7月上旬から遺物実測図のトレースを行い、遺物版下図の作成に着手した。

10月から遺構写真図版の版組を行った。遺物の写真撮影と版組を行い、写真図版を作成した。

これらの作業と併行して原稿執筆、編集作業を行った。

平成26年度

平成26年度4月1日から4月30日まで実施した。

4月当初から原稿執筆と編集作業を行った。

4月末に原稿を印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、平成26年6月25日に報告書を発行した。

図面や写真等の記録類や遺物は、4月末に整理・分類の上、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成22年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調 査 部 副 部 長	昼 間 孝 志
常務理事兼総務部長	萩 元 信 隆	主幹兼調査第一課長	富 田 和 夫
総 務 部		主 査	岩 瀬 譲
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	主 査	黒 坂 禎 二
総 務 課 長	田 中 雅 人	主 査	吉 田 稔
調 査 部		主 査	大 屋 道 則
調 査 部 長	小 野 美代子	主 事	大 和 田 暁

平成23年度（発掘調査）

理 事 長	藤 野 龍 宏	調査監兼調査第一課長	富 田 和 夫
常務理事兼総務部長	根 本 勝	主 査	黒 坂 禎 二
総 務 部		主 査	吉 田 稔
総 務 部 副 部 長	金 子 直 行	主 査	大 屋 道 則
総 務 課 長	矢 島 将 和	主 査	渡 辺 清 志
調 査 部		主 事	堀 内 紀 明
調 査 部 長	小 野 美代子	主 事	青 木 弘
調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫	主 事	中 泉 雄 太

平成24年度（報告書作成）

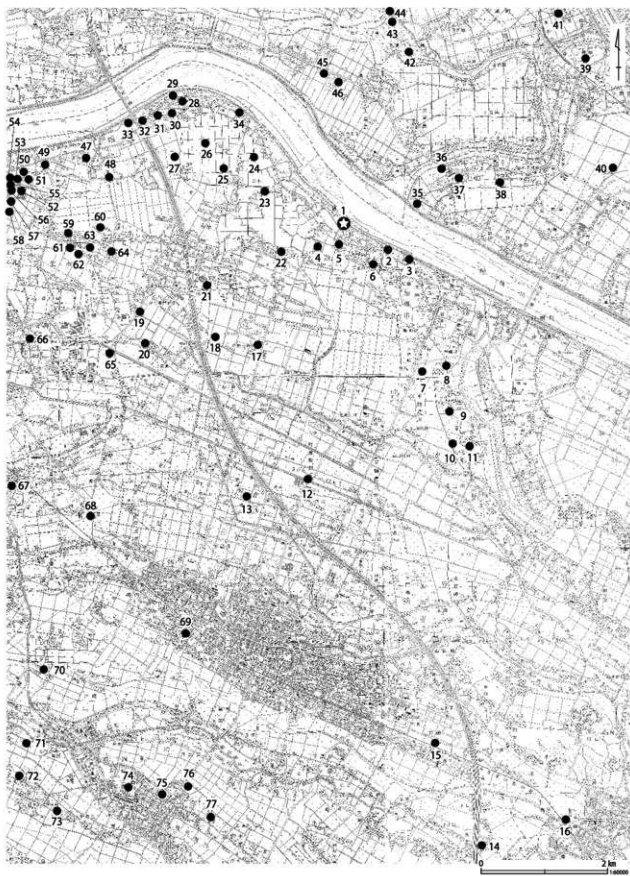
理 事 長	中 村 英 樹	調 査 部	
常務理事兼総務部長	根 本 勝	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部		調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	主幹兼整理第二課長	赤 熊 浩 一
総 務 課 長	矢 島 将 和		

平成25年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹	調 査 部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部		調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫
総 務 部 副 部 長	富 田 和 夫	調査監兼調査第二課長	赤 熊 浩 一
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主幹兼整理第一課長	黒 坂 禎 二
		主 事	矢 部 暁

平成26年度（報告書作成）

理 事 長	樋 田 明 男	調 査 部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総 務 部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総 務 部 副 部 長	瀧 瀬 芳 之	調査監兼整理第一課長	黒 坂 禎 二
総 務 課 長	藤 倉 英 明	主 査	上 野 真由美



第2図 周辺の遺跡分布

これらの周辺には大小の自然堤防が形成され、さらに氾濫で刻まれた新たな流れがそれを浸食、分断し、地形を一層複雑に見せている。

利根川に沿う長竹遺跡の調査区で最も下流側にあたるC区は、その南東端で急激に台地が下がる。今回の調査は利根川右岸の堤防幅によるが、これに先立ち羽生市村君から久喜市栗橋までの約13 kmにわたって埋蔵文化財の所在確認調査が行われている。その結果によると、村君地区より断続的に確認できたローム台地は長竹遺跡を最後に途切れ、より下流側では確認されていない。

一方、長竹遺跡の対岸となる加須市北川辺地区

の北を流れる合の川は、中川低地を開析した渡良瀬川の蛇行跡を利根川が逆流したとされる。このことから、埋没台地の東端にあたる長竹遺跡は、開析谷由来の中川低地と埋没台地を覆う加須低地の境に立地するということになる。

1947年のカスリーン台風では遺跡より下流約6 kmの右岸堤防が決壊した。その濁流に行く手を阻まれた水流が行田市北部にまで溢れる中、小高い大越地区は冠水を免れた。豪雨の中、堤防下を伝う漏水が決壊を招かぬよう地区の住民が補強に力を注いだのは、台地が途切れた遺跡から100 mほど下流の堤防だったという。

2. 歴史的環境

さて、このような地形環境のために、遺跡付近における古代以前の周知遺跡は極めて少なく、旧石器の遺跡はこれまで皆無であった。

縄文時代の遺跡は、加須市内でも埋没度が少ない旧騎西地区の萩原遺跡（75）で中後期の集落跡が調査されている（嶋村2008）。また、長竹遺跡に近い羽生市北東部では、前期や中期の遺跡が数箇所知られているが、本格的な調査には及んでいない。唯一、長竹遺跡から利根川沿いに約2 km上流の屋敷裏遺跡（34）では、同じ堤防関連の調査で中後期の小規模な集落が発見されている。

さらに3 kmほど上流側の発戸遺跡（49）では、

土取りで土面をはじめ多量の後晩期遺物が出土した（栗原1970）。遺跡の西限となる現道は、中心と目される神社を囲み半円を描く。かつて地表にあった環状盛土遺構を避けて道筋が定まったのだろう。

この他、長竹遺跡の南西約6 kmに所在する羽生市町屋本村遺跡（68）では、調整池掘削の際に大量の後晩期遺物が出土している。そして、約4 km南の加須市中樋遺川地区には、水田から後晩期遺物が数多く出土した地点がある。さらに、約4 km北の利根川左岸には山内清男が採集資料を紹介した群馬県板倉町板倉遺跡（44）（山内1941）、その

第1表 周辺の遺跡一覧表

1 長竹遺跡	14 水深遺跡	27 砂田遺跡	40 太田遺跡	53 尾崎古墳群 8号墳	66 北谷遺跡
2 宮西遺跡	15 花崎遺跡	28 末明寺古墳	41 一筆貝塚	54 尾崎古墳群 5号墳	67 葛瀬氏館
3 宮東遺跡	16 鷲宮神社境内遺跡	29 東畑遺跡	42 小保呂第1貝塚	55 尾崎古墳群 4号墳	68 町屋本村遺跡
4 別所遺跡	17 惣達遺跡	30 谷田遺跡	43 小保呂第2貝塚	56 尾崎古墳群 6号墳	69 礼波遺跡
5 大越古墳群	18 外勲人馬遺跡	31 稲荷塚古墳	44 板倉遺跡	57 尾崎古墳群 2号墳	70 戸崎城跡
6 稲荷塚古墳	19 内野遺跡	32 御前塚古墳	45 辻遺跡	58 瀬原院古墳	71 道智代館跡
7 石子塚古墳	20 高橋遺跡	33 米の宮遺跡	46 登戸遺跡	59 熊野塚古墳	72 下崎古墳時代遺跡
8 穴ヶ塚古墳	21 内谷遺跡	34 屋敷裏遺跡	47 風張遺跡	60 大口遺跡	73 中郷遺跡
9 蔵原古墳	22 三田ヶ谷本村遺跡	35 飯坂遺跡	48 上村君冲遺跡	61 天神山古墳跡	74 修理山遺跡
10 浅間塚古墳	23 堀遺跡	36 須賀遺跡	49 発戸遺跡	62 西原遺跡	75 萩原遺跡
11 稲荷塚遺跡	24 本宮遺跡	37 山越遺跡	50 発戸漆畑遺跡	63 稲荷山古墳跡	76 騎西城跡
12 鶴ヶ塚古墳	25 銅田遺跡	38 麦倉遺跡	51 尾崎古墳群 9号墳	64 外之内遺跡	77 騎西城武家屋敷跡
13 下谷遺跡	26 天王遺跡	39 藤棚遺跡	52 尾崎古墳群 3号墳	65 天神塚古墳	

北東約4kmには栃木市藤岡神社遺跡があり、焼土敷きの住居跡や多くの後晩期遺物が出土している(手塚2001)。

このように、加須埋没台地の縄文時代中期以前の概要は不明確であるが、後晩期に関しては、館林台地を含めた既知の遺跡の分布状況から、4～6kmごとに集落が点在する様相が想像できる。

弥生時代から古墳時代前半にかけては、周知の遺跡が極端に少ない。本格的な調査に及んでいるのは、長竹遺跡と同じ堤防関連で発見された加須市宮東遺跡(3)と、屋敷裏遺跡の二遺跡に過ぎない。前者では密に分布する古墳中期の住居跡群が、後者では弥生後期から古墳前期にかけての集落と周溝墓等が調査されている。

古墳時代後期になると、加須低地有数の前方後円墳である永明寺古墳(28)を盟主とする村君古墳群、長竹遺跡の1kmほど南東の大越古墳群(5)が営まれ、いずれも安定した微高地上に立地する。

これらの古墳群築造を支えた集落跡としては、屋敷裏、宮東遺跡がある。また近くに古墳群はないものの、利根川対岸の飯積遺跡(35)では砂層中に遺構が密集する集落跡が調査されている。このうち屋敷裏遺跡では、住居跡内から脚付の須恵器長頸壺や短頸壺が出土しており、村君古墳群被葬者層との関わりを想定することもできる。また、飯積遺跡では、利根、渡良瀬、鬼怒三大河の旧流路を伝った周辺国域の土師器が幅広く併用されており、軟弱地盤と水害を押して水陸の要衝に踏み留まった集落であったことが示されている(田中2007)。

同じ動機は屋敷裏、長竹、宮西(2)、宮東遺跡の古代集落にも引き継がれ、特に今回報告の長竹遺跡では、出土した須恵器の産地からより広域での交流が窺える。また、宮東遺跡では大規模な掘立柱建物跡が見つかっており、大越地区で隣接する長竹、宮西遺跡との際だった住居跡規模の違いは、遺跡の性格の違いを示唆するものであろう。

中世の大越地区は下野国小山を本拠とする小山氏の縁故の地となる。宮西遺跡の周辺には、小山氏第二代朝政の墓所とされる宝篋印塔が残されており、隣接する徳性寺はその祈願所であったと伝えられている。朝政は『吾妻鏡』に多出する鎌倉幕府の有力武士であるが、大越地区に関わる記録は、伝えられていない。

大越地区のその後は太田荘に属した。長竹遺跡では鎌倉時代末と室町時代初頭の板碑が捨てられた土壌や墓域、堤防法尻の溝が構築されており、中世後半には地区を護る堤が築かれていたことが判明した。戦国時代以前の東国で築堤のような労働集約を可能ならしめたのは、有力武士の強い統治力がその背景にあったのは言うまでもない。

近世に至ると、治水、新田開発、舟運の利便を図るため、徳川幕府により利根川東遷事業が着手された。既存河川の締め切りや付け替えを繰り返し、17世紀半ばには現代の流れが確定した。このうち浅間川を締め切った堰堤跡が外野遺跡であり、周辺の堤防も近世を通して増修築が重ねられたことが、長竹遺跡の調査で判明している。

利根川東遷により両毛、常総、そして武蔵の舟運が発達したのは周知のことである。羽生領となった大越村では黒田、鈴木からなる大越河岸が宮東遺跡の直近に設けられ、旅籠や飯屋が並ぶ河岸場は加須、羽生、行田に及ぶ物資の集散地となり、武蔵北東部有数の物流拠点として栄えた。

だが、1902年の東武鉄道延伸や陸上交通の発達により、河岸は次第に衰え、1910年の関東大水害を境に大越に訪う船は激減した。河岸を起点とし、明治初期には荷船十六艘、渡船二艘、水害予備船三十艘を擁した大越(大久保)の渡しも衰退を免れず、1972年の利根大橋開通とともに廃されたのである。

Ⅲ 遺跡の概要

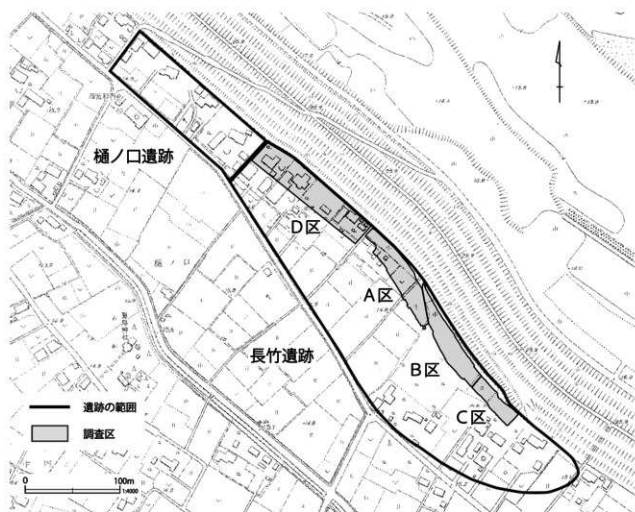
長竹遺跡は平成22年度から調査を開始し、現在（平成26年度）も継続している。例言のとおり、本書では平成22・23年度に行った第1・2次調査のうち、A区からC区にわたる古墳時代以降の成果と、第5図に示したNグリッド以南における縄文時代面での成果を合わせて報告する。

前章でふれたとおり、遺跡は地盤の沈降と氾濫により膨大な埋土に覆われていた。第4図に基本土層を示したが、Ⅰ層からⅣ層までの分層に苦労するような河川由来の氾濫土である。それぞれ別次の調査となったため、図示した各地点の詳しい

対比は不可能だが、概ねⅠ層が中世以降、Ⅱ層が古代後半、Ⅲ層が古代前半、Ⅳ層が弥生から古墳時代の堆積土と見なすことができる。

一部の堤防跡等を除き、この氾濫土における調査は、Ⅱ層からⅢ層上面で識別される10世紀の集落を目安に最初の調査面を設定し、8・9世紀、そして古墳時代後期の遺構を確認しながら順次調査面を掘り下げた。

一方、Ⅴ・Ⅵ層は関東ローム層由来の堆積土で、ひととき黒いⅤ層は特にB区で縄文後晩期の遺物を多く含み、Nグリッドライン付近に広がる湾入



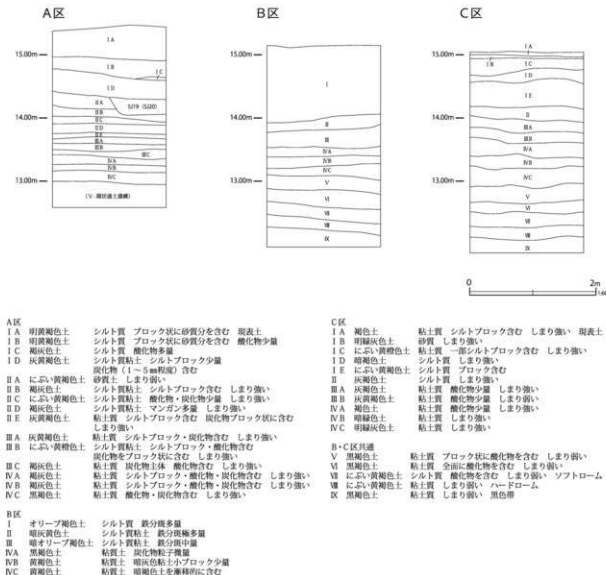
第3図 遺跡位置図

低地をはさんでA区を主体に広がる同期の環状盛土遺構と対峙する包含層となる。下位はⅦ層がソフトローム、Ⅸ層が黒色帯となるが、これらの位置づけについては今後発刊される報告に譲る。

Nグリッド以南の縄文時代の遺構は、下層のⅦ層上面では住居跡4軒、竪穴状遺構1基、土壌82基、礫集中2箇所、ピット227基が検出されている。B区側で見つかった住居跡は中期～晩期で、C区側で見つかった竪穴状遺構や土壌は早期が中心であった。

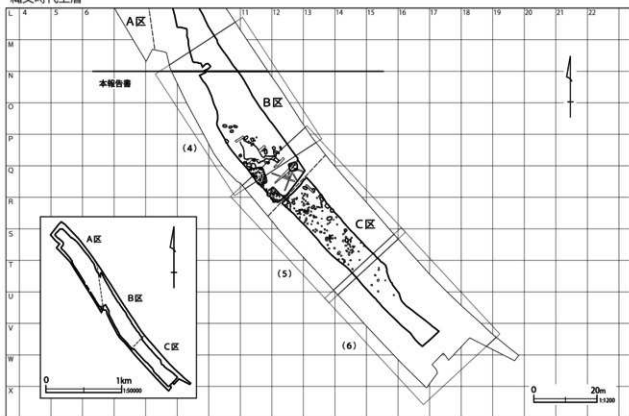
これに対し、VI層上面では住居跡2軒、土器埋設遺構1基、土壇37基、柱穴列2列、ビット196基が確認され、これらはすべて晩期安行式期の所産であった。

氾土の下層で見つかった古墳時代の遺構は住居跡4軒、竪穴状遺構2基、畝状遺構2箇所である。A区の畝状遺構は縄文時代の地形傾斜に沿っていた。その上層に構築された奈良・平安時代の遺構は、住居跡26軒、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基、土壇11基、井戸跡2基が検出された。

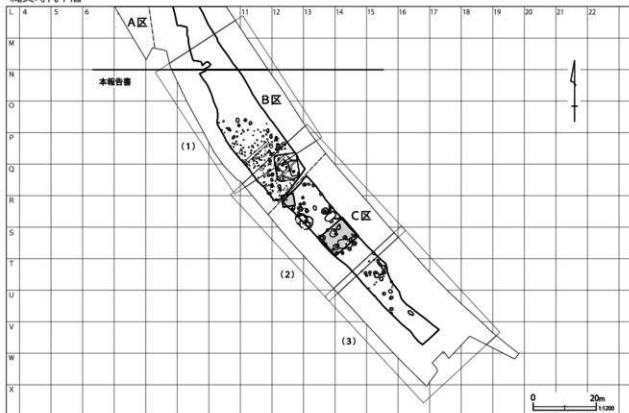


第4图 基本土層

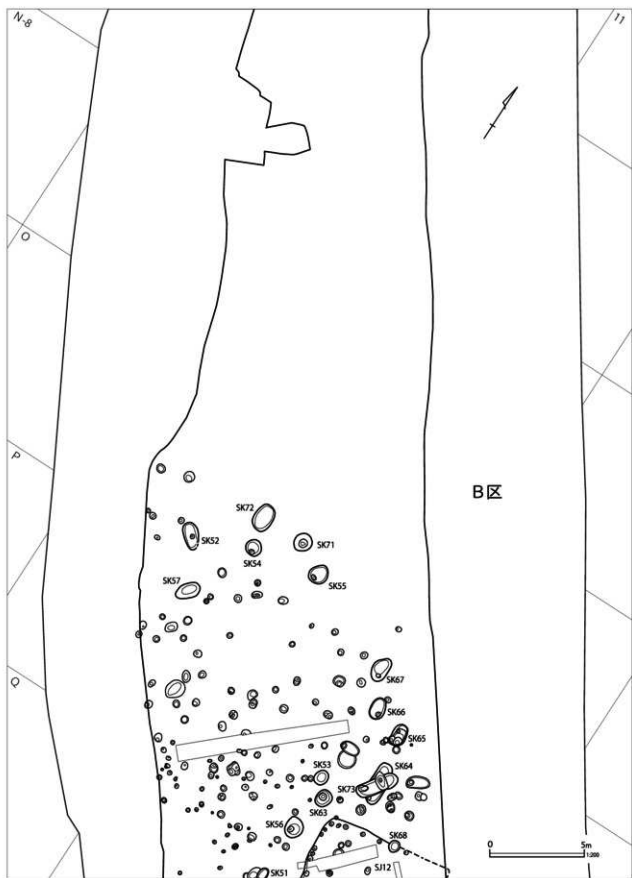
縄文時代上層



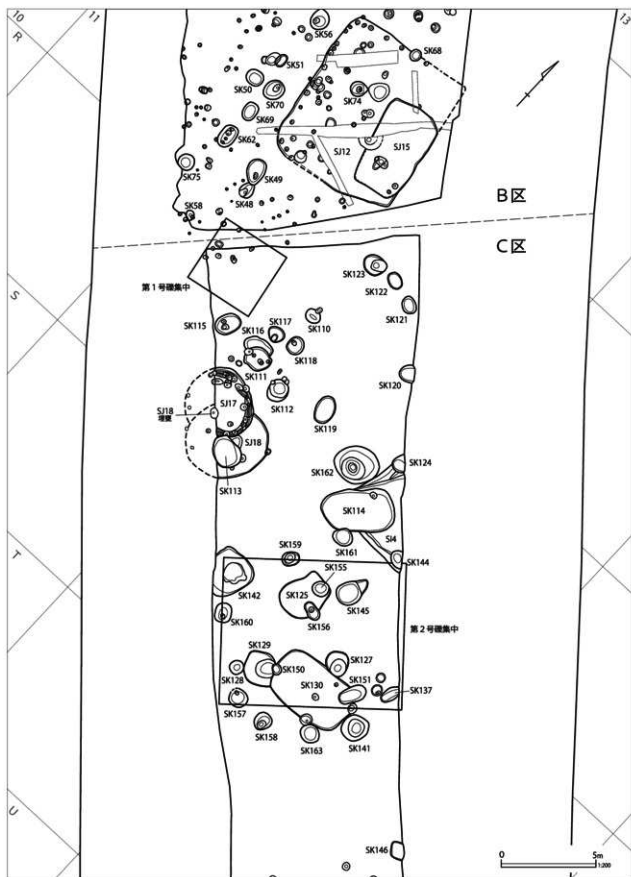
縄文時代下層



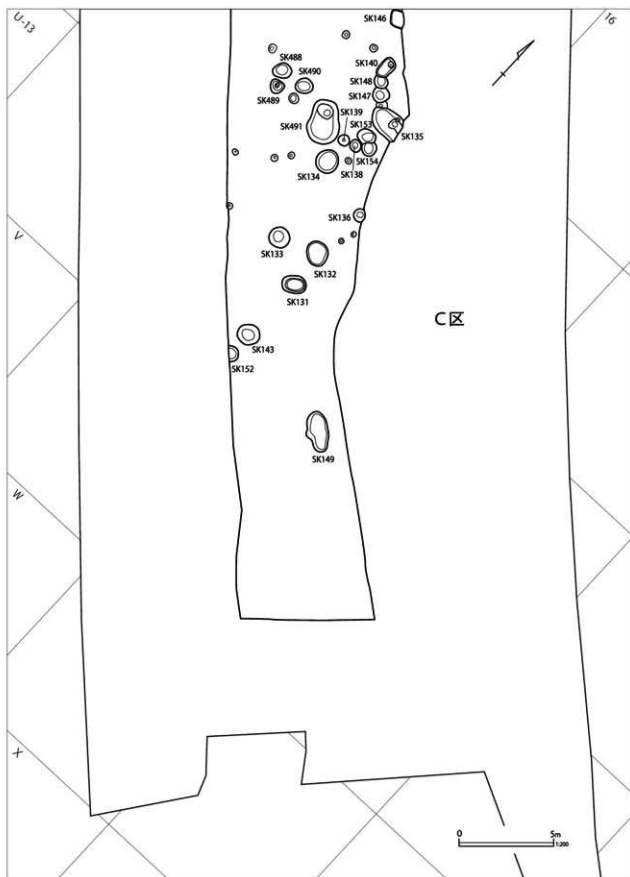
第5図 縄文時代の遺構全体図(上層、下層)



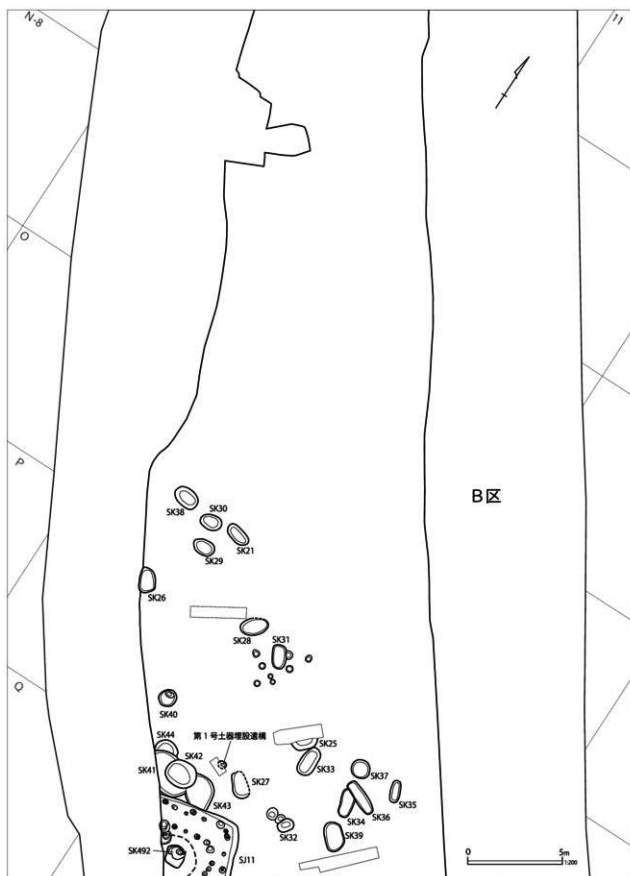
第6図 縄文時代の遺構(1)B区下層



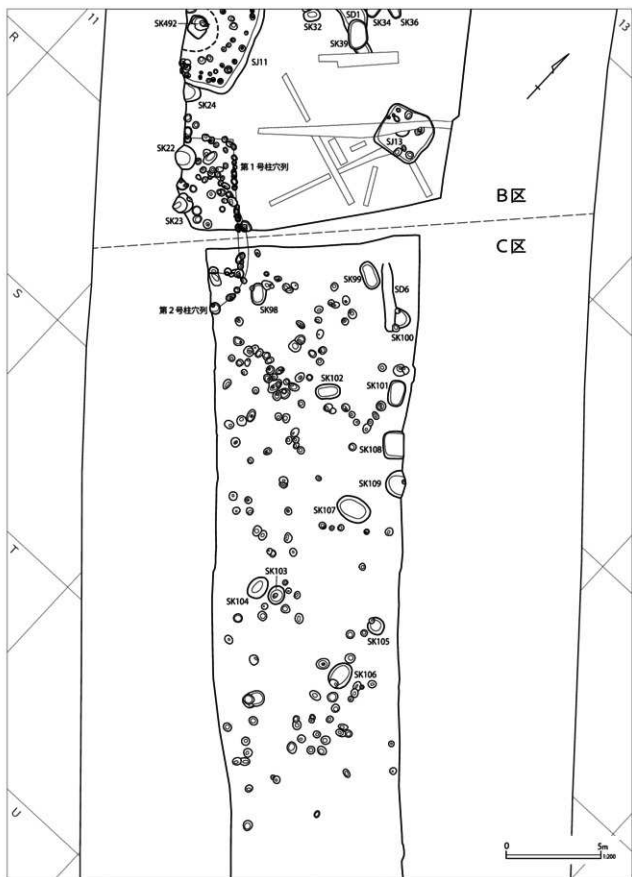
第7図 縄文時代の遺構(2) B、C区下層



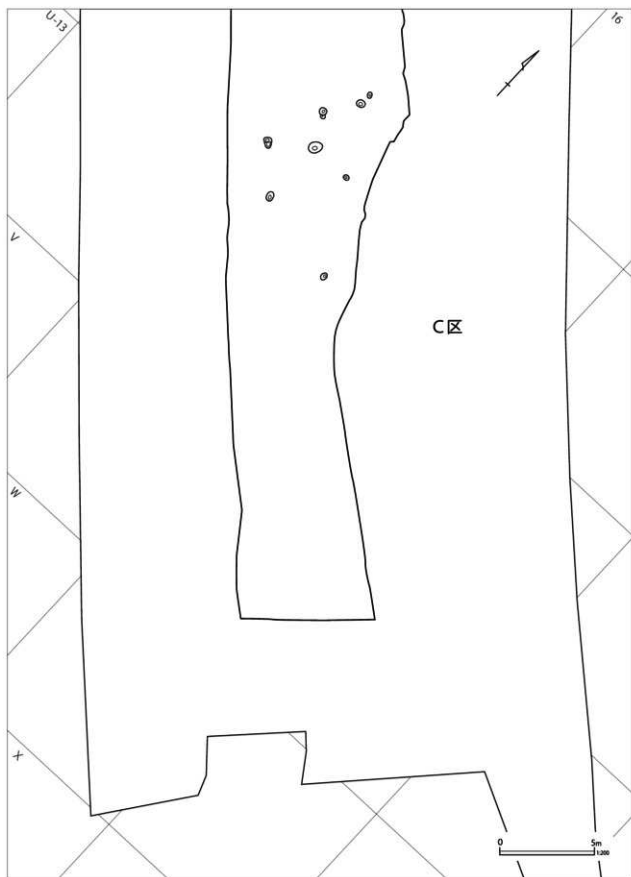
第8図 縄文時代の遺構(3)C区下層



第9図 縄文時代の遺構(4) B区上層



第10図 縄文時代の遺構(5) B、C区上層

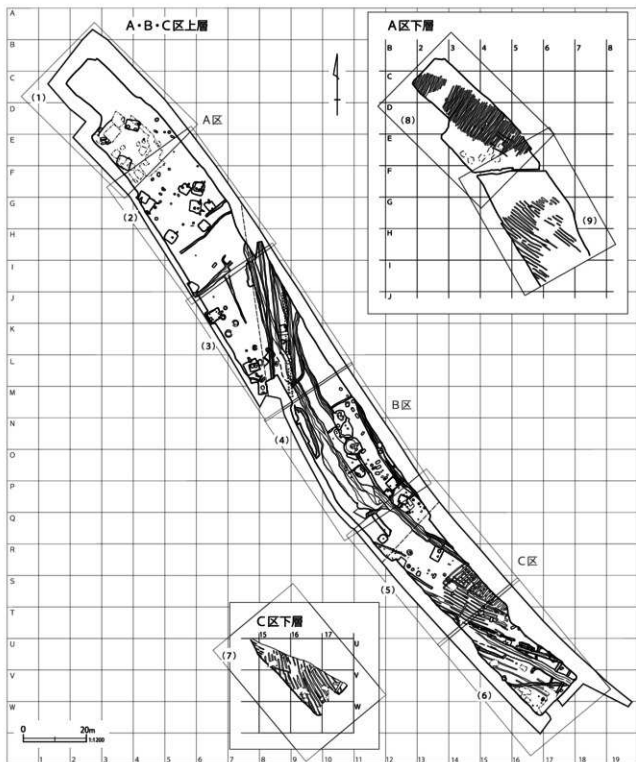


第11図 縄文時代の遺構(6) C区上層

縄文時代の地形は既に埋もれ、平坦な土地に住居跡が分布する。

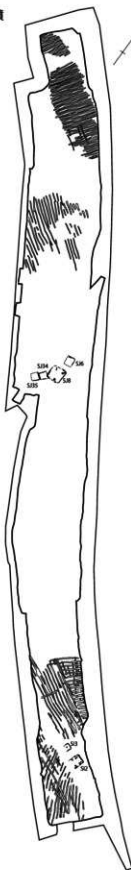
中近世の遺構は、土壌73基、溝跡40条、杭列1列、井戸跡12基、性格不明遺構7基、ピット83基、

旧堤防跡1箇所がある。弧を描く溝跡は堤防の法尻溝である。弧の内側の土壌では中世の板碑が出土し、外側では昭和初期に打ち込まれた杭列が残る。堤防が徐々に拡大された様子が窺える。

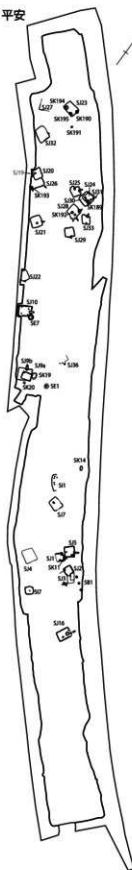


第12図 古墳時代以降の遺構全体図

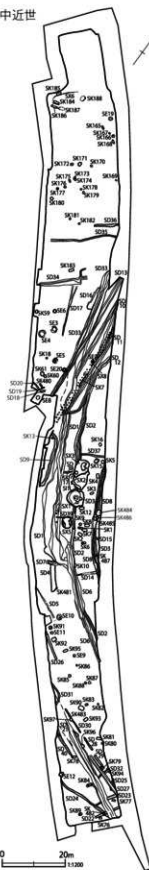
古墳



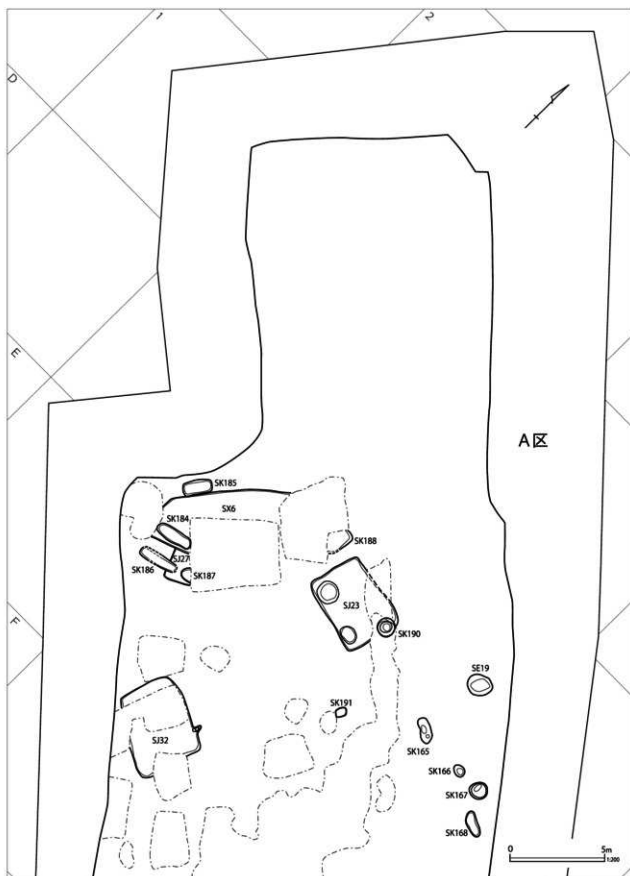
奈良・平安



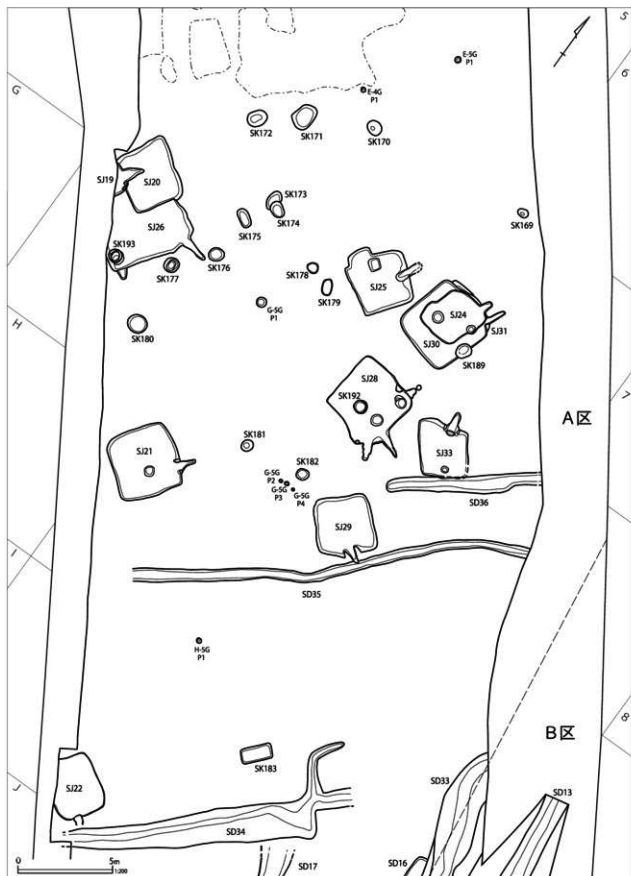
中近世



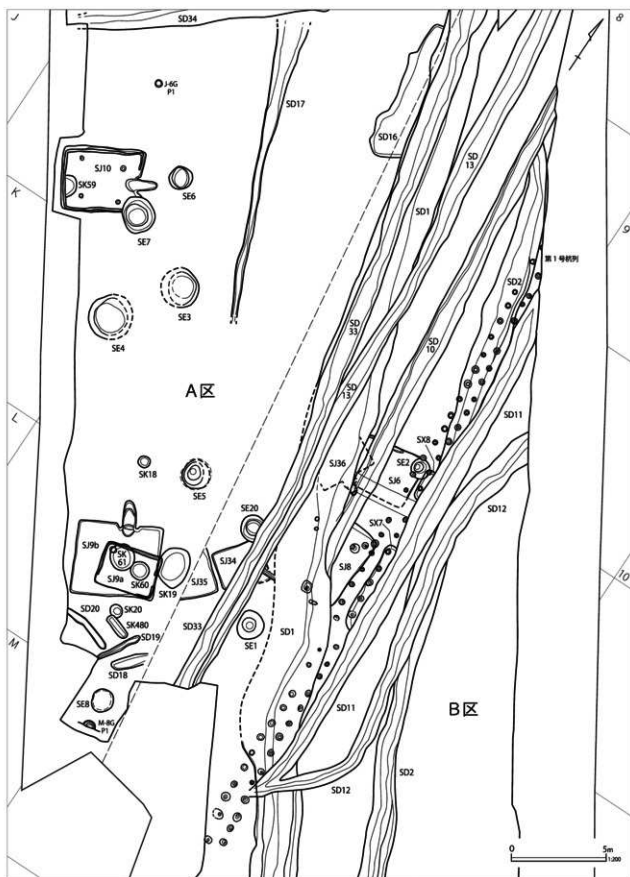
第13図 古墳時代以降の時期別遺構全体図

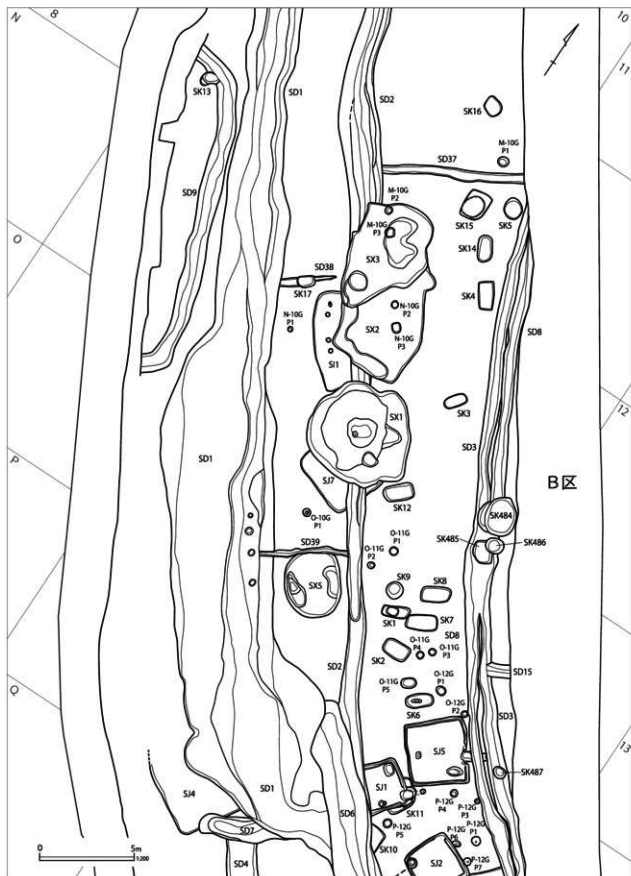


第14図 古墳時代以降の遺構(1) A区上層

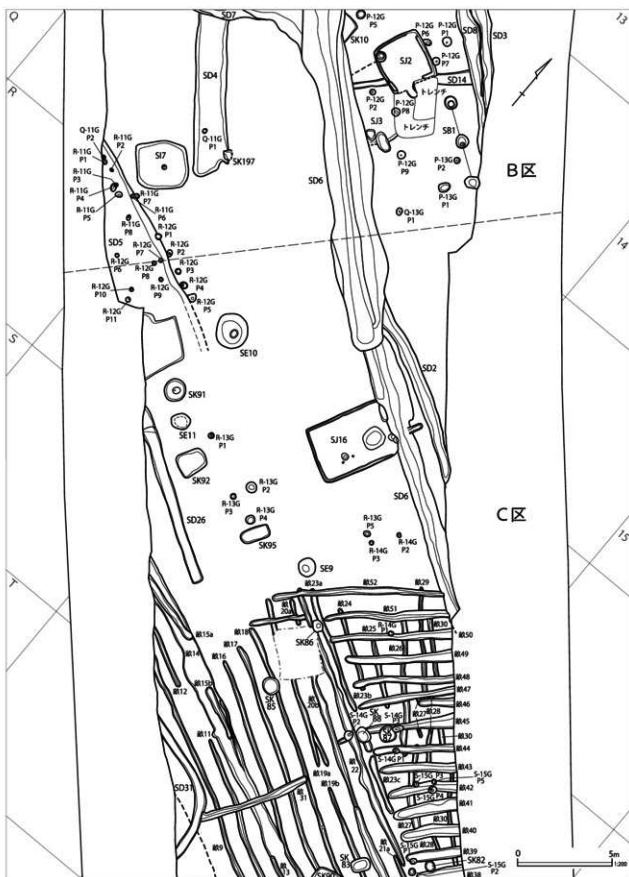


第15図 古墳時代以降の遺構(2) A、B区上層

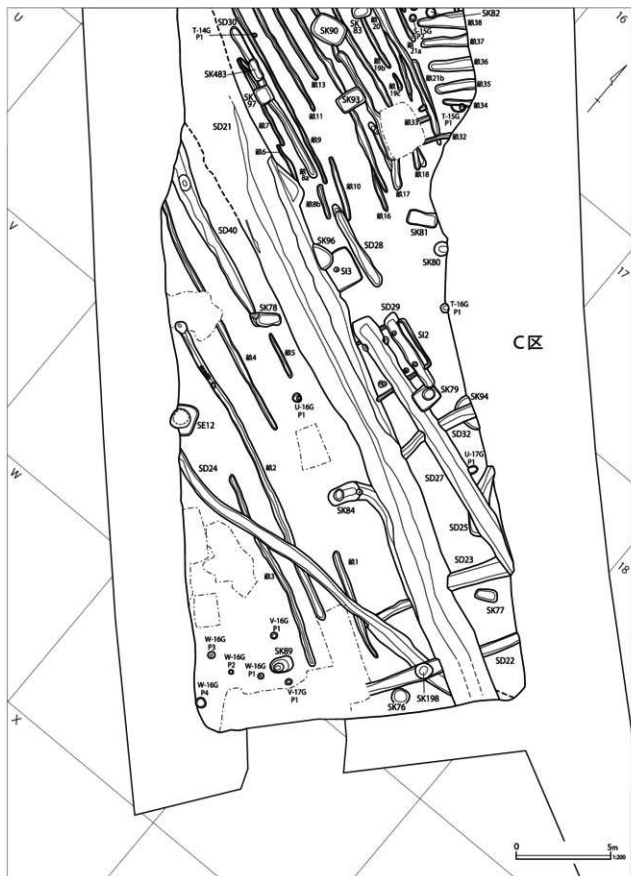




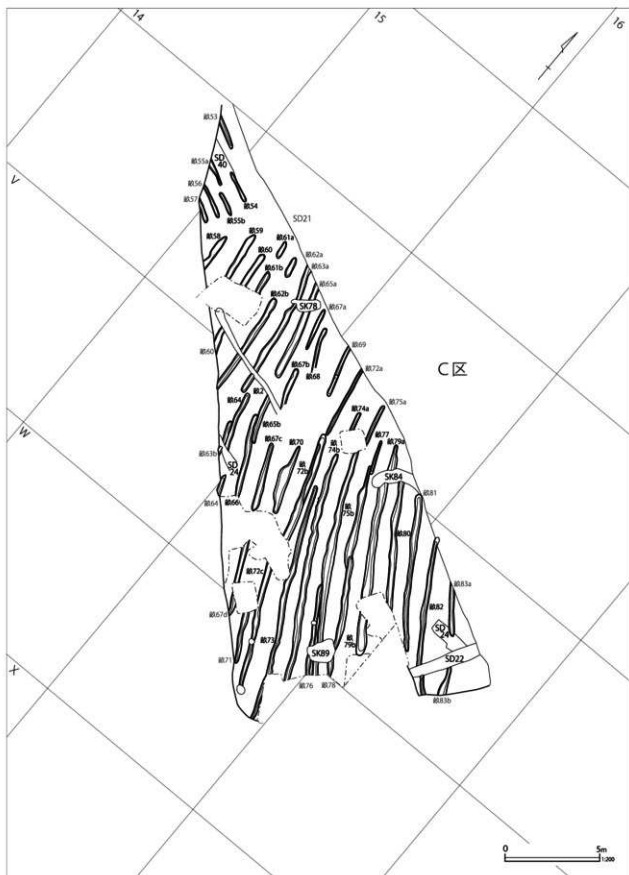
第17図 古墳時代以降の遺構(4) B区上層



第18図 古墳時代以降の遺構(5) B、C区上層



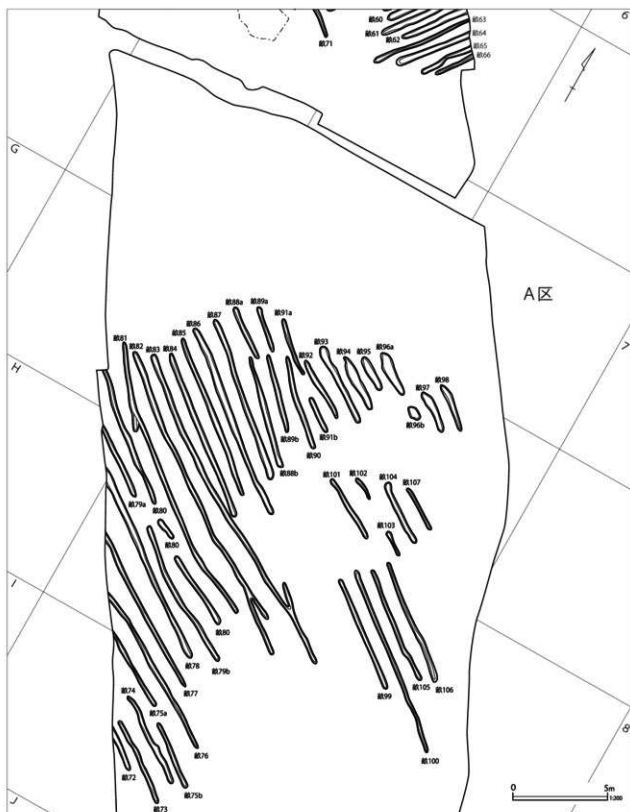
第19図 古墳時代以降の遺構(6) C区上層



第20図 古墳時代以降の遺構(7) C区下層



第21図 古墳時代以降の遺構(8) A区下層



第22図 古墳時代以降の遺構(9) A区下層

IV 縄文時代の遺構と遺物

1. 第二面下層の遺構と遺物

縄文時代の遺構は基本土層Ⅵ層上面（第二面上層）とⅦ層上面（第二面下層）から検出された。

ここでは、下層面において検出された遺構と遺物について述べる。下層面では、上層面で不明確であった遺構も検出されているため、すべての遺構が上層より古いということではない。

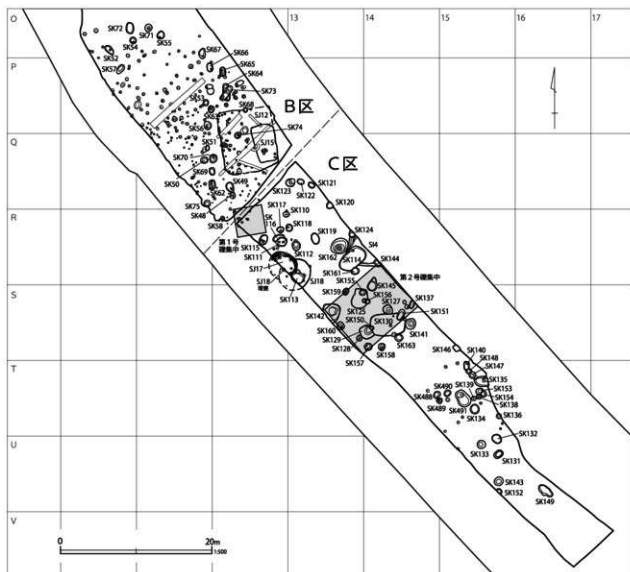
第二面下層からは、縄文時代中期（加曽利EⅣ式期）の住居跡2軒、同晩期（安行3a～3b式

期）の住居跡2軒、竪穴状遺構1基、土壇82基、礫集中2箇所、ピット227基が検出された。

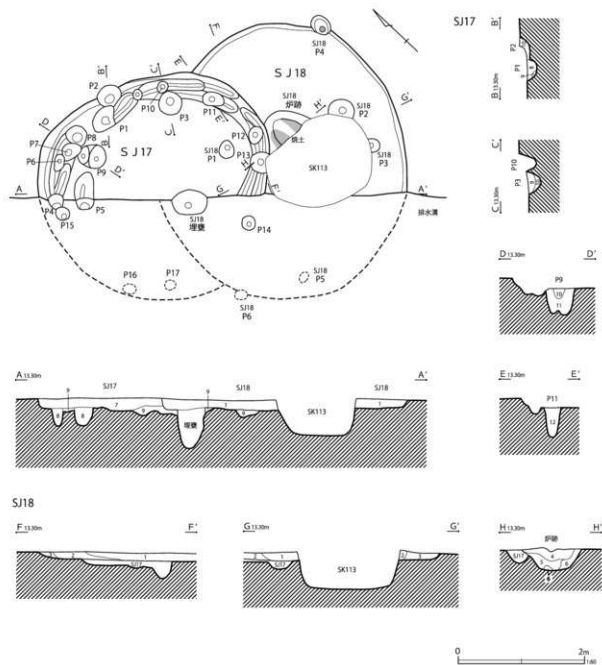
（1）住居跡

第17号住居跡（第24、26、27図）

R、S-12、13グリッドに位置する。南半分は排水溝によって失われている。住居跡の東側一部は第18号住居跡、第113号土壇に壊されている。



第23図 縄文時代の遺構(第二面下層)



- S J 18**
- 1 黒褐色土 ロームブロック (径1～10 mm) 微量
 - 2 にぶい黄褐色土 ローム粒子・白色バミス少量
 - 3 褐色土 ロームブロック (径1～10 mm) 微量
- S J 18 歩跡**
- 4 暗褐色土 粘土ブロック (径1～2 mm) 少量
 - 5 暗褐色土 粘土ブロック (径1～3 mm) 微量 ローム粒子少量
 - 6 暗褐色土 粘土ブロック (径1～7 mm)・粘土粒子微量

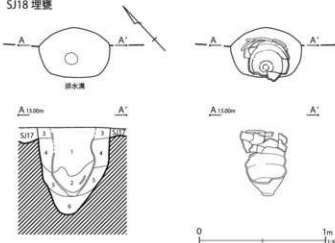
ローム粒子少量 粘性あり しまり良好

- S J 17**
- 7 黒褐色土 ロームブロック (径1～7 mm) 微量
 - 8 暗褐色土 ローム粒子・白色バミス少量
 - 9 暗褐色土 ロームブロック (径1～10 mm) やや多量
 - 10 にぶい黄褐色土 ローム粒子微量 白色バミス少量
 - 11 褐色土 ロームブロック (径1～10 mm)・ローム粒子微量
 - 12 暗褐色土 ローム粒子少量

ローム粒子少量 粘性あり しまり良好

第24図 第17,18号住居跡

SJ18 埋葬



SJ18 埋葬

- 1 黒褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 微量
焼土ブロック (径1~5mm) 少量
粘性あり しまり良好
- 2 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 少量
焼土ブロック (径1~7mm) やや多量
粘性強い しまり良好
- 3 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm) やや多量
ローム粒子微量 粘性あり しまり良好
- 4 褐色土 ロームブロック (径1~15mm) やや多量
ローム粒子微量 焼土ブロック (径1~3mm) 少量
粘性強い しまり良好
- 5 黒褐色土 ロームブロック (径1~7mm) 微量
焼土ブロック (径1~3mm) 少量
粘性あり しまり良好
- 6 黒褐色土 ロームブロック (径1~7mm)・ローム粒子微量
焼土粒子含む 粘性あり しまり良好

第25図 第18号住居跡埋葬・遺物出土状況

第2表 第17号住居跡柱穴一覧表 (第24図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	47	33	20
P2	37	35	18
P3	38	38	20
P4	(20)	23	23
P5	30	20	27
P6	26	15	30

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P7	34	23	17
P8	32	28	17
P9	45	38	42
P10	20	15	23
P11	35	22	46
P12	30	21	16

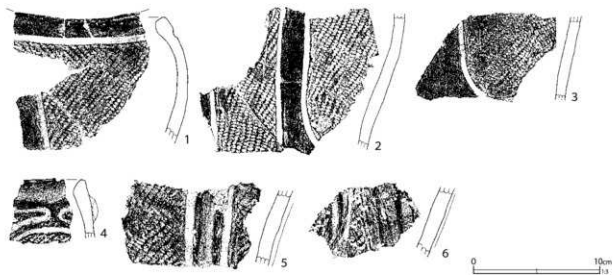
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P13	32	24	24
P14	25	22	(74)
P15	20	20	(44)
P16	20	15	(30)
P17	18	15	(35)

第3表 第18号住居跡柱穴一覧表 (第24図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	30	23	10
P2	40	(27)	19

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P3	20	(15)	15
P4	32	27	10

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P5	20	13	(33)
P6	20	15	(20)



第26図 第17号住居跡出土遺物(1)

残存部から平面形は円形と考えられる。規模は検出された範囲で、長軸長3.70m、短軸長3.50m、深さ0.20mである。南半分を排水溝によって壊されているため、炉跡の検出はできなかった。深さは0.20mと浅いが覆土の残存状態は良好であったため、他遺構との新旧関係も明瞭に識別できた。

柱穴は14本検出された。柱穴配置の規則性はなく主柱穴は不明である。

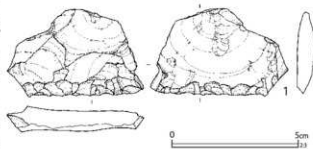
出土遺物から住居跡の時期は中期末の加曽利E IV式期である。

第26、27図は出土した遺物で、第7層の中層から主に出土した。

第26図1～3は、同一個体と考えられる深鉢形土器の胴上部の破片である。口縁部は波状口縁で、口縁部から胴上部にかけて内湾し、中央部で括れる。文様は沈線によって施文される。口縁部と胴部は沈線によって区画され、狭い無文部を持つ。胴上部の文様は、平行する磨消沈線文で施文される。地文は単節R Lの縄文で、口縁部直下は横方向、他は縦から斜め方向に施文している。

4～6は、微隆起状の隆帯によって文様が施文される深鉢形土器の破片である。4は渦巻文を施文する梶山類型口縁部の破片で、地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。5、6は同一個体と考えられる胴部の破片である。地文は単節R Lの縄文を縦方向に施文している。いずれも加曽利E IV式である。

第27図1は掻・削器である。横長剥片の縁辺を刃部として利用している。調整加工は刃部のみ裏面両面から行われている。直線的に加工された刃部は、一定の角度を持っており掻器として使用されたようである。



第27図 第17号住居跡出土遺物(2)

第4表 第17号住居跡出土遺物観察表(第27図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置	図版
1	掻・削器	黒曜石	3.5	5.4	1.0	16.3	No.10	48・1

第18号住居跡(第24、25、28図)

R、S-12、13グリッドに位置する。

第17号住居跡を壊しており、第113号土壌によって炉跡の一部が壊されている。

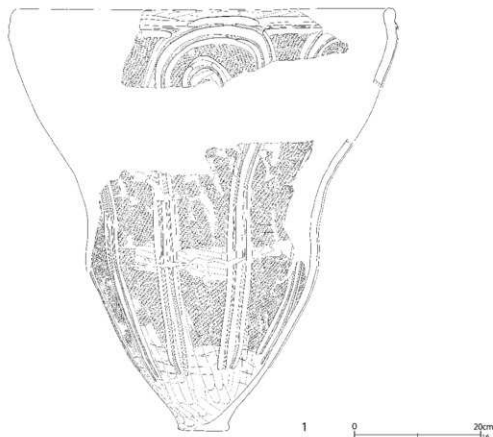
平面形は楕円形と推定され、残存する規模は長軸長3.84m、短軸長3.14m、深さ0.35mである。炉跡と埋甕を結んだ主軸方位はN-80°-Wである。

炉跡は中央で1基検出され、残存規模は長径0.85m、短径0.50m、深さ0.33mである。埋甕は出入口部から検出された。規模は長径0.53m、短径0.40m、深さ0.61mで深鉢形土器が正位に埋設されていた(第25図)。

柱穴は6本検出されたが、規則性はなく主柱穴は不明である。

出土遺物は少なく、埋甕以外で図示できるものはなかった。住居跡の時期は中期末の加曽利E IV式期である。

第28図1は埋甕に使用された深鉢形土器である。微隆起状の隆帯によって施文される梶山類型と考えられる土器である。口縁部は隆帯で区画される。隆帯の上下になぞり状の浅い沈線に沿わせる。胴部文様は、平行する二本の隆帯で施文し、隆帯の両側はなぞり状の浅い沈線となっている。胴上部は大型渦巻文を施文すると考えられ、文様は口縁



第28図 第18号住居跡埋没

部を区画する隆帯と接合している。胴中央から胴下部は懸垂文状の施文となっている。地文は単節RLの縄文で、渦巻文内は文様に沿って施文され、他は縦方向に施されている。時期は加曽利EⅣ式である。

第12号住居跡（第29～39図）

P、Q・12グリッドに位置する。上層検出の第13号住居跡、下層検出の第15号住居跡、第68、74号土壇と重複していた。土層断面から第15号住居跡より新しいことが判明した。

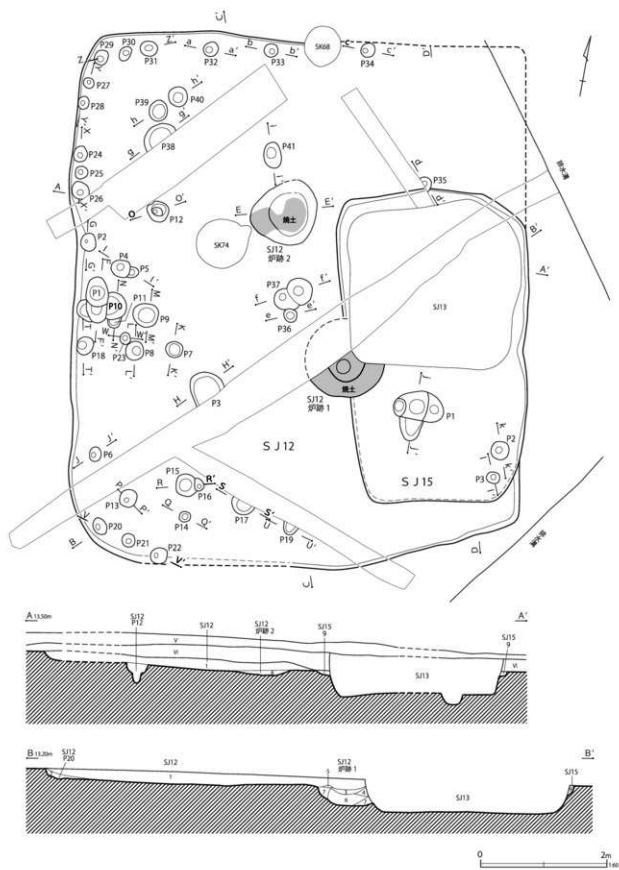
平面形は方形である。規模は長軸長8.60m、短軸長7.20m、深さ0.10mである。長軸方位はN-3°-Wである。

が跡は住居跡中央北寄りと南寄りで2箇所検出された。南寄りのそれをが跡1、北寄りをが跡2とした。が跡1は第13号住居跡に壊され、残存する規模は長径0.78m、短径0.64m、深さ0.30mである。が跡2の規模は長径0.98m、短径1.06m、

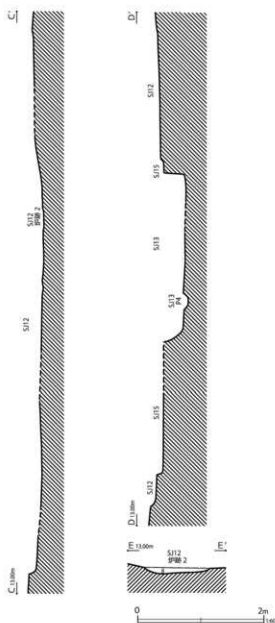
深さ0.08mである。

柱穴は41本検出された。深さは0.30m前後が主体（第5表）で壁際に巡る。が跡が2基あることから少なくとも1回建て替えが行われたと考えられる。出土土器の時期幅は広いが、安行3a式が主体を占める。

遺物は主に覆土の中層から出土した（第31図）。出土遺物は第32～38図に示した。第32図1、2は、安行3a式の平口縁深鉢形土器である。1は口縁部が内傾する。口唇部には刻みのある横長の貼付文と縦長の貼付文が二個一対で四単位貼付される。頸部は沈線で区画され胴上部に磨消縄文が施される。2は胴部が括れ、口縁部にむかってやや外傾する。口唇部に山形突起が貼付される。上下二本の沈線で区画された胴上部文様帯内には、磨消縄文による弧線文や横S字状連繋文が施される。また括れ部には貼付文、その間には栴門区画文が施されている。胴下部には斜位の条線が施される。



第29图 第12.15号住居跡(1)



基本土層
V 黒色土
VI 褐色土

SJ12

- 1 黄褐色土 V層主体 風化したローム（径1～2mm、径10～20mm）・風化した焼土粒子（径1～2mm）・炭化物粒子（径2～3mm）少量
ややローム風化粒子が多く含まれたもの
- 2 黄褐色土
- 3 黄褐色土 口の上面を覆う埋土。やや層状で硬化したガラス質の灰層を含む
赤色化した灰層か 砂粒（径1～2mm）炭化物粒子やや多量
- 4 黒色土 V層主体 やや風化した焼土粒子（径2～3mm、10～20mm）多量
- 5 黒色土 7層より焼土粒子少量
- 6 赤色焼土 黒色土主体 風化した焼土粒子（径2～3mm、10～50mm）多量
7層より焼土粒子多量 主体は焼土
- 7 黒色土 V層主体 風化した焼土粒子（径1～2mm）少量 埋土か
- 8 黒色土 黒色土主体 風化したローム（径2～5mm）・やや風化した焼土粒子（径2～5mm）やや多量

SJ15

- 9 赤褐色土 V層主体 やや風化したローム（径5～30mm）やや多量
焼土粒子含まず 風化した炭化物粒子（径1～2mm）少量
部分的に不均一にロームを含む

3は安行3a式の台付鉢の脚台部である。沈線による弧線文等が五単位施文されている。

4は安行3b～3c式の壺形土器である。胴部の文様は五単位からなる。5は安行2～3a式併行の在地でつくられた東北系の土器と考えられる。口縁部と胴部に沈線区画の縄文帯が施される。縄文帯間には弧線による充填縄文が施される。胴下部は無文である。

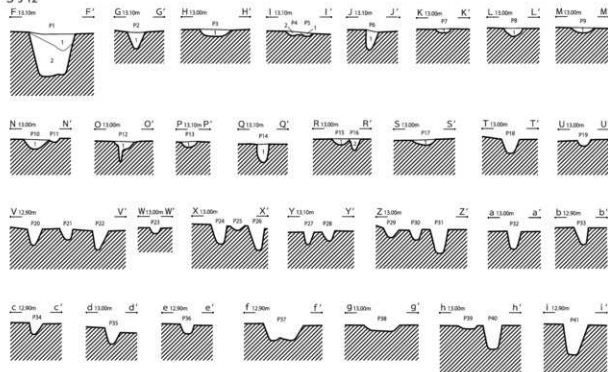
6～8は大洞系の土器である。大洞BC～C1式と考えられる。6は壺形土器である。口縁部にB突起を貼付する。屈曲部には平行する二本の沈線と沈線間には刻みが施される。肩部には雲形文、胴部には短沈線を弧線で結ぶモチーフが巡らされる。文様の構成は粗く、在地で製作されたと考えられる。7は鉢形土器である。底部を欠損する。口唇部には連続する弧線文が施文され、B突起が貼付される。括れ部と胴下半に平行する沈線が施され、沈線間には刺突がある。上下の沈線間に雲形文が施されている。胎土は砂粒が多い。8は鉢形土器である。口縁部に三本の平行する沈線が巡り、上の二本の沈線間には刻みが施されている。胴上部の文様帯には菱形のモチーフと弧線が施されている。

9、10、第33図12は紐線文土器である。

13～15は深鉢形土器の底部である。斜位の条線が施文される。13、14の底部に網状痕が見られる。

第34図16～46、第35図47～69、第36図70～76は破片資料である。16～24は波状口縁の深鉢形土器である。16、17が安行2式、21、22は安行3b式、その他は安行3a式と考えられる。16は三角形区画文の隆帯に刻みが施される。17は波頂部が双頭状で、上面に刻みが、三角形区画文の隆帯上に単筋R縄文が施される。18は三角形区画文の隆帯に刻みが施され豚鼻状貼付文が施される。19、20は波頂部に二段の豚鼻状貼付文が施される。21は波頂部の突起が簡素で、薄手に作られている。くぼみを持つ貼付文が施される。波頂部下に三叉

S J12



S J15

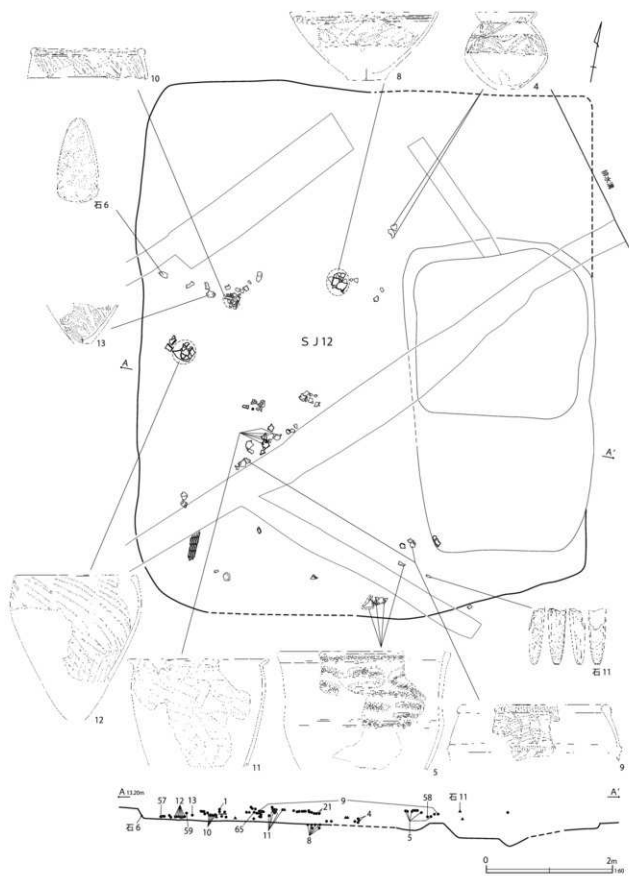


S J12

- P1
1 黄褐色土 V層主体 風化した炭化物粒子 (径1~2mm)・
やや風化したローム (径5~50mm) やや多量
風化した焼土粒子 (径1~2mm) 少量
2 黄褐色土 1層に比して炭化物粒子・焼土粒子少ない
- P2
1 黒褐色土 V層主体 風化したローム (径2~3mm) やや多量
風化した焼土粒子 (径2~3mm) 少量 炭化物粒子を含まない
- P3
1 黒褐色土 V層主体 やや風化したローム (径5~50mm) やや多量
風化した焼土粒子 (径1~2mm) 少量
炭化物粒子を含まない
- P4・5
1 黒褐色土 V層主体 風化したローム (径2~10mm)・
風化した焼土粒子 (径2~5mm) 少量
炭化物粒子を含まない
2 黒褐色土 風化したローム (径2~10mm)・
風化した焼土粒子 (径2~5mm) 少量
風化した炭化物粒子 (径2~3mm) 少量
- P6
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム (径2~3mm)・
風化した焼土粒子 (径2~3mm) 少量 炭化物粒子を含まない
- P7
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム (径1~2mm) やや多量
風化した焼土粒子 (径1~2mm) 多量
風化した炭化物粒子 (径1~2mm) 少量
- P8
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム (径1~2mm) やや多量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない
- P9
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム (径2~3mm) やや多量
風化したローム (径5~30mm) 少量 風化した焼土粒子
(径2~3mm) 少量 炭化物粒子を含まない

- P10
1 黒褐色土 V層主体 風化したローム (径2~3mm) やや多量
風化したローム (径5~20mm) 少量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない
- P12
1 黒褐色土 V層主体 風化した焼土粒子 (径2~3mm) 多量
風化したローム (径2~3mm)・
風化した炭化物粒子 (径1~2mm) 少量
- P13
1 黄褐色土 風化したローム (径2~3mm)・風化した焼土粒子 (径2~3mm)・
風化した炭化物粒子 (径2~5mm) やや多量
- P14
1 黒褐色土 風化したローム (径1~2mm) 少量
炭化物粒子を含まない
- P15・16
1 茶褐色土 V層主体 風化したローム (径2~3mm, 10~20mm)・
風化した焼土粒子 (径2~3mm) 少量
炭化物粒子を含まない
2 黒褐色土 V層主体 風化したローム (径5~10mm)・
風化した炭化物粒子 (径1~2mm) 少量 焼土を含まない
- P17
1 黒褐色土 V層主体 風化したローム (径1~2mm) やや多量
風化したローム (径5~30mm) 少量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない
- S J15
P1
1 黄褐色土 V層主体 風化した焼土粒子 (径2~3mm) やや多量
S J15の床土のピット 床面に比べやや黒色を帯び焼土が多い
- P2
1 黒褐色土 V層主体 風化したローム (径2~3mm) やや多量
風化したローム (径5~30mm) 少量 炭化物粒子を含まない
- P3
1 黒褐色土 風化したローム (径2~3mm) 少量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない

第30図 第12.15号住居跡(2)



第31图 第12号住居跡遺物出土状況

第5表 第12号住居跡柱穴一覧表 (第29図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	72	46	69
P2	28	24	26
P3	52	(44)	10
P4	30	26	6
P5	17	(14)	4
P6	22	19	32
P7	28	26	6
P8	30	28	12
P9	40	38	8
P10	44	30	18
P11	20	(14)	4
P12	33	32	33
P13	28	26	8
P14	18	16	28
P15	37	(31)	6

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P16	20	15	17
P17	35	(20)	8
P14	18	16	28
P15	37	(31)	6
P16	20	15	17
P17	35	(20)	8
P18	30	26	22
P19	22	(14)	10
P20	28	20	25
P21	22	20	17
P22	27	26	30
P23	18	17	10
P24	24	20	32
P25	20	20	6
P26	(28)	26	39

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P27	16	16	20
P28	20	17	16
P29	23	20	14
P30	24	18	15
P31	28	22	35
P32	23	21	29
P33	22	20	27
P34	23	21	18
P35	23	(14)	26
P36	22	20	15
P37	64	36	27
P38	56	(27)	10
P39	32	28	5
P40	30	30	37
P41	40	27	26

第6表 第15号住居跡柱穴一覧表 (第29図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	80	78	22

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P2	28	28	40

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P3	22	18	16

文、弧線による磨消縄文が施文される。22はくぼみを持つ円形の貼付文が二段に施される。23は丸みのある口縁部外形に沿って三条の沈線が施文される。24は口縁の縄文帯が、沈線により区画され、単節L Rの縄文が施される。

25は安行2式の瓢形土器である。帯縄文に沿って連続する刺突列が巡る。胴部に弧状の充填縄文(単節R L縄文)が施される。外面の他に口唇部、内面が磨かれている。

26~34は口縁の内湾する平口縁深鉢形土器の口縁部破片である。いずれも安行3a式と考えられる。26~28の口縁部には円形の貼付文が施される。29、30には縦長で無文の貼付文が施される。

35~39は口縁が外反し、括れを持つ形態の深鉢形土器である。35、36が安行3a式、他は安行3c式と考えられる。35は磨消縄文と刺突列で文様が構成される。単節R Lの節が細かな縄文が施文される。36は口縁部に沈線で区画する縄文帯が施文される。胴上部には稲妻状の磨消縄文が施文される。外面は黒く煤け、内面は赤く焼けている。37は磨滅のため文様が不明確だが、二条の弧線が

上下に施文されている。38、39は口縁部を沈線で区画し、区画内に38は1列、39は二列の刺突文が施されている。

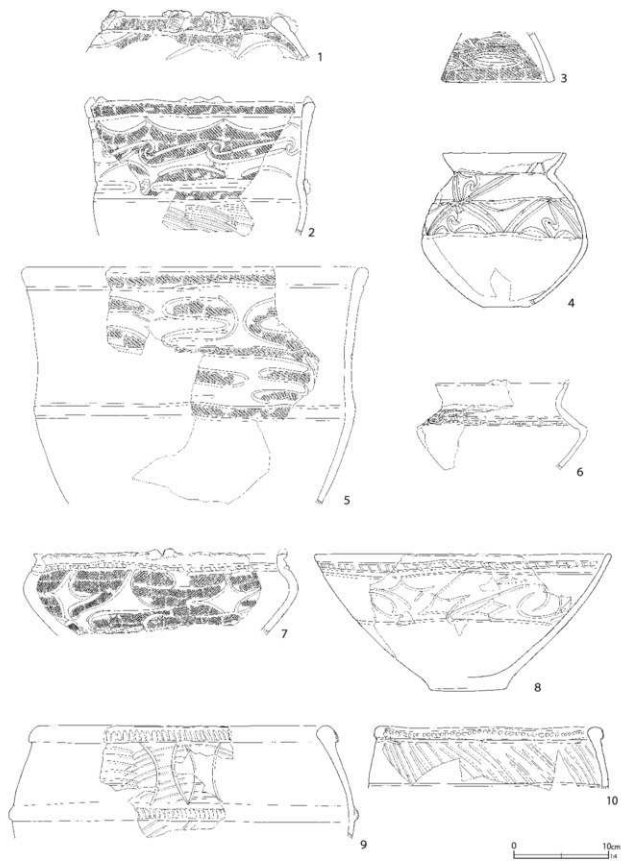
40は壺形土器である。内外面ともに丁寧に磨かれ、光沢を持つ。

41は口縁の内湾する鉢形土器である。

42、43は浅鉢形土器である。42は口縁部に縄文帯を持つ。弧線による磨消縄文が施され、沈線のつなぎ等、施文の粗さが目立つ。安行3a式である。44は台付鉢形土器の口縁部破片である。口唇部と隆帯上に刻み、隆帯上には中央をくぼませた円形貼付文が施される。区画内には細かい条線が施文されている。安行2式である。

45~47は大洞系の土器片である。45は注口土器の口縁部の破片である。胎土や文様の粗さから在地のものと考えられる。46は大洞C1式の浅鉢で、雲形文が施文される。47は大洞B C式の浅鉢である。内面に一対の円形刺突文が施される。外面には煤が付着する。

48~51は半粗製的な深鉢形土器である。48、49は同一個体と考えられる。口縁部と胴部中央には



第32图 第12号住居跡出土遺物(1)

沈線区画された刺突列、その間に稲妻状の沈線が施文される。安行3 a式である。50は口縁部が肥厚する。口縁部と胴部に刺突列を巡らせ、その間は沈線文で区画され、弧線文が施される。

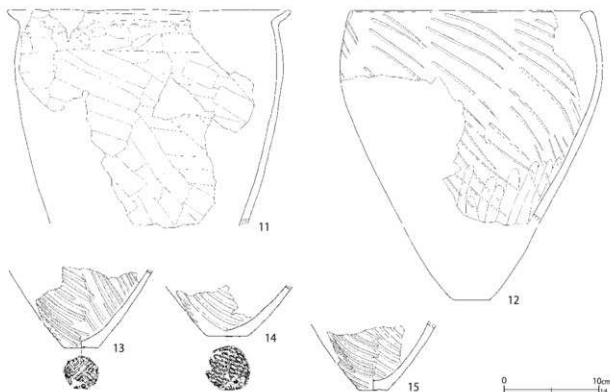
52～70は紐線文土器である。52～56は安行1式、57、58は安行2式、59～63は安行3 a式、64～70は安行3 b式と考えられる。70は口唇部に断続的に刻みが付けられる。71～76は粗製の深鉢形土器である。76は括れのある深鉢形土器である。口縁部に連続する指頭圧痕が見られる。

第37図1～4は土偶で、いずれも破片である。1は中型土偶の右腕である。中実で、残存高は約2.8cm、幅は3.4cm、厚さは1.9cmである。黒褐色で胎土は粗く、白色砂粒や黒色輝石を含む。焼成は良好である。頸部と肩部、手頸には沈線が巡り、腕先は二つに分かれる。2は小型土偶の左脚である。中実で、残存高は約2.6cm、幅は2.1cm、厚さは2.4cmになる。橙褐色で胎土は密、白色砂粒が

多く含まれる。焼成は良好である。足頸と膝下には並行する沈線が巡り、足先には指の表現が見られる。3は中型土偶の右腕である。中実で、残存高は約4.1cm、幅は4.0cm、厚さは2.6cmになる。黒褐色で胎土は密、白色砂粒を多く含む。焼成は脆い。無文である。4は小片である。中型ミヅク土偶の結髪の一部と考えられる。中実で、残存高は約2.2cm、幅は2.9cm、厚さは1.3cmになる。灰褐色で胎土は密、白色砂粒をわずかに含んでいる。焼成は良好である。ミミツク土偶に特有の結髪を現す沈線が施されている。

これら4点の土偶は、腕や脚、結髪の表現等からいずれも晩期前葉の土偶と考えられる。

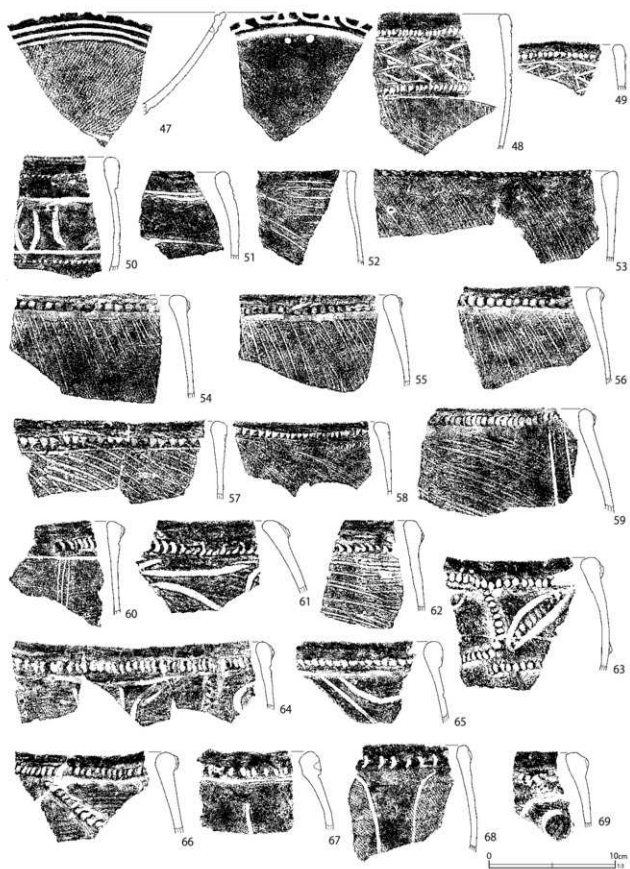
第38図1～9は土製品である。1は手燭形土製品である。把手部を欠損する。台部は三方向に突出する形状である。器部に文様は施されず、裝飾性は低い。器部径は9.4cm、高さは6.1cmと大型である。安行3 c式と考えられる。2～4は環状の



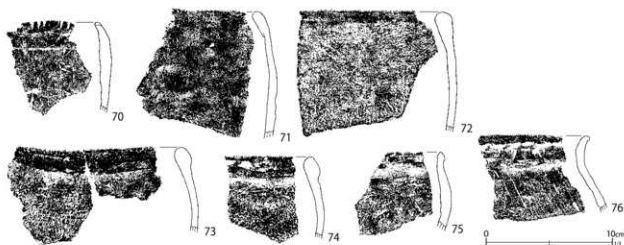
第33図 第12号住居跡出土遺物(2)



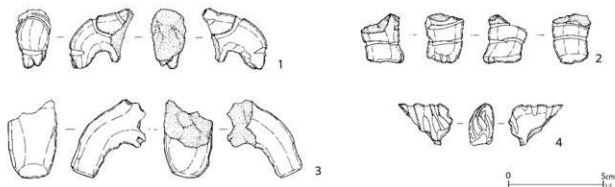
第34图 第12号住居跡出土遺物(3)



第35图 第12号住居跡出土遺物(4)



第36図 第12号住居跡出土遺物(5)



第37図 第12号住居跡出土遺物(6)

耳飾りである。2は上面に刺突と弧線文が施文される。5は無文の胴部破片を使用した土製円盤である。6は土錘である。側面に刻みがある。7、8はミニチュア土器である。鉢形土器と考えられる口縁部の破片である。

第39図1～10は出土した石器、11は石製品である。1は石鏃である。有茎のもので、裏面には一次剥離面が一部残存している。2と3は定角式の磨製石斧である。2は小型のもので、被熱している。製作痕と刃こぼれの痕跡が不明瞭である。3の横断面形は隅丸長方形である。全面に光沢が見られる。刃こぼれが認められる。4は分銅形の打製石斧である。扁平な自然礫を利用して製作されている。括れ部は敲打で潰され、被熱している。

5は搔・削器である。薄い自然礫を横長に用い、縁辺は表裏面から調整加工されている。刃部の角度が一定ではないが、搔器と考えられる。6は敲石である。上下面が敲打面として使用されており、平坦面はわずかに摩耗している。7～9は磨石である。周縁部には整形の痕跡が見られる。平坦面は敲打で凹んだ後に摩耗している。10は砥石である。両側縁が平行に作られ、横断面形はレンズ状を呈する。平坦面と両側縁が摩耗しているが顕著でない。

11は石製品の小型の石棒である。敲打と研磨で丁寧に整形されている。横断面形は楕円形である。全体に淡い赤みを帯びている。硬質な石材を使用している。

第15号住居跡（第29、30、38図）

P、Q-12グリッドに位置する。

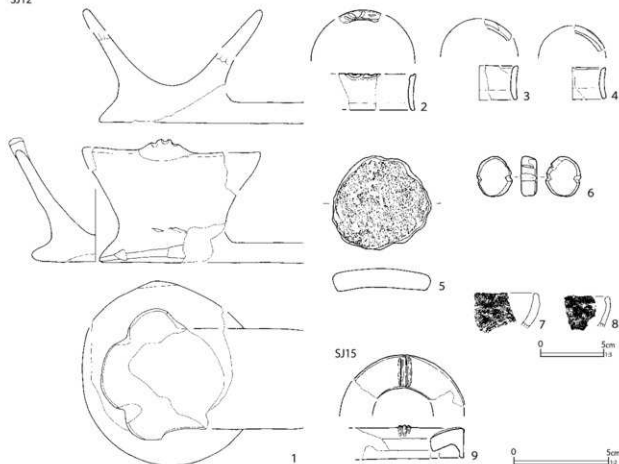
上層検出の第13号住居跡と下層検出の第12号住居跡と重複する。土層から第12号住居跡より古い。平面形は長方形である。規模は長軸長4.92m、短軸長2.80m、深さ0.35mである。長軸方位はN-

12° -Wである。

重複関係から第13号住居跡によって壊されたため、炉跡が検出されなかったと考えられる。柱穴は3本検出された。

出土遺物は第38図9の耳飾りのみである。環状のもので、上面に隆帯が貼付されている。

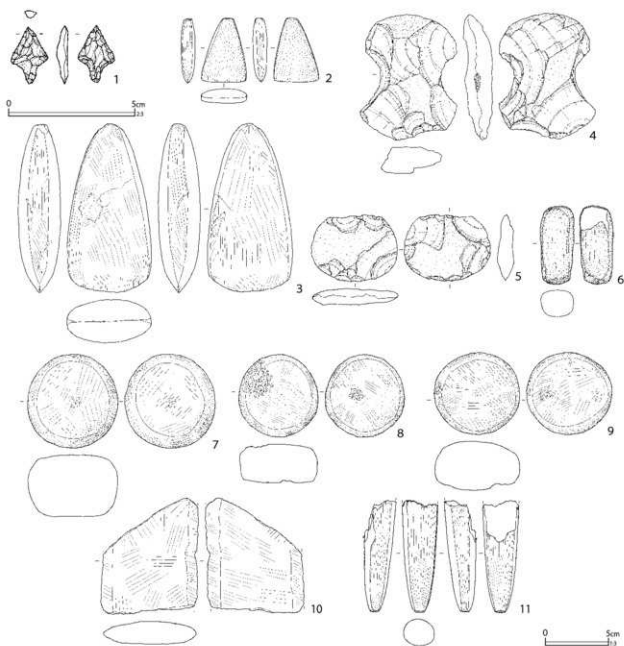
SJ12



第38図 第12、15号住居跡出土遺物

第7表 第12、15号住居跡出土遺物観察表（第38図）

番号	器種	最大径	最小径	高さ	残存	文様	形状	断面形	備考・出土位置	図版
2	耳飾り	(5.4)	(5.3)	2.0	15	沈線	環状	長方形		
3	耳飾り	(4.0)	(3.8)	1.8	15	無文	環状	長方形		
4	耳飾り	(3.5)	(3.4)	1.7	20	無文	環状	長方形		
5	土製円盤	長さ5.0	幅5.1	厚さ1.0		無文	—	—		
6	土唾	縦2.1	横1.8	厚さ0.8		—	—	—		40-6
9	耳飾り	(6.5)	—	1.6	35	隆帯3条	環状	釣針形		40-7



第39図 第12号住居跡出土遺物(7)

第8表 第12号住居跡出土遺物観察表(第39図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置	図版
1	石鏃	頁岩	2.3	1.5	0.5	1.0		48・2
2	磨製石斧	不明	5.1	3.6	1.2	25.9	被熱	48・3
3	磨製石斧	トレモライト閃石岩	13.3	6.7	3.4	467.0	No 1	48・7
4	打製石斧	安山岩	10.1	7.7	2.3	151.7	被熱	48・6
5	掻・削器	砂岩	5.3	6.8	1.3	51.3		48・4
6	磨石	安山岩	6.3	2.7	2.2	59.9		48・5
7	磨石	安山岩	7.5	7.2	5.0	456.4		48・8
8	磨石	安山岩	6.6	6.3	3.3	201.4		48・9
9	磨石	安山岩	6.6	6.8	4.0	271.8		48・10
10	砥石	安山岩	[9.3]	7.8	2.0	148.8		48・11
11	石棒		[8.9]	2.9	2.5	74.4	No 51 岩手県釜石産か? 赤化	48・12

(2) 竪穴状遺構

第4号竪穴状遺構 (第40図)

R、S-13、14グリッドに位置する。

第114、124、144号土塊と重複する。土塊はいずれも竪穴状遺構の確認面より上層や、覆土中から検出されており、竪穴状遺構よりも土塊の方が新しいと考えられる。

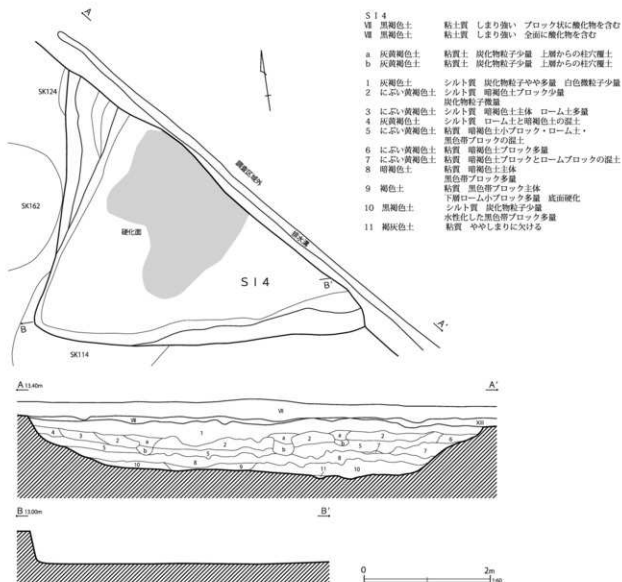
遺構の性格は不明で、床面から炉跡や柱穴が検出されなかったため竪穴状遺構と判断した。

北壁、東壁は調査区域外になっている。平面形は不定形で、規模は検出された範囲で長軸長3.64

m、短軸長4.50m、深さ0.70mである。長軸方位はN-8°-Eである。

遺構はⅧ層の下面から掘り込まれていた。断面の観察から覆土は自然堆積と考えられる。堆積中にビット3本が掘削されている。床面はおおむね平坦である。西壁寄りの床面では、2.02×1.97mの範囲で硬化面を確認した。壁の立ち上がりはなだらかで、テラスが1段見られる。

条痕文系の土器が出土した土塊に壊されていたが、遺物の出土がなく、遺構の詳細な時期を特定することはできなかった。



第40図 第4号竪穴状遺構

(3) 土壌

土壌は、他の縄文時代の遺構同様、調査区の南端からは検出されなかった。

C区では、早期後半の条痕文系土器を伴う土壌が多く検出された。B区からC区の北側では、晩期前葉の安行式土器を出土する土壌が多く検出された。

土壌内からは、早期から晩期にかけてのさまざまな時期の土器が出土している。だが、そのほとんどが小片で、大半の土壌は時期を確定することができなかった。

第48号土壌 (第41図)

Q-12グリッドに位置する。第49号土壌と北側の一部が重複する。土層から第49号土壌が新しい。平面形は楕円形である。残存規模は長軸長0.82m、短軸長0.63m、深さ0.13mである。長軸方位はN-3°-Eである。

第49号土壌 (第41図)

Q-12グリッドに位置する。第48号土壌と南側の一部が重複する。平面形は楕円形である。残存規模は長軸長1.38m、短軸長0.94m、深さ0.15mである。長軸方位はN-20°-Wである。

第50号土壌 (第41図)

Q-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.93m、短軸長0.84m、深さ0.20mである。

第51号土壌 (第41図)

Q-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.73m、短軸長0.50m、深さ0.06mである。長軸方位はN-3°-Eである。

第52号土壌 (第41図)

O-10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.44m、短軸長0.70m、深さ0.42mである。長軸方位はN-40°-Wである。

第53号土壌 (第41図)

P-11グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.80m、深さ0.15mである。

第54号土壌 (第41図)

O-10グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.85m、深さ0.55mである。

第55号土壌 (第41図)

O-11グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面にピット状の掘り込みを持つ。規模は長軸長1.07m、短軸長0.93m、深さ0.25mである。長軸方位はN-15°-Eである。

第56号土壌 (第41図)

P-11グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.93m、深さ0.41mである。

第57号土壌 (第41図)

P-10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.42m、短軸長0.75、深さ0.40mである。長軸方位はN-41°-Eである。

第58号土壌 (第41図)

R-12グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.52m、短軸長0.41m、深さ0.24mである。長軸方位はN-25°-Wである。

第62号土壌 (第41図)

Q-11、12グリッドに位置する。平面形は楕円形である。底面に4基のピットが検出された。規模は長軸長1.23m、短軸長0.83m、深さ0.47mである。長軸方位はN-5°-Wである。

第63号土壌 (第41図)

P-11、12グリッドに位置する。平面形は円形である。中央にピット状の掘り込みを持つ。規模は直径0.92m、深さ0.60mである。

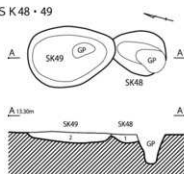
第64号土壌 (第42図)

P-12グリッドに位置する。第73号土壌と重複し、第73号土壌が新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸長2.27m、短軸長0.75m、深さ0.48mである。長軸方位はN-7°-Wである。

第65号土壌 (第42図)

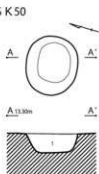
P-12グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.20m、短軸長0.75m、深さ0.45mである。長軸方位はN-7°-Wである。

S K48・49



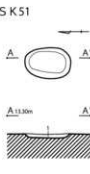
- S K48・49
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム（径2～20 mm）やや多量
やや黒色を帯びる
2 黄褐色土 V層主体 風化したローム（径2～5 mm・径20～50 mm）多量
風化した焼土粒子（径2～5 mm）少量

S K50



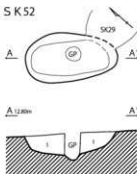
- S K50
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム（径1～2 mm）やや多量
風化したローム（径20～50 mm）多量
風化した焼土粒子（径3～5 mm）少量 炭化物粒子含む
全体に均一性高い

S K51



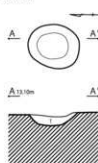
- S K51
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム（径1～2 mm）多量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない

S K52



- S K52
1 灰黄色土 V層主体 風化したローム（径2～3 mm・径10～20 mm）やや多量
風化した炭化物粒子少量 焼土粒子を含まない
黒色土ブロック（径20～50 mm）少量

S K53



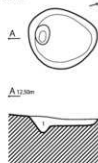
- S K53
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム（径1～2 mm）少量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない

S K54



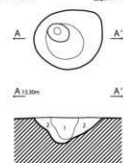
- S K54
1 灰黄色土 風化したローム（径2～3 mm）多量
風化したローム（径10～20 mm）やや多量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない
2 灰黄色土 1層に比べて灰色

S K55



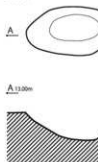
- S K55
1 灰黄色土 V層主体 風化したローム（径1～2 mm）多量
風化したローム（径20～30 mm）やや多量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない

S K56

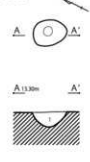


- S K56
1 黄褐色土 V層主体 やや風化したローム（径2～20 mm）やや多量
炭化物粒子・焼土粒子を含まない
2 灰黄色土 V層主体 風化したローム（径2～3 mm・径10～20 mm）やや多量
風化した炭化物粒子少量 焼土粒子を含まない
黒色土ブロック（径20～50 mm）少量

S K57

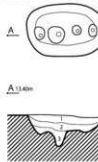


S K58



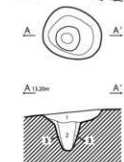
- S K58
1 黄褐色土 V層主体 風化したローム（径5～60 mm）やや多量
黒色土ブロック（径5～30 mm）少量 炭化物粒子・焼土粒子を含まない

S K62



- S K62
1 黄褐色土 炭化物粒子少量 粘質
2 黒褐色土 V層主体 ロームブロック少量 粘質
3 灰黄褐色土 ロームブロック多量 粘質

S K63



- S K62
1 黄褐色土 炭化物粒子少量 粘質
2 黒褐色土 V層主体 ロームブロック少量 粘質
3 灰黄褐色土 ロームブロック多量 粘質

0 2m
1m

第41図 土壌(1)

第66号土墳 (第42図)

P-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.15m、短軸長0.76m、深さ0.39mである。長軸方位はN-10°-Wである。

第67号土墳 (第42図)

O、P-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.34m、短軸長0.83m、深さ0.40mである。長軸方位はN-1°-Eである。

第68号土墳 (第42図)

P-12グリッドに位置する。第12号住居跡と重複し土層の観察から本土墳が新しい。平面形は円形である。規模は直径0.57m、深さ0.42mである。

第69号土墳 (第42図)

Q-11、12グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.98m、短軸長0.72m、深さ0.20mである。長軸方位はN-14°-Wである。加曽利E式の土器片が1点出土した。

第70号土墳 (第42図)

Q-11、12グリッドに位置する。平面形は円形で、底面にピット状の掘り込みを持つ。規模は直径1.12m、深さ0.48mである。

第71号土墳 (第42図)

O-11グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.90m、深さ0.45mである。

第72号土墳 (第42図)

O-10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.41m、短軸長1.00m、深さ0.22mである。長軸方位はN-6°-Eである。

土墳内からは被熱した礫が出土した。礫の石質や被熱状況は、第2号礫群から出土した礫に類似していたが、両者は距離的にもかなり離れており、関連性を想定することは難しい。

第73号土墳 (第42図)

P-12グリッドに位置する。第64号土墳と重複し、土層から本土墳が新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸長2.26m、短軸長0.68m、深さ0.44mである。長軸方位はN-40°-Eである。

第74号土墳 (第42、49図、第9表)

P、Q-12グリッドに位置する。第12号住居跡中央で重複している。平面形は円形で、中央にピット状の掘り込みを持つ。規模は直径0.80m、深さ0.42mである。遺物は第49図1の垂飾の他、晩期の土器片が少々出土したが、小片のため土器は図示しなかった。1は白玉状の垂飾である。扁平で、面取り後に全体を研磨して平面形を円形に仕上げている。

第75号土墳 (第43図)

Q-11グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.85m、深さ0.30mである。

第110号土墳 (第43図)

R-12、13グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.80m、深さ0.23mである。

第111号土墳 (第43図)

R-12グリッドに位置する。第116号土墳と重複し、土層の観察から本土墳が新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.43m、短軸長1.26m、深さ0.17mである。

第112号土墳 (第43図)

R-13グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸長1.20m、短軸長1.06m、深さ0.50mである。長軸方位はN-15°-Eである。

第113号土墳 (第43、49図)

R-13グリッドに位置する。第18号住居跡の戸跡を壊しており、第18号住居跡よりも新しい。

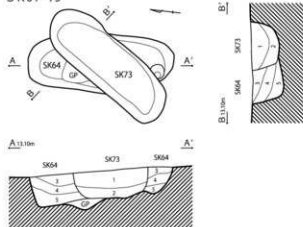
平面形は楕円形である。規模は長軸長1.67m、短軸長1.38m、深さ0.58mである。長軸方位はN-60°-Wである。遺物は、早期後半の条痕文系土器が出土した。2は口縁部、3は胴部の破片である。

出土遺物から土墳の時期は、早期後半の鶴ガ島台式期と考えられる。

第114号土墳 (第43、49図)

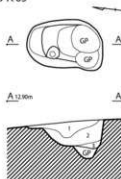
R-13、14グリッドに位置する。第1号竪穴状遺構、第161号土墳と重複する。平面形は楕円形で

SK 64・73



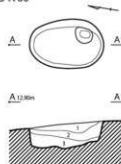
- SK 64・73
 1 灰黄褐色土 炭化物粒子・暗褐色土ブロック少量 粘質
 2 にぶい黄褐色土 ロームブロック多量 粘質
 3 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性强い
 4 褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック含む 粘質
 5 灰黄褐色土 ロームブロック多量 粘質

SK 65



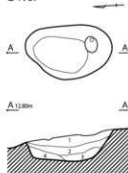
- SK 65
 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性强い
 2 褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック含む 粘質
 3 灰黄褐色土 ロームブロック多量 粘質

SK 66



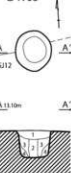
- SK 66
 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性强い
 2 褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック含む 粘質
 3 灰黄褐色土 ロームブロック多量 粘質

SK 67



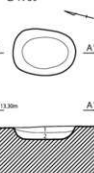
- SK 67
 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性强い
 2 褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック含む 粘質
 3 灰黄褐色土 ロームブロック多量 粘質
 4 にぶい黄褐色土 ローム土主体 暗褐色土をブロック状に含む 粘質

SK 68



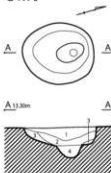
- SK 68
 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘性强い
 2 黒褐色土 炭化物粒子・ロームブロック少量 しまりに欠ける
 3 灰黄褐色土 ロームブロック多量 粘質
 4 にぶい黄褐色土 ローム土主体 暗褐色土をブロック状に含む 粘質

SK 69



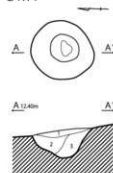
- SK 69
 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘質
 2 暗褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック少量 粘質

SK 70



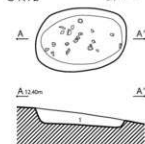
- SK 70
 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘質
 2 暗褐色土 暗褐色土主体 ロームブロック少量 粘質
 3 暗褐色土 ロームブロック多量 粘質
 4 にぶい黄褐色土 ローム土主体 暗褐色土をブロック状に含む 粘質

SK 71



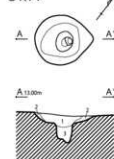
- SK 71
 1 褐色土 炭化物粒子やや多量 粘質土
 2 褐色土 炭化物粒子多量 焼土粒子少量 粘質土
 3 灰黄褐色土 ロームブロック少量 粘質土

SK 72



- SK 72
 1 褐色土 炭化物粒子少量 粘質土

SK 74



- SK 74
 1 黒褐色土 風化したローム (径2~3mm)・炭化物粒子 (径2~10mm)・炭化物粒子 (径2~3mm) 少量 1層に比べてやや明るいローム多い
 2 黒褐色土 2層より更にローム多いやや風化したローム (径2~50mm) 多量

0 2m 1m

第42図 土壌(2)

ある。規模は長軸長3.84m、短軸長2.13m、深さ0.20mである。長軸方位はN-50°・Eである。遺物は早期後半の条痕文系土器が出土した。4、5はいずれも胴部破片で、表裏面に条痕が認められる。6は磨石である。全面に使用痕が見られる。

第115号土壌 (第44図)

R-12グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.38m、短軸長1.00m、深さ0.15mである。長軸方位はN-20°・Eである。

第116号土壌 (第43図)

R-12グリッドに位置する。第111号土壌に壊されている。平面形は楕円形である。残存規模は長軸長1.57m、短軸長0.83m、深さ0.12mである。

第117号土壌 (第44図)

R-12グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.80m、深さ0.21mである。

第118号土壌 (第44図)

R-12、13グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.95m、深さ0.13mである。

遺物は前期前葉の羽状縄文系の土器が数点出土した。

第119号土壌 (第44図)

R-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.48m、短軸長1.00m、深さ0.11mである。長軸方位はN-17°・Wである。

第120号土壌 (第44図)

Q-13グリッドに位置する。東半分は調査区域外で、平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長0.93m、短軸長0.82m、深さ0.16mである。長軸方位はN-42°・Wである。

第121号土壌 (第44図)

Q-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.90m、短軸長0.70m、深さ0.18mである。長軸方位はN-58°・Wである。

第122号土壌 (第44図)

Q-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.91m、短軸長0.69m、深さ

0.05mである。長軸方位はN-70°・Wである。

第123号土壌 (第44図)

Q-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.21m、短軸長1.06m、深さ0.30mである。長軸方位はN-56°・Eである。

第124号土壌 (第44図)

R-13グリッドに位置する。東半分が調査区域外にある。平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長0.87m、短軸長0.67m、深さ0.19mである。長軸方位はN-43°・Wである。

第125号土壌 (第44図)

S-13、14グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長径2.50m、短径1.67m、深さ0.09mである。覆土上層で礫が15点出土したが、多くは被熱破砕礫であった。土壌は第2号礫集中(第53図)の範囲内に位置しており、検出された礫の石質や被熱状況も同様であることから、出土した礫は第2号礫集に属するものと考えられる。

遺物は、早期後半の条痕文系土器の小片が数点出土したのみである。

第127号土壌 (第45、49図)

S-14グリッドに位置する。南壁の一部が第130号土壌と重複し、土層断面から本土壌が新しい。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.30m、短軸長1.17m、深さ0.08mである。長軸方位はN-31°・Wである。

第49図7は出土した土器片で、早期中葉の田戸下層式期の文様帯部分の破片である。洗線間に貝殻腹縁文が充填されている。

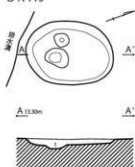
第128号土壌 (第45図)

S-13グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.75m、深さ0.24mである。

第129号土壌 (第45図)

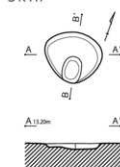
S-13、14グリッドに位置する。第130、150号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は不整円形で、底面は2段になっている。規模は長径1.76m、短径1.51m、深さ0.34mである。

SK115



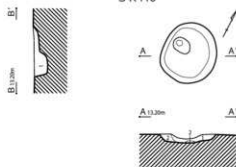
SK115
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 少量 ローム粒子やや多量

SK117



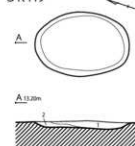
SK117
1 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 微量 ローム粒子やや多量

SK118



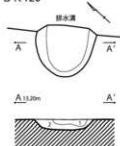
SK118
1 暗褐色土 ローム粒子やや多量
2 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~15mm) 微量
ローム粒子やや多量

SK119



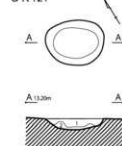
SK119
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 少量 ローム粒子微量
2 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 少量 ローム粒子やや多量

SK120



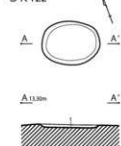
SK120
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm)・ローム粒子微量
2 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 微量 ローム粒子やや多量

SK121



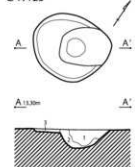
SK121
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 少量 ローム粒子微量
2 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 微量
ローム粒子やや多量 粘性あり しまり良好

SK122



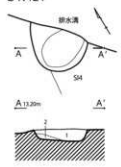
SK122
1 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 微量 ローム粒子微量
粘性あり しまり良好

SK123



SK123
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 少量 ローム粒子微量
焼土粒ブロック (径1~3mm) ごく少量 粘性あり
しまり良好
2 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 微量 ローム粒子やや多量
粘性あり しまり良好
3 にぶい・黄褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 微量 ローム粒子やや多量
粘性あり しまり良好

SK124

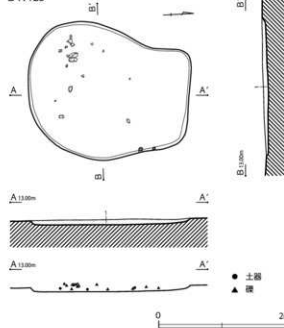


SK124
1 暗褐色土 ローム粒子微量 粘性あり しまり良好
2 褐色土 ローム粒子やや多量 粘性あり しまり良好

SK125

SK125
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm)・ローム粒子微量

SK125



第44図 土壌(4)

遺物は覆土上層から、早期後半の条痕文系土器片が数点、礫等が検出されたが図示できるものはなかった。

第130号土壌 (第45、49図)

S-14グリッドに位置する。第127、129、150、151号土壌、ビットと重複し、第127、151号土壌に壊されている。第129、150号土壌との新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長4.57m、短軸長2.92m、深さ0.40mである。長軸方位はN-88°-Wである。

覆土観察から倒木痕上の土壌としたが、底面の焼土痕と規模から、住居跡である可能性も否定できない。

遺物は多量に出土した。早期後半条痕文系の鶴ガ島台式土器も出土しているが、茅山下層式と判断される大型破片も出土している。

第49図8～15は出土した土器である。いずれも条痕文系土器の深鉢形土器である。8は器形復元できた大型破片である。底部は欠損するため不明であるが平底になると思われる。口縁は緩い四単位の波状で、胴上半に二段の括れを持ち、二帯の文様帯となる。文様は三本の沈線を基本にして施文され、Ⅰ文様帯には口縁に沿って鋸歯状文様が施文され、その下に施文する文様は規則性が見られない。鋸歯状文の交点には部分的に刺突文を施している。Ⅱ文様帯には格子目文を沈線で施文している。推定口径は22cmである。9、13は文様帯を持ち、細隆起線と集合沈線によって文様を施文している。9は口縁部の破片で、口唇端部に刻みを加えている。13は胴上部の破片で、Ⅱ帯部分で細隆起線上の区画交点以外にも円形刺突文が施されている。10～12は無文や条痕のみの口縁部破片で、14、15は同じく胴部破片である。

土壌の時期は茅山下層式期と考えられる。

第131号土壌 (第45、50図)

U-15グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.26m、短軸長0.90m、深さ

0.32mである。長軸方位はN-58°-Eである。

遺物は早期後半の条痕文系土器破片が出土した。第50図16、17は出土した無文の胴部破片である。

遺構の時期は早期後半と考えられる。

第132号土壌 (第45図)

T、U-15グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.27m、短軸長1.07m、深さ0.21mである。長軸方位はN-38°-Wである。

第133号土壌 (第46図)

U-15グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径1.06m、深さ0.21mである。

第134号土壌 (第46図)

T-15グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径1.20m、深さ0.18mである。

第135号土壌 (第46図)

T-15グリッドに位置する。東側の一部が調査区域外にある。平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長1.73m、短軸長1.31m、深さ0.39mである。長軸方位はN-86°-Eである。

遺物は早期後半の条痕文系土器が数点出土したが、小片のため図示しなかった。

第136号土壌 (第46図)

T-15グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.68m、深さ0.40mである。

遺物は早期後半の条痕文系土器の小片が数点出土した。

第137号土壌 (第46図)

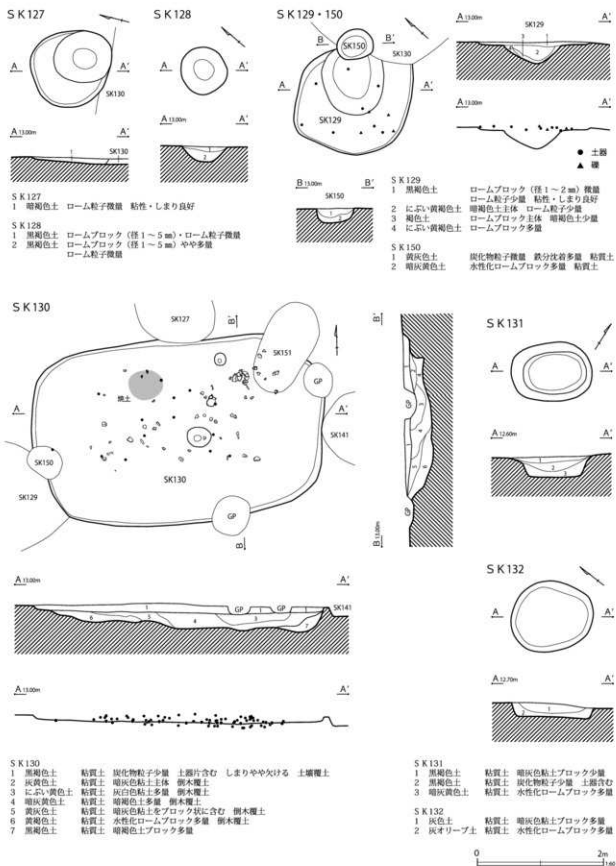
S-14グリッドに位置する。北側の一部が調査区域外にある。平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長1.02m、短軸長0.60m、深さ0.14mである。長軸方位はN-23°-Eである。

第138号土壌 (第46図)

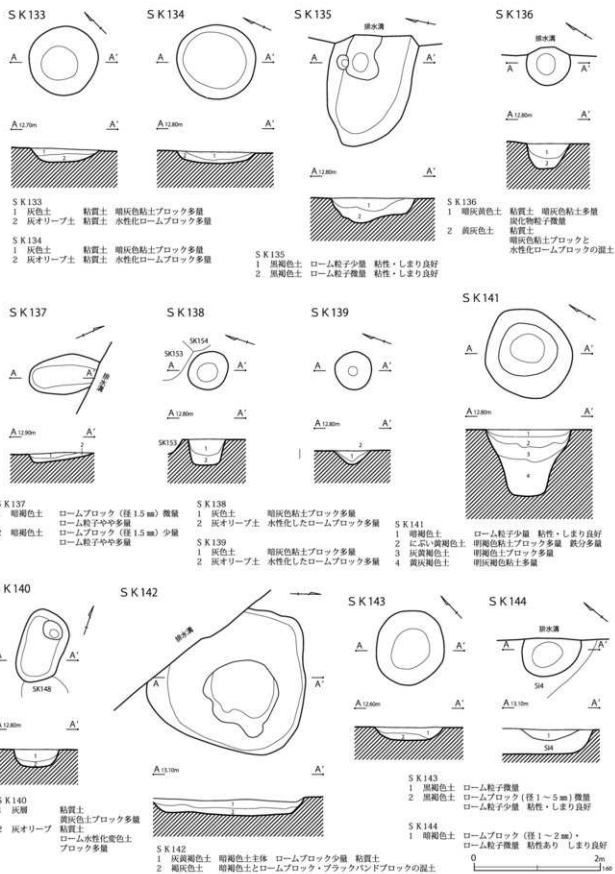
T-15グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.60m、深さ0.40mである。

第139号土壌 (第46図)

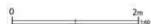
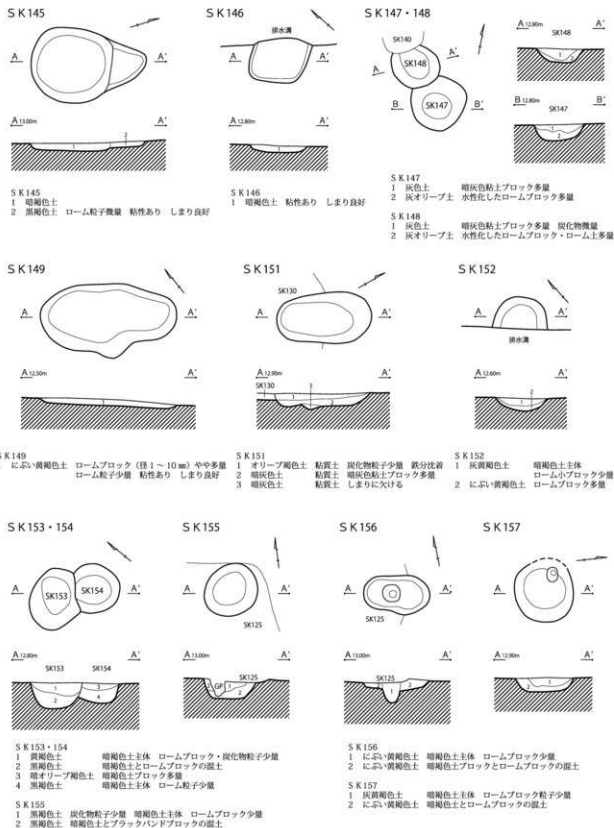
T-15グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.56m、深さ0.21mである。



第45図 土壌 (5)



第46図 土壌(6)



第47図 土壌(7)

第140号土壇 (第46, 50図)

T-15グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.14m、短軸長0.65m、深さ0.28mである。長軸方位はN-4°-Eである。

遺物は早期後半の条痕文系土器の破片が数点出土した。第50図18, 19は無文の胴部破片である

第141号土壇 (第46図)

S-14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径1.20m、深さ0.13mである。

第142号土壇 (第46図)

S-13グリッドに位置する。南西側は排水溝に壊されている。平面形は不整形円形、規模は長径2.47m、短径2.25m、深さ0.25mである。遺物は早期後半の条痕文系土器の破片が数点出土したが、小片のため図示できなかった。

第143号土壇 (第46図)

U-15グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径1.10m、深さ0.20mである。

第144号土壇 (第46図)

R-14グリッドに位置する。第1号竪穴状遺構と重複する。平面形は楕円形である。残存規模は長軸長0.91m、短軸長0.60m、深さ0.17mである。長軸方位はN-39°-Wである。

第145号土壇 (第47図)

R、S-14グリッドに位置する。平面形は不整形円形である。規模は長軸長1.82m、短軸長1.15m、深さ0.13mである。長軸方位はN-17°-Eである。

第146号土壇 (第47図)

S-15グリッドに位置する。北東側は調査区域外に延びる。平面形は隅丸長方形と推定される。残存規模は長軸長0.92m、短軸長0.68m、深さ0.10mである。長軸方位はN-43°-Wである。

第147号土壇 (第47図)

T-15グリッドに位置する。第148号土壇と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は円形である。規模は直径0.85m、深さ0.25mである。遺物は早期後半の条痕文系土器の破片が数点出土し

たが、小片のため図示できなかった。

第148号土壇 (第47図)

T-15グリッドに位置する。第147号土壇と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は円形である。規模は直径0.7m、深さ0.21mである。

第149号土壇 (第47図)

U-16グリッドに位置する。平面形は不整形円形である。規模は長軸長2.13m、短軸長1.04m、深さ0.10mである。長軸方位はN-52°-Wである。

第150号土壇 (第45図)

S-14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.57m、深さ0.22mである。

第151号土壇 (第47図)

S-14グリッドに位置する。第130号土壇と重複し、土層の観察から本土壇が新しいと考えられる。

平面形は楕円形、規模は長軸長1.49m、短軸長0.76m、深さ0.25mである。長軸方位はN-30°-Eである。

第152号土壇 (第47図)

U-15グリッドに位置する。壁面の一部が調査区域外にあり、平面形は不明である。確認できた規模は長径0.80m、短径0.52m、深さ0.20mである。

第153号土壇 (第47図)

T-15グリッドに位置する。第154号土壇と重複し、土層観察から本土壇が新しい。平面形は円形である。規模は直径1.45m、深さ0.30mである。遺物は早期後半の条痕文系土器の破片が覆土中から数点出土したが、小片のため図示できなかった。

第154号土壇 (第47図)

T-15グリッドに位置する。第153号土壇と重複し、土層の観察から第153号土壇が新しいと考えられる。平面形は円形である。規模は直径0.76m、深さ0.40mである。

第155号土壇 (第47図)

S-13, 14グリッドに位置する。第125号土壇と重複する。平面形は円形である。規模は直径0.80m、深さ0.27mである。

第156号土壌 (第47図)

S-13、14グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.04m、短軸長0.53m、深さ0.32mである。長軸方位はN-77°-Wである。

第157号土壌 (第47図)

S-14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.90m、深さ0.22mである。遺物は早期後半の条痕文系土器の破片が数点出土したが、小片のため図示できなかった。

第158号土壌 (第48図)

S-14グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.94m、短軸長0.86m、深さ

0.34mである。長軸方位はN-1°-Eである。

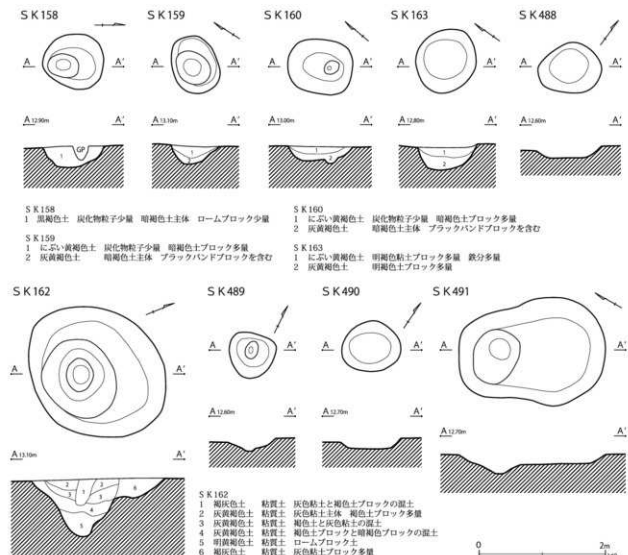
第159号土壌 (第48図)

S-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.90m、短軸長0.70m、深さ0.27mである。長軸方位はN-32°-Wである。

第160号土壌 (第48、50図)

S-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.01m、短軸長0.83m、深さ0.26mである。長軸方位はN-42°-Wである。

遺物は早期後半の鶴ヶ島台式土器が出土した。第50図20は文様帯が残る胴部の破片で、括れ部分は認められない。文様は沈線で施文され、区画交



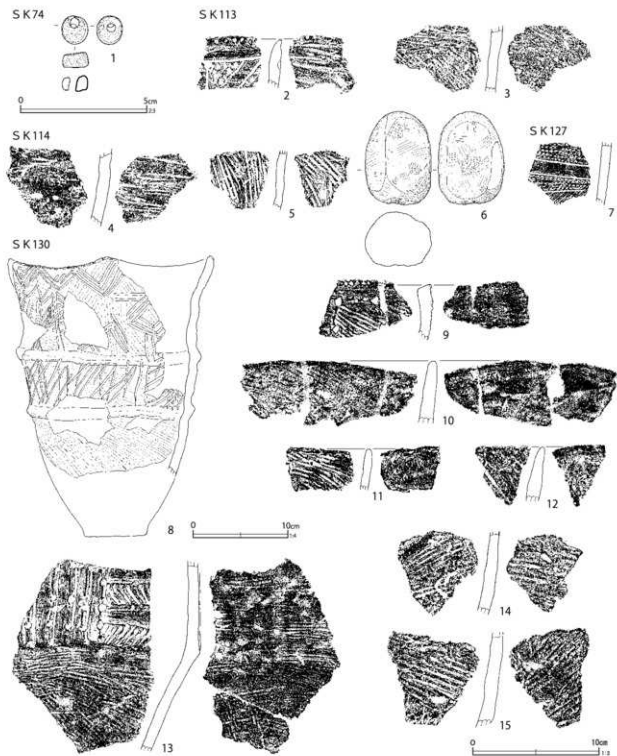
第48図 土壌 (8)

点には円形刺突文が施されている。

第161号土壙（第43図）

R-13グリッドに位置する。第114号土壙と重複

するが、新田関係は不明である。平面形は円形である。規模は直径1.02m、深さ0.10mである。遺物は早期後半の条痕文土器の破片が数点出土し



第49図 土壙出土遺物(1)

たが、小片のため図示できなかった。

第162号土塊 (第48図)

R-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長2.04m、短軸長1.98m、深さ0.88mである。

第163号土塊 (第48図)

S-14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.95m、深さ0.35mである。

第488号土塊 (第48図)

T-14グリッドに位置する。平面形は楕円形で規模は長軸長0.97m、短軸長0.80m、深さ0.15mである。長軸方位はN-50°-Eである。

第489号土塊 (第48図)

T-14、15グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径0.74m、深さ0.16mである。

第490号土塊 (第48図)

T-15グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.94m、短軸長0.80m、深さ0.15mである。長軸方位はN-57°-Eである。

第491号土塊 (第48図)

T-15グリッドに位置する。平面形は不整楕円

形で、底面は2段に掘り込まれている。規模は長軸長2.28m、短軸長1.33m、深さ0.30mである。長軸方位はN-30°-Wである。

(4) 礫集中 (第52、53図、第10、11表)

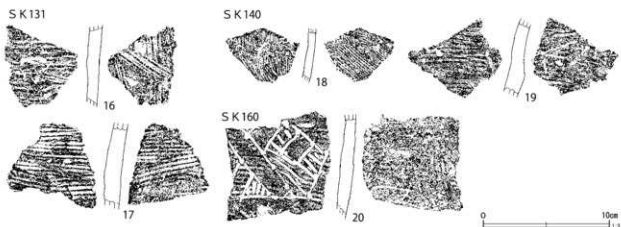
礫集中はC区から2箇所検出された。

第1号礫集中は、Q、R-12グリッドの基本土層VI層からVII層にかけて検出した。範囲は、2.02×2.46mである。

礫は散漫に分布し、密な部分はなかった。被熱した破碎礫が多数を占めている。集石土塊などの焼礫が廃棄され、散乱したと考えられる。

礫集中に伴う土器が特定できないため時期は不明であるが、条痕文系土器が多く出土する範囲と重なることから、関連が考えられる。

第1号礫集中の礫の石材は安山岩が25点(36%)と最も多く、チャート21点(30%)、砂岩19点(27%)、ホルンフェルス2点(3%)、緑泥片岩2点(3%)、変成岩1点(1%)であった。多くの礫で被熱破碎の痕跡が見られた。70点中63点(90%)の礫が被熱し、52点(74%)の礫が破碎していた。



第50図 土塊出土遺物(2)

第9表 土塊出土遺物観察表 (第49図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置	図版
1	垂飾	滑石	1.2	1.1	0.6	1.2	SK74	48-13
6	磨石	角閃石安山岩	7.5	5.3	4.4	217.6	SK114	48-33

第2号礫集中は、R、S・13、14グリッドの基本土層Ⅵ層からⅦ層にかけて検出した。範囲は10.98×7.62mである。

礫は散漫に分布し、密な部分はなかった。被熱した破碎礫が多数を占めている。集石土壌などの焼礫が廃棄され、散乱したと考えられる。

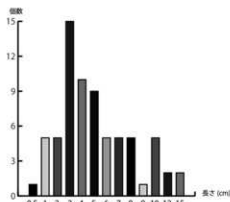
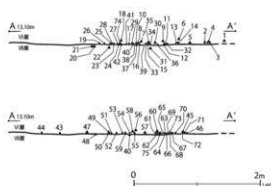
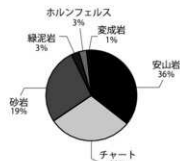
礫集中に伴う土器が特定できないため時期は不明であるが、条痕文系土器が多く出土する範囲と重なることから、関連が考えられる。

第2号礫集中の礫の石材はチャートが22点（47%）と最も多く、安山岩16点（34%）、砂岩6点（13%）、ホルンフェルス3点（6%）であった。多くの礫で被熱と破碎の痕跡が見られた。47点中32点（68%）の礫が被熱し、20点（43%）の礫が破碎していた。

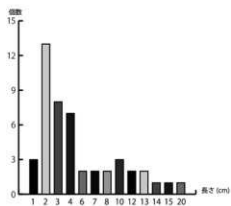
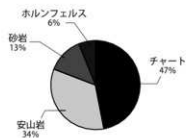
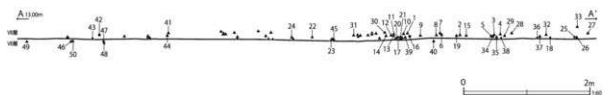
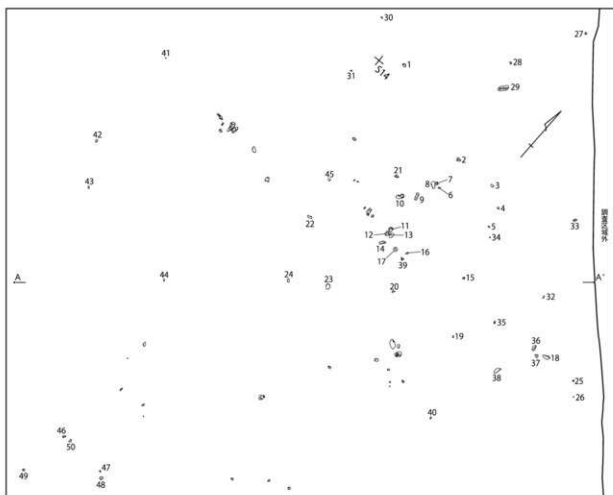
第1号礫集中と第2号礫集中との時期差などは不明である。



第51図 第1、2号礫集中位置図



第52図 第1号礫集中



第53図 第2号礫集中

第10表 第1号礫集中構成礫計測表 (第52図)

No.	石材	標高 (m)	長さ (cm)	備考	No.	石材	標高 (m)	長さ (cm)	備考	No.	石材	標高 (m)	長さ (cm)	備考
1	緑泥岩	12.97	1		27	安山岩	12.88	12	被熱・破砕	52	安山岩	12.89	6	被熱・破砕
2	安山岩	12.94	4	被熱・破砕	28	安山岩	12.90	4	被熱・破砕	53	チャート	12.90	6	被熱・破砕
3	変成岩	12.94	4	被熱・破砕	29	安山岩	12.90	5		54	安山岩	12.88	15	被熱・破砕
4	砂岩	12.94	3	被熱・破砕	30	チャート	12.93	3		55	安山岩	12.90	7	被熱・破砕
5	安山岩	12.91	10	被熱	31	砂岩	12.85	5	被熱・破砕	56	チャート	12.95	3	被熱・破砕
6	チャート	12.98	3	被熱	32	チャート	12.90	3	被熱・破砕	57	砂岩	12.93	3	被熱・破砕
7	チャート	12.95	3	被熱	33	チャート	12.88	2	被熱・破砕	58	砂岩	12.94	10	被熱・破砕
10	安山岩	12.93	8	被熱	34	安山岩	12.89	7	被熱	59	チャート	12.89	5	被熱・破砕
11	砂岩	12.90	2	被熱・破砕	36	ホルンフェルス	12.87	6		60	砂岩	12.94	5	被熱・破砕
12	砂岩	12.89	2	被熱・破砕	37	緑泥岩	12.86	3		61	砂岩	12.90	4	被熱・破砕
13	砂岩	12.93	4	被熱・破砕	38	砂岩	12.87	3	被熱・破砕	62	チャート	12.89	8	被熱
14	チャート	12.94	3	被熱・破砕	39	チャート	12.90	3	被熱・破砕	63	安山岩	12.91	7	被熱・破砕
15	砂岩	12.89	7	被熱	40	安山岩	12.88	6	被熱・破砕	64	砂岩	12.89	6	被熱・破砕
16	安山岩	12.91	4	被熱・破砕	41	安山岩	12.88	3	被熱・破砕	65	チャート	12.91	3	被熱・破砕
17	チャート	12.88	1	被熱	42	チャート	12.90	1	被熱・破砕	66	砂岩	12.90	5	被熱・破砕
18	安山岩	12.97	3	被熱・破砕	43	チャート	12.89	3	被熱・破砕	67	安山岩	12.89	8	被熱・破砕
19	砂岩	12.88	3	被熱・破砕	44	ホルンフェルス	12.90	15		68	チャート	12.89	4	被熱・破砕
20	砂岩	12.86	10	被熱・破砕	45	砂岩	12.91	5	被熱・破砕	69	安山岩	12.90	9	被熱・破砕
21	砂岩	12.87	8	被熱・破砕	46	チャート	12.90	2	被熱・破砕	70	チャート	12.88	4	
22	安山岩	12.84	10	被熱・破砕	47	砂岩	12.89	8	被熱・破砕	71	チャート	12.89	1	
23	安山岩	12.90	5	被熱・破砕	48	安山岩	12.86	5	被熱・破砕	72	チャート	12.89	0.5	被熱・破砕
24	安山岩	12.85	4	被熱	49	砂岩	12.93	5	被熱	73	安山岩	12.91	1	被熱・破砕
25	チャート	12.88	4	被熱・破砕	50	安山岩	12.90	10	被熱	74	チャート	12.89	2	被熱
26	安山岩	12.88	12	被熱・破砕	51	安山岩	12.89	7	被熱					

第11表 第2号礫集中構成礫計測表 (第53図)

No.	石材	標高 (m)	長さ (cm)	備考	No.	石材	標高 (m)	長さ (cm)	備考	No.	石材	標高 (m)	長さ (cm)	備考
1	安山岩	12.77	6	被熱・破砕	18	安山岩	12.69	15	被熱	34	チャート	12.73	2	被熱
2	砂岩	12.73	6	被熱・破砕	19	チャート	12.72	2	被熱	35	チャート	12.71	2	
3	ホルンフェルス	12.75	3		20	安山岩	12.69	4	被熱・破砕	36	安山岩	12.68	10	被熱
4	チャート	12.76	2		21	砂岩	12.72	3	被熱・破砕	37	チャート	12.71	4	
5	チャート	12.74	2		22	砂岩	12.71	7	被熱・破砕	38	安山岩	12.69	12	被熱
6	安山岩	12.75	3	被熱・破砕	23	安山岩	12.67	8	被熱・破砕	39	チャート	12.70	4	
7	チャート	12.76	4	被熱・破砕	24	安山岩	12.70	3		40	チャート	12.65	2	被熱
8	安山岩	12.73	13	被熱	25	チャート	12.70	2		41	安山岩	12.77	2	被熱
9	安山岩	12.73	12	被熱	26	チャート	12.70	1		43	チャート	12.68	4	被熱
10	チャート	12.76	14		27	ホルンフェルス	12.78	2		44	チャート	12.74	1	
11	チャート	12.74	7	被熱・破砕	28	砂岩	12.77	2	被熱・破砕	45	チャート	12.68	3	被熱・破砕
12	チャート	12.73	13	被熱・破砕	29	安山岩	12.73	20	被熱・破砕	47	チャート	12.63	2	被熱・破砕
13	安山岩	12.74	8	被熱・破砕	30	チャート	12.78	2	被熱・破砕	48	ホルンフェルス	12.61	4	
14	砂岩	12.73	10	被熱・破砕	31	チャート	12.74	1	被熱	49	チャート	12.63	3	被熱・破砕
15	チャート	12.73	2		32	安山岩	12.74	3	被熱・破砕	50	砂岩	12.63	3	被熱・破砕
17	安山岩	12.71	10	被熱	33	安山岩	12.87	4						

(5) ビット (第54～56図、第12、13表)

ビットは第二面下層から227基が検出された。調査区北西部のB区内のP-10、11、12グリッド、Q-11、12グリッドに集中して分布し、C区ではほとんど検出されていない(第23図)。

ビットが集中するB区では、晩期の住居跡周辺からその多くが検出されている。ビットの規模も、縄文時代晩期前葉の、第12号住居跡内の柱穴や壁柱穴の規模と同様のものが多く、住居跡に関連する可能性が高いが、明確に配列するものやが跡もなかったため、ビットとして報告する。

平面形は、円形もしくは楕円形を呈する。ビットの規模はいずれも柱穴状のものが多かった。

形状や計測値については、ビット一覧表(第12、13表)に記載した。ビットはグリッド毎に番号を付している。

ビット内から遺物はほとんど出土しなかった。また出土したものの大半は小片で、図示できたものは1点のみであった。このため、詳細な時期は不明である。

第54図1は出土した早期後半の条痕文系土器の破片である。貝殻腹縁による連続刺突文が施文されている。



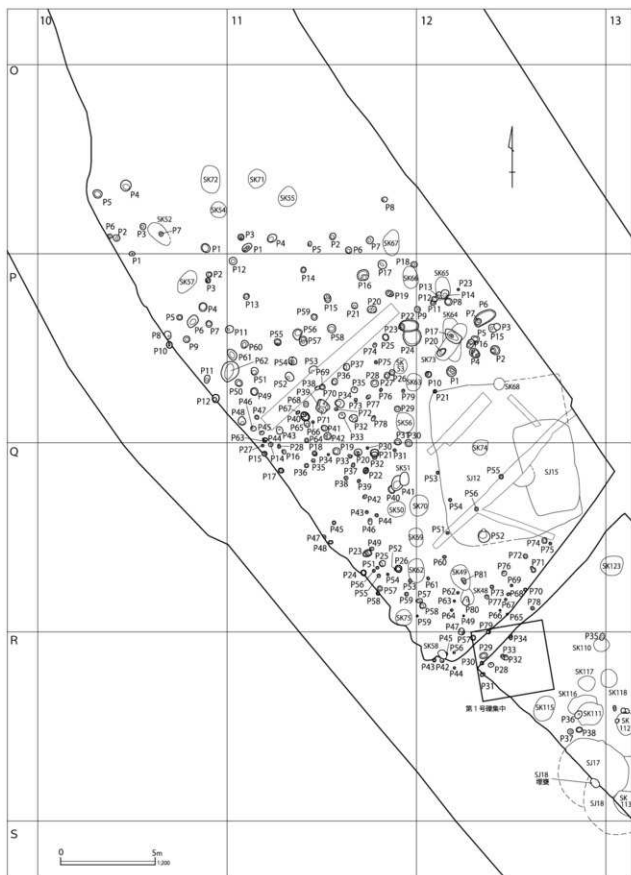
第54図 ビット出土遺物

第12表 ビット一覧表(1)

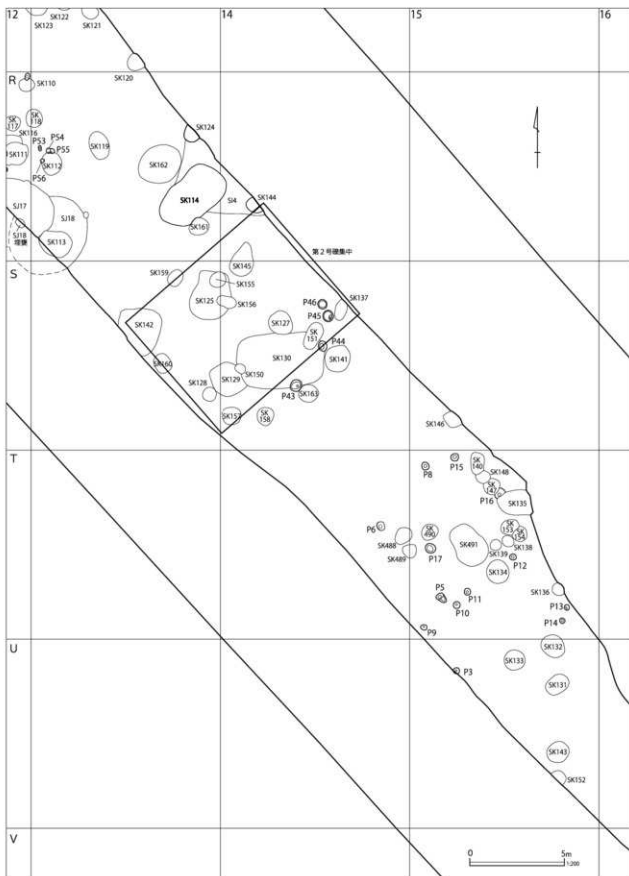
グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
O-10	P1	56	44	15	P-10	P12	45	38	34	P-11	P36	35	31	16
	P2	37	35	21		P11	45	36	47		P37	36	31	22
	P3	34	32	10	P-11	P12	43	40	11		P38	28	18	37
	P4	(60)	56	18		P13	32	29	23		P39	78	70	(12)
	P5	48	45	44		P14	31	30	15		P40	52	45	52
	P6	(25)	24	25		P15	45	35	48		P41	35	32	9
	P7	24	23	37		P16	66	59	27		P42	40	40	31
O-11	P1	57	34	51		P17	47	46	30		P43	42	33	63
	P2	35	32	21		P18	35	29	37		P44	29	16	29
	P3	35	34	23		P19	44	31	37		P45	24	19	22
	P4	52	40	83		P20	49	38	30		P46	29	27	32
	P5	27	21	13		P21	32	32	20		P47	23	21	27
	P6	35	34	35		P22	105	(67)	8		P48	45	39	50
	P7	39	35	34		P23	32	25	30		P49	40	40	20
	P8	32	29	25		P24	95	79	9		P50	40	35	21
P-10	P1	32	23	20		P25	37	33	11		P51	41	38	28
	P2	32	29	19		P26	32	30	29		P52	51	40	50
	P3	28	27	24		P27	33	30	27		P53	50	27	39
	P4	46	43	6		P28	40	39	39		P54	46	44	42
	P5	31	28	27		P29	33	32	10		P55	38	34	32
	P6	70	51	9		P30	38	37	10		P56	59	48	24
	P7	35	35	14		P31	37	33	15		P57	50	40	31
	P8	44	34	42		P32	45	40	43		P58	45	44	17
	P9	35	35	7		P33	35	33	35		P59	33	32	15
	P10	36	31	31		P34	50	42	40		P60	43	38	28
	P11	44	23	58		P35	34	32	31		P61	64	42	15

第13表 ビット一覧表(2)

グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P-11	P62	114	85	10	Q-11	P26	38	38	15	Q-12	P67	13	13	11
	P63	21	19	12		P27	15	14	6		P68	18	14	19
	P64	23	22	62		P28	22	14	45		P69	15	13	23
	P65	38	29	36		P30	14	13	7		P70	19	16	17
	P66	14	13	9		P31	18	15	6		P71	36	15	12
	P67	24	16	26		P32	22	20	11		P72	25	22	12
	P68	32	26	20		P33	24	18	18		P73	20	19	25
	P69	30	28	17		P34	13	13	16		P74	32	27	8
	P70	(27)	27	55		P35	21	19	19		P75	16	14	17
	P71	48	(40)	71		P36	23	22	8		P76	26	26	26
	P72	20	16	22		P37	24	17	18		P77	24	20	14
	P73	19	17	22		P38	22	20	16		P78	20	18	27
	P74	24	20	27		P39	20	16	16		P79	20	20	32
	P75	18	15	8		P40	38	23	5		P80	49	28	48
	P76	19	14	17		P41	84	59	23		P81	36	19	17
	P77	25	19	16		P42	24	18	17	R-12	P28	30	24	26
P-12	P78	30	19	17		P43	17	16	16		P29	42	31	22
	P79	18	16	16		P44	19	17	32		P30	18	18	41
	P1	53	52	28		P45	19	19	33		P31	28	18	43
	P2	51	48	27		P46	42	39	17		P32	27	20	30
	P3	37	33	25		P47	24	13	28		P33	(30)	22	23
	P4	59	45	40		P48	24	18	7		P34	28	20	19
	P5	42	33	90		P49	24	18	25		P42	24	21	16
	P6	125	63	13		P51	17	15	16		P43	20	16	18
	P7	36	30	22		P52	15	13	16		P44	13	17	20
	P8	40	40	10		P53	21	18	10		P45	20	17	20
	P9	34	32	42		P54	14	13	10		P46	13	13	4
	P10	33	33	23		P55	19	18	11	R-13	P47	28	28	17
	P11	28	(24)	18		P56	16	16	16		P52	40	40	21
	P12	31	(27)	4		P57	29	27	18		P53	28	22	29
	P13	44	(30)	57		P58	20	19	16		P54	25	(23)	42
Q-11	P14	50	(44)	61	Q-12	P59	21	21	29		P55	22	19	42
	P15	47	(31)	33		P47	37	34	15	S-14	P43	62	56	24
	P16	(49)	35	36		P49	10	9	11		P44	58	45	23
	P17	100	55	28		P51	16	15	22		P45	62	56	30
	P18	52	32	8		P52	57	50	40		P46	50	48	8
	P19	20	19	20		P53	17	14	39	T-14	P6	44	(15)	10
	P20	13	13	16		P54	27	17	8	T-15	P5	56	42	17
	P14	24	23	26		P55	24	23	26		P8	42	40	15
	P15	27	27	27		P56	22	20	21		P9	34	27	25
	P16	24	21	23		P57	35	22	21		P10	36	36	28
	P17	31	27	38		P58	34	32	20		P11	35	32	21
	P18	29	25	31		P59	12	11	12		P12	35	32	21
	P19	40	40	42		P60	20	14	19		P13	30	28	18
	P20	42	37	24		P61	18	14	11		P14	29	26	17
	P21	46	40	21		P62	15	13	19		P15	40	38	23
	P22	35	28	19		P63	13	12	22		P16	60	(40)	18
	P23	49	35	35		P64	15	13	14		P17	57	50	10
	P24	32	29	14		P65	13	10	14	U-15	P3	35	34	33
	P25	34	31	20		P66	11	10	20					



第55図 第二面下層ビット分布図(1)

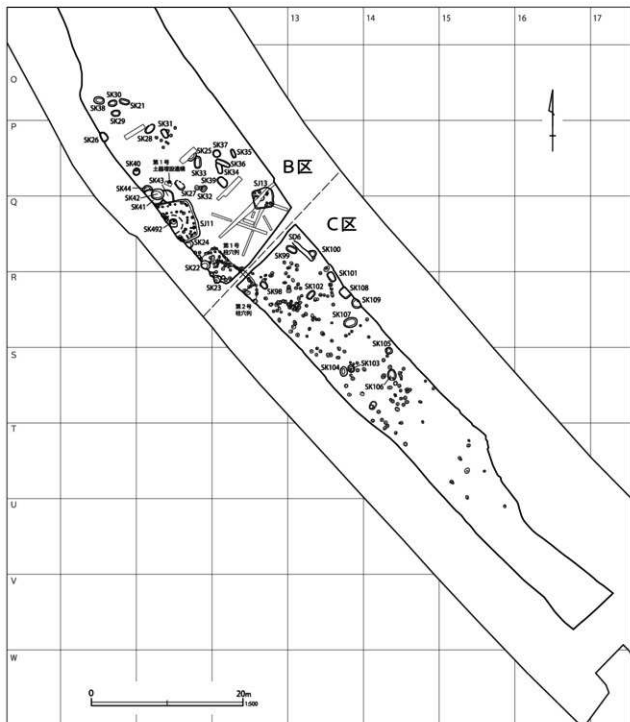


第56図 第二面下層ビット分布図(2)

2. 第二面上層の遺構と遺物

第二面上層遺構検出面（基本土層Ⅵ層上面）では、縄文時代晩期の住居跡2軒、土器埋設遺構1基、土坑37基、柱穴列2列、ビット196基が検出された（第57図）。

遺構はOグリッドからSグリッドに集中して見られる。Tグリッドより南ではビットがまばらに分布し、C区の南端では遺構の分布はほとんど見られなくなる。



第57図 縄文時代の遺構(第二面上層)

(1) 住居跡

第11号住居跡 (第58～60図)

Q-1 グリッドに位置する。第24、41、43、492号土壌と重複する。土層観察から第24号土壌より新しく、第492号土壌より古い。他の土壌との新旧関係は不明である。住居跡の西半分は調査区域外となっている。残存部から平面形は正方形に近いと考えられる。出入り口部の形状は調査区域外のため不明である。残存する規模は、長軸長6.35m、短軸長4.15m、深さ0.40mである。長軸方位はN-36°-Wである。覆土は自然堆積である。

炉跡は住居跡中央で検出された。第492号土壌との重複により北半分が失われている。

柱穴は37本検出された。壁柱穴は外側と内側の二重に巡っており、建て替えまたは拡張されたと考えられる。外側の壁柱穴はP1～17、36で、多くに柱痕が残存していた。内側の壁柱穴はP19～22、26～28、30～33で、柱痕は認められなかった。そのため外側の住居跡が新しいと考えられる。主柱穴は規模からP24、25、29、34、35が相当すると考えられる。いずれも外側の住居に伴うものと考えられる。P18、23、37は出入り口部に関連する柱穴と推定される。炉跡は1箇所であることから、炉は共有していたと考えられる。

遺物は覆土の中層から上層にかけて主に出土し(第59、60図)、土器、石器の他、土偶や耳飾りがある。特に耳飾りは完形、破片合わせて31点が出土したことは注目される。第60図に土製品の分布図を示したが、分布状況は散漫で特に集中する場所は認められなかった。

遺物の時期は安行3a式から3b式が多く見られ、住居跡の時期は晩期前集と考えられる。

第61～69図は出土した遺物である。

第61図1～9、第62図10～37、第63図38～53は出土した土器である。

1は平口縁深鉢形土器の口縁から胴上部で、胴下半は失われている。口縁が内湾し胴部が張る器

形である。口縁部には三角形の区画を隆帯で施文し、三角の頂部には円形貼付文を施している。平らな辺の中央に豚鼻状貼付文を施している。安行3a式である。

2は平口縁深鉢形土器である。胴上部で「く」の字状に屈曲し、口縁部が外傾して立ち上がる器形である。口縁部には山形状の突起を貼付し、突起間の口唇部には棒状工具により刻みが施される。口縁部には並行する弧線により磨消縄文が施される。括れ部は二条の沈線で区画し、区画内は縄文を充填し、列点文を施している。縄文原体はLRである。

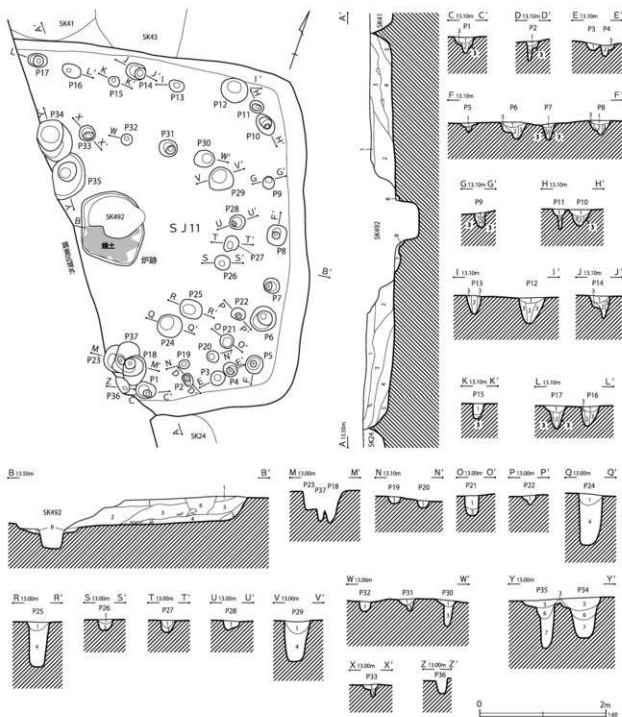
3は深鉢形土器である。口縁部のみが残存する。口縁部には磨消縄文を用いた雷文を施文する。山梨県、静岡県、神奈川県等に分布する清水天王山式土器と考えられる。安行3a・3b式併行であろう。

4は大洞系の浅鉢形土器である。口唇部を欠損する。口縁部が屈曲して内湾する器形である。口縁部と底部外周に沈線と刻みを巡らせる。底部の中心と文様の配置がずれており、文様に偏りが生じている。大洞BC～C1式と考えられる。

5は大洞系の台付鉢である。脚台部を欠損する。胴部に磨消縄文を用いた雲形文を配置する。文様は内彫的ではなく、沈線による平面的な施文である。口縁部と括れ部に二本の沈線を平行して巡らせる。在地で製作された土器であろう。大洞C1式と考えられる。

6、7は安行3b式の組線文土器である。6は口縁部、胴上部に縄文帯を持つ。縄文間に対向する弧線文を施文し、沈線間に縄文を充填する。安行3b式である。7は口縁部と胴部に組線を施し、組線上に刻みが施される。組線文間に対向する弧線文が施される。

8、9は粗製の深鉢形土器である。いずれも底部を欠損する。口縁部が内湾する器形である。8の胴部には輪轡痕が明瞭に残っている。9は口縁



- S J 11**
- | | |
|-----------|-----------------------------------|
| 1 黒褐色土 | 炭化物粒子少量 暗灰色粘土粒子多量 粘質 |
| 2 黒褐色土 | 炭化物粒子・焼土粒子やや多量 ローム小ブロック多量 |
| 3 黒褐色土 | 炭化物粒子・白色粒子・焼土粒子・遺物少量 粘質 |
| 4 黒褐色土 | 炭化物粒子やや多量 大型遺物含む 粘質 |
| 5 にぶい黄褐色土 | ローム粒子・炭化物粒子多量 ややシルト質 |
| 6 黒褐色土 | 炭化物粒子多量 柱穴 しまりにやや欠ける 炭化材含む 縄文のビット |
| 7 灰黄褐色土 | 炭化物粒子微量 暗褐色土とロームブロックの混土 焼土ブロック多量 |
| 8 赤色土 | 焼土層 |

- ビット**
- | | |
|-----------|--|
| 1 灰黄褐色土 | ロームブロックと暗褐色土の混土
しまりやや欠ける |
| 2 黒褐色土 | 炭化物粒子少量 暗褐色土多量
しまりに欠ける (柱穴) |
| 3 にぶい黄褐色土 | ロームブロック多量 しまりやや直し
炭化物粒子多量 遺物含む しまりに欠ける |
| 4 黒褐色土 | 焼土粒子少量 炭化物粒子多量 |
| 5 暗褐色土 | ロームブロックやや多量 ややしまりに欠ける
炭化物粒子多量 ローム小ブロック少量
しまりに欠ける |
| 6 黒褐色土 | 暗褐色土とローム小ブロックの混土
しまりに欠ける |

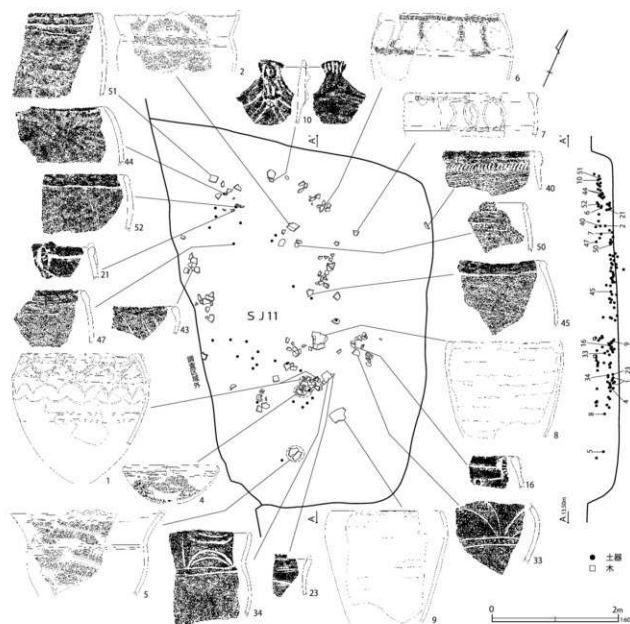
第58図 第11号住居跡

第14表 第11号住居跡柱穴一覧表 (第58図)

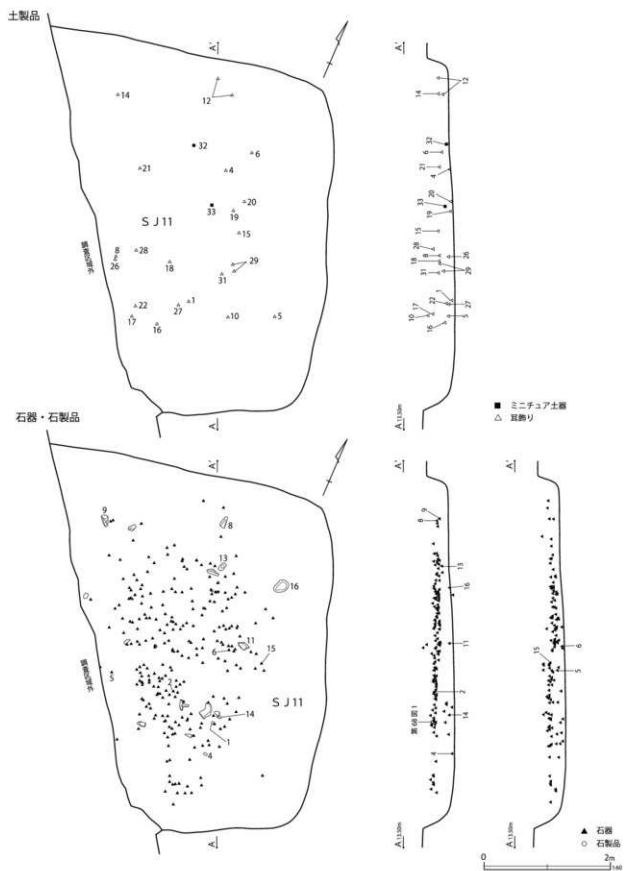
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	33	27	26
P2	21	16	30
P3	25	20	12
P4	22	22	16
P5	29	28	15
P6	42	38	25
P7	26	23	23
P8	33	30	18
P9	20	18	22
P10	36	25	26
P11	22	19	30
P12	42	40	38
P13	25	18	28

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P14	30	25	35
P15	17	16	25
P16	30	20	30
P17	32	20	35
P18	50	35	47
P19	16	14	10
P20	20	18	10
P21	22	22	30
P22	22	20	16
P23	40	(17)	33
P24	38	38	76
P25	35	30	70
P26	25	23	18

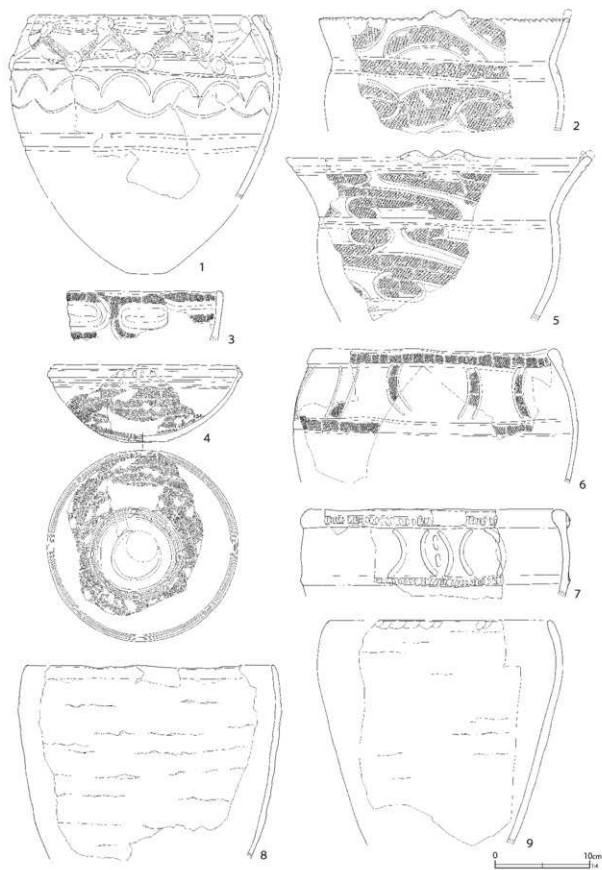
番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P27	28	22	20
P28	25	25	15
P29	38	38	60
P30	32	26	42
P31	30	28	20
P32	19	18	20
P33	25	25	20
P34	65	(53)	65
P35	77	55	76
P36	30	(17)	24
P37	50	(30)	30



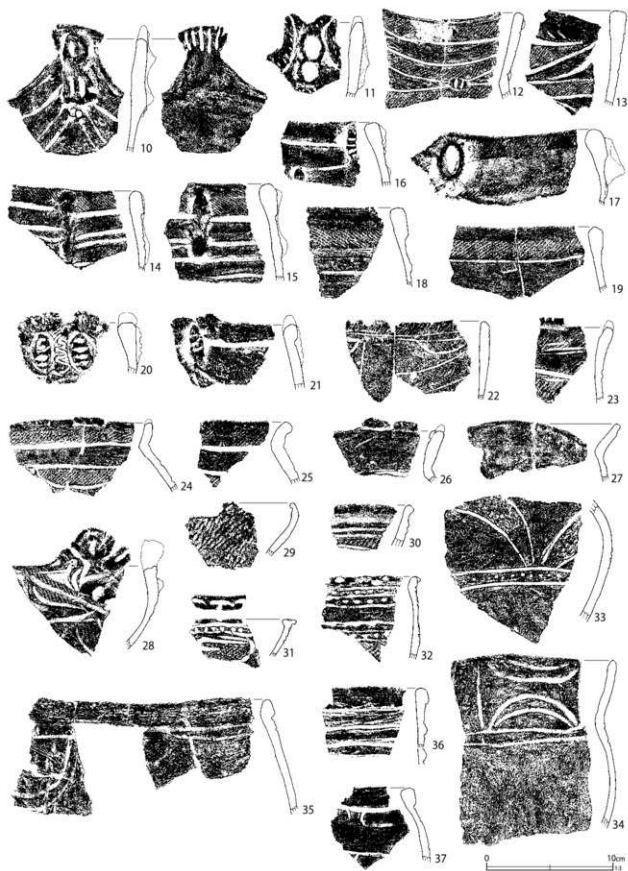
第59図 第11号住居跡遺物出土状況(1)



第60図 第11号住居跡遺物出土状況(2)



第61图 第11号住居跡出土遺物(1)



第62图 第11号住居跡出土遺物(2)

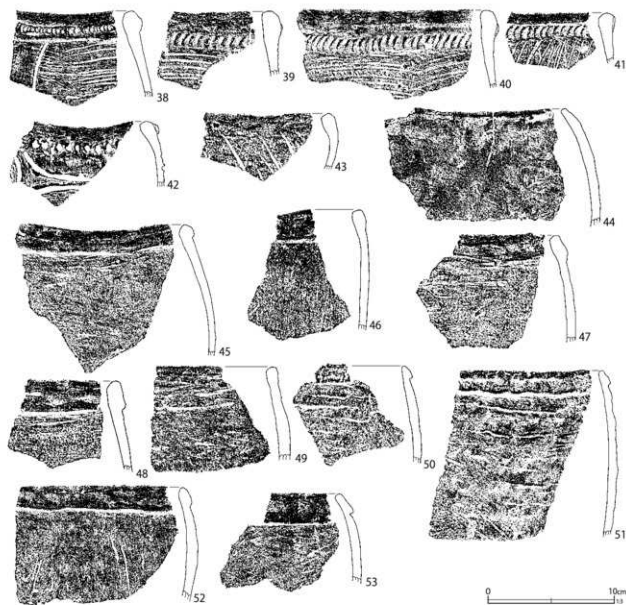
部に指頭痕が認められる。

第62図、63図は破片資料である。

第62図10～13は大波状口縁深鉢形土器である。10は波頂下部に豚鼻状貼付文を二段に配し、その直下に小型の豚鼻状貼付文を施している。波頂部の装飾は簡素で薄手に作られている。安行3 a～3 b式。11は波頂下部に円形の貼付文を二段貼付し、口縁に沿って刺突が施される。安行3 b式。12は波底部分にあたり、三角形区画文の斜辺が弧

線になっている。沈線で縄文帯を区画している。安行3 b式。13は口縁部が無文である。安行3 a～3 b式と考えられる。

14～21は口縁が内湾して立ち上がる平口縁深鉢形土器である。14、15、18、20は安行3 a式、17、19は安行3 a～3 b式、16、21は安行3 b式である。14、15は刻みのない縦長の瘤が貼付される。16は口縁部に刻みのある縦長の瘤が貼付され、棒状文の下に円形の貼付文が施され、縄文は施されない。



第63図 第11号住居跡出土遺物(3)

17は円形でくぼみのある貼付文が施される。20は口唇部に横長の貼付文、直下に縦長の貼付文を対に配置し、貼付文間に蛇行沈線が施文される。

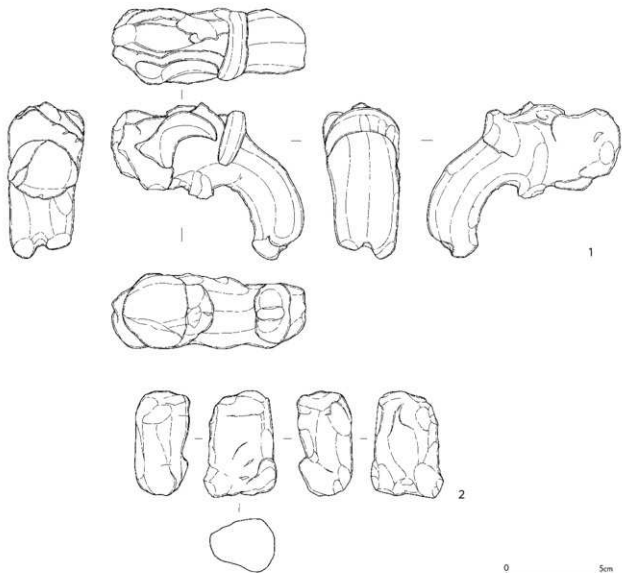
22は細密沈線文の深鉢形土器である。口唇部に二個一對のくぼみが付けられる。口縁部に沈線と細密沈線文が施文される。胴部には弧線文を描き、文様内に矢羽状の細密沈線文が施文される。摩耗が激しく文様は不明瞭である。安行3b式である。

23は口縁部が外反し、括れを持つ深鉢形土器である。磨消縄文が施される。安行3a式である。

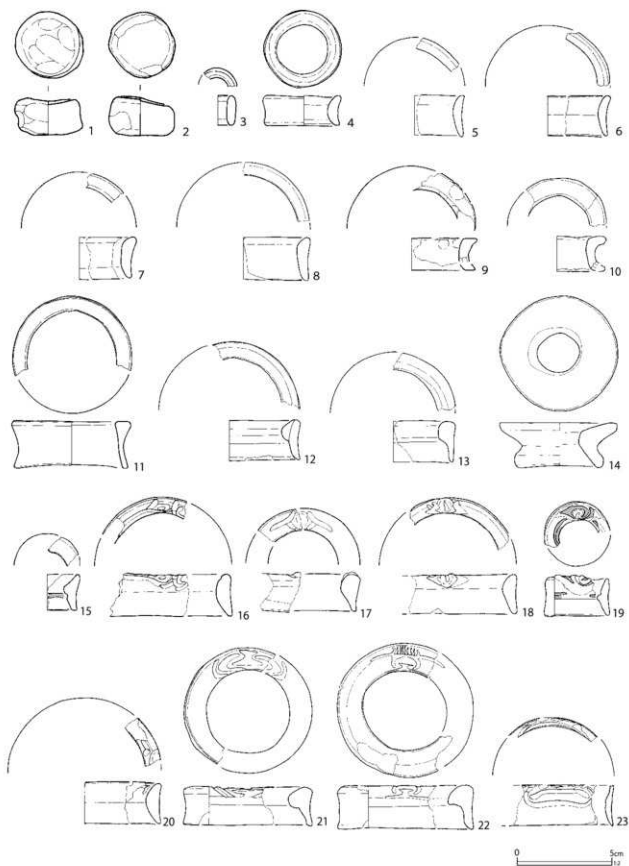
24～27、33、34は口縁部が屈曲する深鉢形土器

である。24、25は口縁部の縄文帯の下に磨消部を持つ。安行3a式。26は口唇部に二個一對の突起が貼付される。口縁部内面には沈線が巡っている。安行3b～3c式。33は沈線と列点で文様が構成される。安行3c式。34は沈線のみ施文される。口縁部に上下に対向する弧線を縦方向の沈線で区切られる。安行3c式である。

28～30は浅鉢形土器である。28は口縁部に刻みのある貼付文を有し。直下にいびつな円形の貼付文を配し、貼付文を中心に三叉文等の沈線文と磨消縄文が施される。安行3a式である。



第64図 第11号住居跡出土遺物(4)



第65图 第11号住居跡出土遺物(5)

31、32は大洞系の土器である。31は浅鉢形土器で、口唇部にはT字状の文様が施文される。口縁部に沈線と列点が施される。大洞C1式。32は深鉢である。口唇部にB突起が二細貼付される。口縁部と胴部に沈線を巡らせ、沈線間に列点が施文される。大洞BC～C1式である。

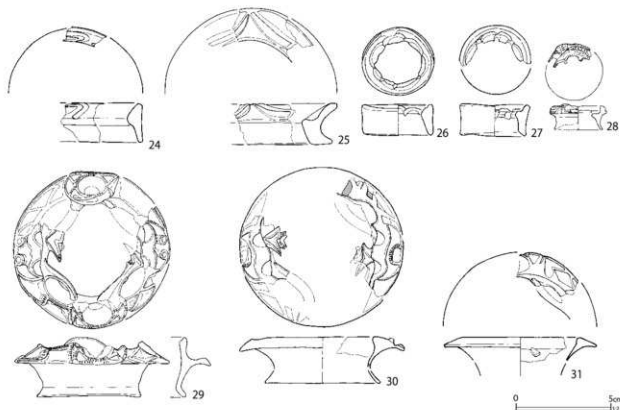
35～37は半粗製の深鉢形土器である。35は口縁部が肥厚し内湾する。文様は沈線のみで、器面の調整が粗い。安行3a～3c式。36は口縁部がわずかに内傾する形態である。隆帯の上下に沈線を巡らせる。外面に調整の痕跡が浅筋に残り、調整が粗い。37は口縁部が内湾する形態である。棒状の沈線文が施文される。

第63図38～42は紐線文土器である。38～42は、口縁部に紐線を貼り、工具によりひだ状の刻みが付けられる。38は横位の条線が弧線文で区切られる。安行3a式。39、40は横位に条線のみが施さ

れている。安行3a式。41は口縁が直立気味である。安行2式。42には条線が施されず、調整や施文が粗い。沈線を描いた際の粘土が付着している。安行3b式である。

43～53は粗製の深鉢形土器である。ヘラ状工具により調整が施される土器が多い。45～49は口縁部が肥厚する。50～53は折り返し口縁である。50、51の外面には輪積痕が残るが、内面は調整されているため輪積痕は残らない。

第64図1、2は土偶である。1は大型土偶の左腕と考えられる。欠落部分に接する面は未調整のまま焼成されている。完形品と言ってよく、いずれの面でも破損や剝離による痕跡は確認できない。中実で、かなり重量があり、最大高は8.2cm、最大幅は10.2cm、厚さは4.0cmである。橙褐色から黒褐色を呈している。胎土は粗く、砂粒を多く含み、焼成は良好である。無文で、腕の部分は比較



第66図 第11号住居跡出土遺物(6)

第15表 第11号住居跡出土遺物観察表(1)(第65～67図)

番号	器種	最大径	最小径	高さ	残存	文様	形状	断面形	備考・出土位置	図版
1	耳飾り	3.6	—	1.9	100	無文	白形	長方形	No. 297	43-1
2	耳飾り	3.5	—	2.6	95	無文	白形	長方形	B	43-2
3	耳飾り	(2.0)	—	1.6	35	無文	白形	長方形	A	43-3
4	耳飾り	4.1	3.6	1.6	100	無文	環状	三角形	No. 445	43-4
5	耳飾り	(5.2)	(5.0)	2.2	15	無文	環状	三角形	外面赤彩 No. 295	43-5
6	耳飾り	(6.6)	(6.3)	2.2	20	無文	環状	三角形	No. 246	43-6
7	耳飾り	(6.0)	(5.4)	2.2	15	無文	環状	三角形	B	43-7
8	耳飾り	(7.0)	(6.8)	2.3	25	無文	環状	三角形	No. 300	43-8
9	耳飾り	(6.6)	(6.0)	[1.5]	20	無文	環状	三角形	A	43-9
10	耳飾り	(5.2)	(4.0)	1.8	25	無文	環状	三角形	A	43-10
11	耳飾り	6.2	5.4	2.5	50	無文	環状	三角形	No. 301・303	43-11
12	耳飾り	(7.4)	(7.3)	2.2	25	無文	環状	P字形	B	43-12
13	耳飾り	(6.5)	(6.2)	2.2	25	無文	環状	P字形	B	43-13
14	耳飾り	6.2	4.0	2.4	100	無文	環状	「く」の字	No. 305	43-14
15	耳飾り	(3.4)	(3.0)	1.9	15	沈線	環状	三角形	内面沈線内赤彩 No. 73	43-15
16	耳飾り	(7.2)	(7.0)	2.3	20	三叉文	環状	三角形	No. 285	43-16
17	耳飾り	(6.0)	(5.8)	2.0	15	三叉文+突起	環状	三角形	No. 309	43-17
18	耳飾り	(7.2)	(7.0)	2.2	25	沈線+突起	環状	三角形	Q12G ⑦	43-18
19	耳飾り	3.5	2.3	2.0	50	沈線+突起	環状	三角形	調整組い 歪み大 内面沈線内赤彩 No. 272	43-19
20	耳飾り	(8.0)	(7.9)	2.2	10	沈線+突起	環状	三角形	No. 270	43-20
21	耳飾り	6.8	6.5	2.1	50	沈線	環状	P字形	No. 129	43-21
22	耳飾り	7.2	6.9	2.3	55	沈線	環状	P字形	A	43-22
23	耳飾り	(6.3)	(6.2)	2.2	25	沈線	環状	三角形	Q12G ⑨	43-23
24	耳飾り	(7.0)	—	2.1	10	沈線	環状	P字形	No. 311	43-24
25	耳飾り	(9.0)	(7.3)	2.2	10	沈線	環状	三角形	B	43-25
26	耳飾り	3.8	3.7	1.6	100	沈線	環状	三角形	No. 412	43-26
27	耳飾り	3.7	3.4	1.7	50	沈線	環状	三角形	No. 287	43-27
28	耳飾り	(3.0)	(2.3)	1.3	25	沈線	環状	三角形	内外面沈線内赤彩 No. 47	43-28
29	耳飾り	8.3	5.0	3.3	70	透かし彫り	環状	「く」の字	内面赤彩 No. 292・279	43-29
30	耳飾り	(8.8)	(5.0)	[1.7]	50	透かし彫り	環状	「く」の字	文様内赤彩 A B	43-30
31	耳飾り	(8.0)	—	[1.3]	15	透かし彫り	環状	「く」の字	No. 201	43-31
34	土製円盤	長さ4.6	幅4.8	厚さ0.8	—	無文	—	—	B	44-4

的良く整形されており、肩章及び肩から胸部の中央に向けて乳房につながる隆帯が施されている。腕先は二つに分かれていると考えても差し支えないであろう。

2は中型土偶の未製品であろう。土偶の胴部を作りかけ、途中でやめたまま焼成されたものであろうか。粘土塊から脚部を作り出そうとした痕跡が残っている。破損は見られず完形品である。最大高は5.7cm、最大幅は3.9cm、厚さは2.9cmである。中実で、灰褐色から黒褐色を呈す

る。胎土は粗く、砂粒を多く含み、焼成は比較的しっかりしている。

第65図1～23、66図24～31は耳飾りである。赤彩が施されていた可能性が高いが、沈線等の文様内にわずかに残存するのみであった。

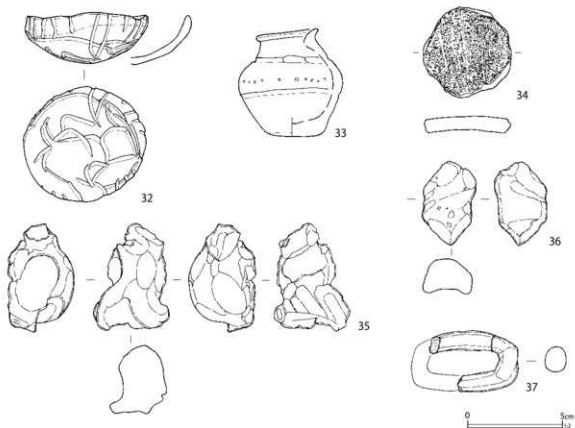
1、2は白形の耳飾りである。上面を指で押さえてくぼみを作っている。3～14は環状で無文の耳飾りである。断面形は、長方形、三角形、P字形、「く」の字形の4種類がある。15～28は環状で文様を有する耳飾りである。断面形には、三角

形、P字形の2種類がある。15は内面に沈線が巡り、沈線内に赤彩が残存する。16は円形の沈線文を三叉文で囲む文様が施される。円形の文様は欠損部と合わせて二箇所であった。17、18、24は円形の貼付文が三叉文で囲まれている。19は内面に沈線が巡る。粘土を貼り付けた部分に三叉文が入組んだ文様が施される。沈線内に赤彩が残存する。20～23は弧線による文様を描く。25は上面を削り立体的な文様が作られている。26、27は内面に粘土紐が貼付され、その上から連続する弧線が描かれる。貼付文を連続して付したように作られている。28は小形の耳飾りである。上面を深く削り立体的な文様が作られる。上面、側面に細かな刺突が施される。内面の突起は五単位である。内外面沈線内に赤彩が残存する。29～31は透かし彫りの耳飾りである。厚さ約1mmと薄手である。群馬県

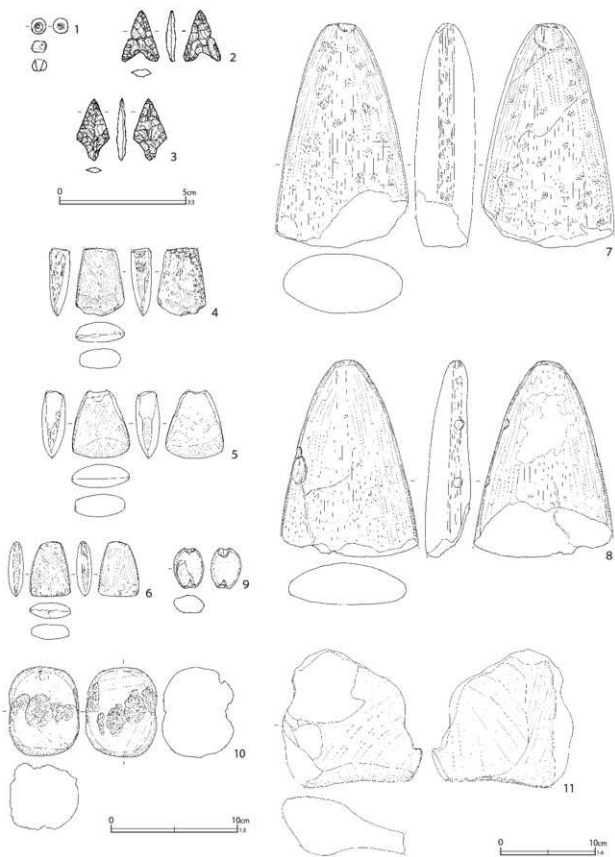
桐生市千綱谷戸遺跡で多数出土した透かし彫りの耳飾りと類似する形状、文様である。29は摺鉢形のモチーフと半円形のモチーフで四単位の文様を作り、その間をブリッジでつないでいる。文様部分全体に刻みが付けられていたようだが、風化が激しく不明な部分が多い。色調は灰白色である。30は29と似た半円形モチーフを持つ。四単位と考えられる。内面にブリッジが作られる。風化が進み文様が不明な部分がある。色調は明橙褐色である。31は菱形のモチーフを持つ。風化が進んでいる。色調は明橙褐色である。

第67図32～37は土製品である。

32、33はミニチュア土器である。32は浅鉢形である。口縁部に縦方向の沈線を巡らせ、底部には放射状の沈線が施される。33は壺形である。横線の区画内に刺突を巡らせる。風化が激しく文様は



第67図 第11号住居跡出土遺物(7)



第68图 第11号住居跡出土遺物(8)

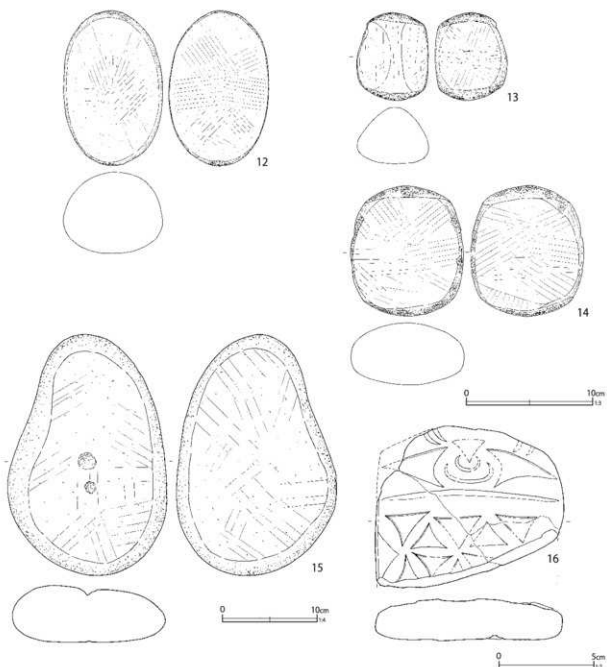
不鮮明である。

34は土製円盤である。深鉢形土器の胴部破片を用いて作られる。文様は施されず、ヘラ状工具で調整した痕跡が残る。

35、36は不整形の焼成された粘土塊である。35の最大高は5.7cm、最大幅は4.0cm、厚さは3.6cmである。胎土は密で、良く焼成されており、表面

には手指の指紋が数か所残っている。36の最大高は4.5cm、最大幅は2.8cm、厚さは1.8cmである。胎土は密で、かなり良く焼成されている。非常に軽く、二次的な焼成を受けている可能性が高い。

37は環状になると考えられる土製品である。用途は不明である。約3分の1を欠損している。形状は隅丸長方形に近い楕円形で、推定される長径



第69図 第11号住居跡出土遺物(9)

第16表 第11号住居跡出土遺物観察表(2) (第68,69図)

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置	図版
1	垂飾	不明	0.6	0.6	0.4	0.2	No.30	48-14
2	石鏃	チャート	2.0	1.5	0.4	0.6	No.151	48-15
3	石鏃	チャート	2.4	1.3	0.3	0.7	B	48-16
4	磨製石斧	火成岩	[5.4]	3.8	1.6	52.5	No.401	48-17
5	磨製石斧	火成岩	[5.4]	4.5	1.9	64.8	No.280	48-18
6	磨製石斧	不明	4.3	3.2	1.2	19.6	No.276 被熱	48-19
7	磨製石斧	安山岩	[17.8]	[10.4]	4.8	1191.0	No.342 被熱	48-28
8	磨製石斧	火成岩	[15.5]	[10.9]	3.5	668.8	No.332 被熱	48-21
9	石錘	安山岩	3.2	2.4	1.5	14.1	A	48-20
10	石錘	安山岩	7.2	5.6	5.4	146.8	B	48-23
11	砥石	砂岩	[14.5]	[14.7]	6.6	1193.9	No.370 被熱	48-22
12	磨石	安山岩	12.5	7.9	6.4	871.3	No.357	48-26
13	敲石	安山岩	7.9	5.6	4.5	283.7	B 黒化	48-24
14	敲石	安山岩	10.3	9.0	4.9	713.9	No.396	48-27
15	石皿	閃緑岩	25.5	16.8	6.5	3966.6	No.371	
16	岩板	不明	[8.5]	9.9	[2.5]	116.6	No.293	48-25

は5.6cm、短径は3.2cmである。環の径は約1.2～1.3cmである。胎土は密で赤褐色を呈し、焼成も良好である。

第68図2～11、第69図12～15は出土した石器である。

2、3は石鏃である。2は無茎で基部に三角形状に抉りを入れる。左脚部を欠損後、再加工している。3は有茎で基部が逆三角形に突出する。丁寧に調整加工している。

4～8は磨製石斧である。いずれも定角式で平面形は刃部に最大幅がある。4～6は小型である。4は刃部を欠損後、再加工している。基部を欠損している。5は基部を欠損した際、両側面の一部が剥落したと考えられる。6は被熱により、器面が白くひび割れている。7と8は大型である。どちらも被熱のため赤化している。刃部は欠損している。

9と10は石錘である。9は楕円磔を使用し、上下端部に敲打による抉りを入れた後、切り込みを入れている。10は楕円磔を用いて、中央部を一周するように敲打で凹ませている。

11は大型の砥石である。被熱により赤化してい

る。

12は磨石である。楕円磔を用い、上下端部は敲打によりわずかに潰れている。

13と14は敲石である。平坦面を磨石として使用し、その後上下端部を敲石として利用している。

15は石皿である。扁平な楕円磔をそのまま使用している。表面に漏斗状の凹穴を持つ。

第68図1、第69図16は出土した石製品である。

1は玉状の垂飾である。入念な研磨で円形に整形している。片面から穿孔している。

16は岩版である。中央の沈線で上下に区画している。上の区画では、二単位の刻みの下に横長の三叉文の陰刻を左右に描き、中央には逆三角形の陰刻、弧線文が施される。下の区画では、三角形の陰刻が上下に組み合っている。平面形は長方形と考えられる。下端部は欠損後磨かれている。裏面にも同様の陰刻が入っていたと考えられるが、摩耗と風化が著しく文様は不明である。全体的に白く表面が艶いのは、整形前に熱を受けたことによる。

第13号住居跡 (第70～76図)

P、Q-12グリッドに位置する。下層出土の第15

号住居跡は基本土層Ⅵ層を挟み重複している。

住居跡は基本土層Ⅵ層上面から掘り込まれていた。平面形は方形で規模は長軸長2.54m、短軸長2.68m、深さ0.34mと小形である。長軸方位はN-13°-Wである。覆土は自然堆積と考えられる。

竈跡は住居跡の中央やや西寄りにある。トレンチにより北半分が失われて、確認できた規模は長径0.72m、短径0.28m、深さ0.23mである。

柱穴は9本検出された。規則性はなく、いずれも浅いもので主柱穴は不明である。

遺物は、中層から上層にかけて集中していた(第71図)。

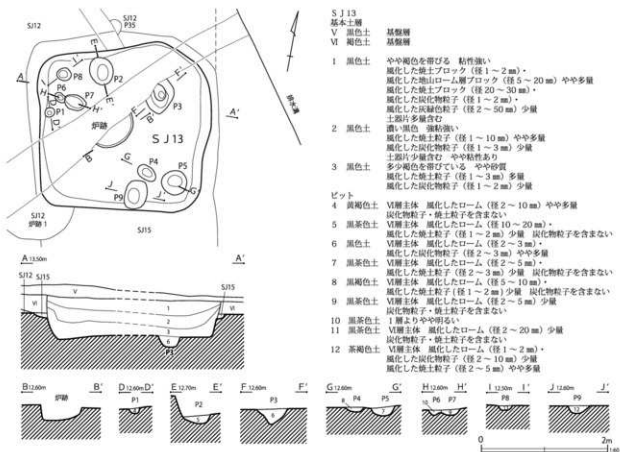
出土した土器は破片が主体で、器形復元できたものは少なかった。遺物の時期は安行3 a 式から3 c 式であるが、下層からほぼ完形で出土した1の土器が安行3 a 式であることから、住居跡の時

期は安行3 a 式期と考えられる。

第72図1はほぼ完形で出土した平口縁深鉢形土器で、下層から単独で出土した。内面を上に向け潰れた状態で出土した。口縁部が内湾する器形で、三段の帯縄文を施し、一段と二段間に杵状文が配置される。口縁部に円形の貼付文が施される。胴部には斜位の条線が二段施文される。安行3 a 式である。口径23.1cm、底径3.4cmである。

2は台付鉢の脚台部である。球胴状の脚台が一旦括れ、裾部が直線的に開く形状である。接合しないが同一個体の裾部がある。球胴部分に入組文が施される。裾の括れ部には二条の沈線を巡らせ、沈線間に列点が施文されている。裾部には放射状に沈線文が施される。沈線は一本の部分と二本一対の部分がある。安行3 c 式である。

3は大洞系の浅鉢である。口縁部に二本の沈線



第17表 第13号住居跡柱穴一覧表 (第70図)

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	16	14	10
P2	44	38	16
P3	(54)	(32)	24

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P4	102	34	12
P5	40	40	16
P6	32	22	7

番号	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P7	34	24	8
P8	(16)	14	8
P9	22	20	6

を巡らせ、体部に雲形文が施文される。外面全体に煤が付着するが、内面には付着していない。

4は無文の粗製土器の底部である。裏面に棒痕に類する圧痕が見られるが、詳細は不明である。

第73図6～37、第74図38～57は破片資料である。

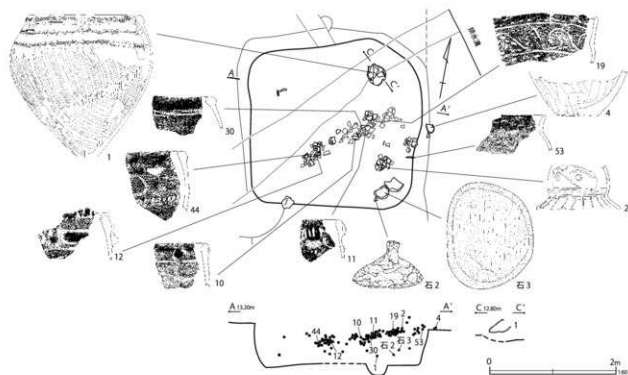
6～9は波状口縁深鉢形土器である。6～8は安行3 a 式、9は安行3 c 式である。6、9は波頂部の破片である。6は突起の先端を欠損する。波頂部下に三角形区画文と単節R L の縄文を施文している。9は口縁部に沿って刺突列が施される。縄文は施文されず、沈線により文様が施される。8は括れ部の縄文帯直下に刺突列を巡らせる。

10～14は口縁が内湾する平口縁深鉢形土器である。10～13は安行3 a 式、14は安行3 b 式である。

10は口縁部に円形の貼付文が施される。11は口唇部に横長の貼付文が施され、直下にくぼみが付けられる。12は縦長の豚鼻状貼付文の上部を欠損する。二段貼付されていたと考えられる。13、14も口縁部に豚鼻状貼付文が二段施されている。

15～20は頸部が屈曲し、口縁部が外反する深鉢形土器である。15～18は安行3 a 式、19、20は安行3 c 式である。16は口縁が肥厚しない。LRの縄文が施される。17、18は磨消縄文が施文される。19は口縁部と胴部に横位の沈線と列点が巡り、横位に連続する入組文が描かれる。外面全面と内面の括れ部より下に煤が付着する。20は沈線のみが施され、括れ部に並行する沈線を巡らせる。

21～23は浅鉢である。21、22は安行3 a 式、23



第71図 第13号住居跡遺物出土状況

は安行3c式である。21は口縁部が内湾する形態で、口縁は波状を呈する。波頂部下に三角形の磨消部を持ち、磨消部の横に弧線文と三叉文を配置する。胴部にメガネ状の隆帯を持つ。22は口縁部が波状を呈する。波頂部に三叉文と口縁に沿って沈線が施文される。口縁部を磨消し、内面にミガキが施される。23は口縁部に並行する沈線と列点を施し、胴部に三叉文と弧線からなる文様が施文される。外面に煤が付着する。

24は台付鉢の脚台部である。沈線を放射状に施

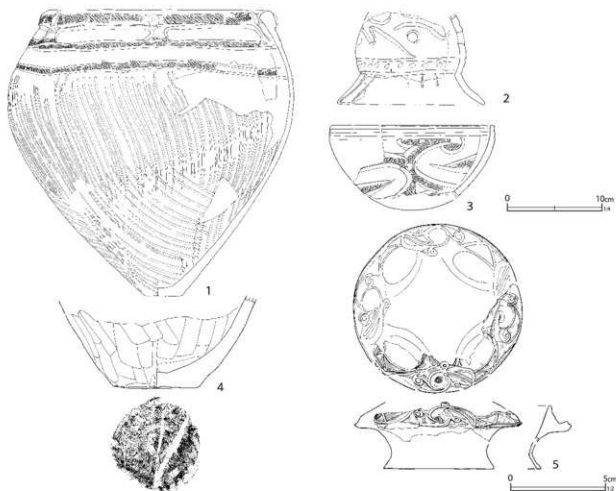
文する。

25は大洞系の深鉢形土器である。外面に単節LRの縄文、結節縄文が施される。

26～48は紐線文系の土器である。26～28は安行2式、29～38は安行3a式、39～48は安行3b式である。

49～55は粗製の深鉢形土器である。49、50は無節の縄文のみで、他は無文である。

56、57は浅鉢形土器である。いずれも無文で、赤彩の痕跡は見られなかった。57の口縁の端部は



第72図 第13号住居跡出土遺物(1)

第18表 第13号住居跡出土遺物観察表(1)(第72図)

番号	器種	最大径	最小径	高さ	残存	文様	形状	断面形	備考・出土位置	図版
5	耳飾り	(8.9)	(5.3)	[2.1]	50	透かし彫り	環状	「く」の字	赤彩	37・2

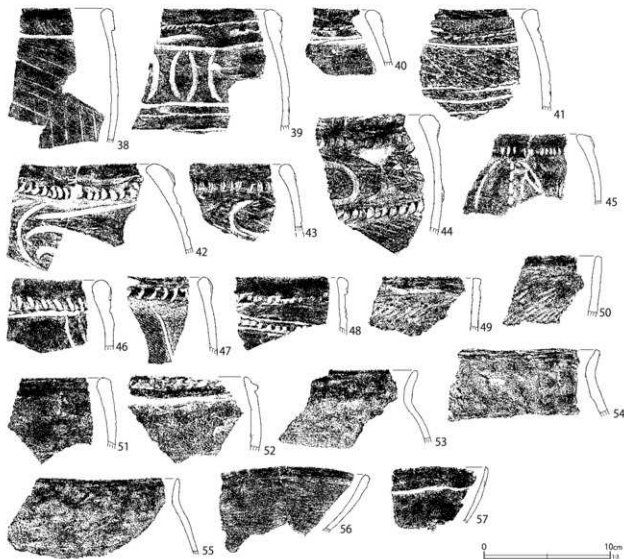


第73图 第13号住居跡出土遺物(2)

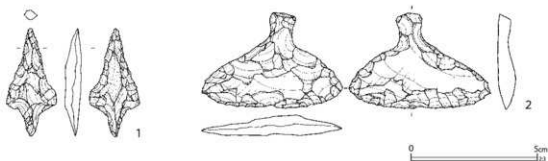
折り返し状となっている。

第72図5は透かし彫りの耳飾りである。文様部分が約半分出土した。播鉢形の円形モチーフとブ

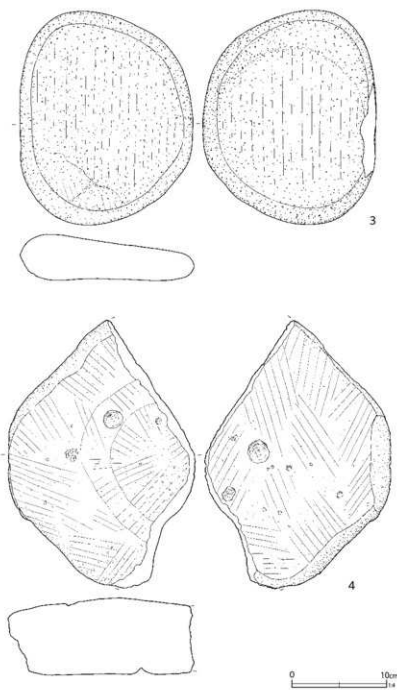
リッジを組み合わせた文様を、四単位施文すると推定される。文様のくぼんだ部分には、一部赤彩が残存している。



第74図 第13号住居跡出土遺物(3)



第75図 第13号住居跡出土遺物(4)



第76図 第13号住居跡出土遺物(5)

表面は凹凸があり、粘土の塊が残る等丁寧な調整ではない。

第75図1、2、第76図3、4は出土した石器である。

1は石鏃である。有茎で基部が逆三角形に突出する。基部の付け根は浅く挟り、茎が細長く作られている。側縁部はわずかに内湾する。裏面には一部風化面が残存している。

2は掻・削器である。つまみを持ち、いわゆる横型石匙である。剥片を素材として縁辺を丁寧に調整加工している。一定の角度を持つことから、掻器として使われたようである。

3、4は石皿である。

3は住居跡の南東コーナー周辺から出土した。裏面右側縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。大型の扁平礫を整形せずにそのまま利用しているもので、表裏面は使用によって摩耗している。

4は大型で肉厚な礫を使用している。全体の半分程度が残存している。表面は中央がわずかに凹んでいる。裏面は平坦であるが、使用による摩耗が認められる。両面には漏斗状の凹穴が見られる。

第19表 第13号住居跡出土遺物観察表(2)(第75、76図)

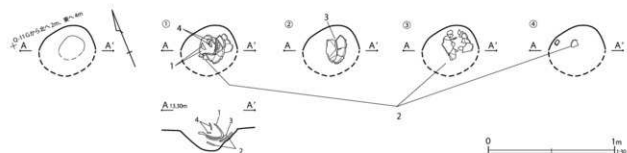
番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考・出土位置	図版
1	石鏃	頁岩	4.2	2.0	0.7	3.8		48-29
2	掻・削器	頁岩	3.8	5.6	0.9	11.5	No 53	48-30
3	石皿	閃緑岩	22.6	18.2	5.3	3396.3	No 52	48-31
4	石皿	安山岩	[28.3]	[19.2]	9.2	6686.6	No 51	48-32

(2) 土器埋設遺構

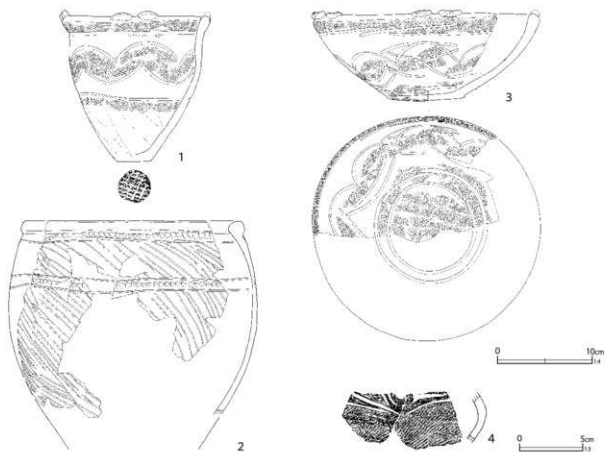
第1号土器埋設遺構 (第77, 78図)

P-11グリッドに位置する。残存していた掘り方は円形で、直径0.44m、深さ0.17mである。遺構内には、3個体の土器が重なって埋設されていた(第77図)。第78図1～4は埋設された土器である。2、3は破片の状態で壁の傾斜に沿って重なっていた。2の組線文土器が下に、その上に口

唇部が上を向くよう3の浅鉢形土器を重ねている。2、3の上に、1の精製の深鉢形土器が埋設時は正位に置かれていたと考えられる。4は、小型の浅鉢形土器の破片で、1の内側に位置する。1と組み合わせた可能性もある。4を含めても、深鉢形土器と浅鉢形土器を意識的に交互に重ねて埋設したと考えられる。遺物は安行3b式で、遺構の時期も同様と考えられる。



第77図 第1号土器埋設遺構



第78図 第1号土器埋設遺構出土遺物

(3) 土墳

土墳は第二面上層で37基検出された。B区中央のOグリッドからC区中央のSグリッドにかけて散漫に分布し、Tグリッド以南では検出しなかった。出土した遺物は、縄文時代後晩期の土器が主体である。出土土器の大半は小片で、図示できるものは少ない。土墳の時期の大半は晩期と考えられるが早期、前期、中期の土器片が検出されたものもあったが、それらの土器の出土量は少なく、大半が土墳の時期に伴わない可能性が高い。

第21号土墳 (第79、84図)

O-10グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸長1.32m、短軸長0.69m、深さ0.23mである。長軸方位はN-77°-Wである。

土墳の西端からは、円礫と石皿(第84図3)の破片の上に壺形土器(第84図1)が倒置された状態で検出された。遺物が頭部側に設置されていた墓墳と考えられる。

1～3は出土した遺物である。1は壺形土器で、肩部から口縁部側は欠損している。埋設の際に故意に打ち割られた可能性がある。残存部には無節Lの縄文が施されるのみで、他に文様は施されていない。底径は7.8cmである。2は紐線文土器の口縁部の破片である。3は石皿である。1の壺形土器の割れ口に合うよう、打ち割って大きさを調整している。表裏面は使用のため凹んでいる。

第22号土墳 (第79、84図)

Q-11グリッドに位置する。一部が調査区域外にある。残存部から平面形は楕円形と考えられる。残存規模は長軸長1.26m、短軸長1.05m、深さ0.58mである。遺物は晩期安行式の土器片が主体的に出土した。第84図4は環状の耳飾りである。5は粗製土器で、口縁部に2列の刺突が施される。6は紐線文土器である。紐線の下に刺突列が巡らされている。

第23号土墳 (第79、84図)

R-12グリッドに位置する。一部が調査区域外

にあり、平面形は不明である。残存規模は長径1.03m、短径0.97m、深さ0.63mである。遺物は条痕文系の瀬ガ島台式期の土器が主に出土した。第84図7、8は口縁部、9は胴部の破片である。

第24号土墳 (第79図)

Q-11グリッドに位置する。第11号住居跡と重複する。一部が排水溝に壊されていたが、平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長1.00m、短軸長0.90m、深さ0.35mである。遺物は後晩期の土器の小片が少量出土したのみで時期は確定できなかった。

第25号土墳 (第79、84図)

P-11グリッドに位置する。平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長1.37m、短軸長0.49m、深さ0.39mである。遺物は加曽利E式の土器片、後晩期の土器小片が出土した。第84図10は出土した深鉢形土器の胴部片である。

第26号土墳 (第79、84図)

P-10グリッドに位置する。平面形は不整楕円形である。規模は長軸長1.30m、短軸長0.82m、深さ0.36mである。長軸方位はN-30°-Wである。遺物は中期末の土器片2点、後晩期の土器片6片が出土した。第84図11は紐線文土器の胴部破片である。

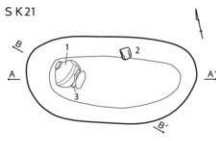
第27号土墳 (第79、84図)

P-11グリッドに位置する。中世に掘削された第1号溝跡に壊されており、平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長1.40m、短軸長0.75m、深さ0.15mである。第84図12は出土した深鉢形土器の底部に近い胴部の破片である。中期末葉の加曽利EⅢ式である。

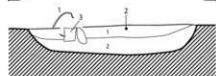
第28号土墳 (第79、84図)

P-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.46m、短軸長0.86m、深さ0.18mである。長軸方位はN-43°-Eである。第84図13は紐線文土器の口縁から胴部で、推定される口径は25.0cmである。安行3a式である。

SK 21



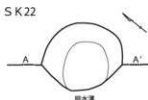
A 12.70m



0 1 m 1:30

- SK 21
1 黄灰色土 白色粒子微量 炭化物粒子少量 遺物含む
2 黒褐色土 炭化物粒子少量 暗灰色粘土をブロック状に含む

SK 22

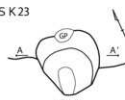


A 13.30m



- SK 22
1 黒色土 炭化物粒子多量
2 黒色土 遺物多量
3 黒褐色土 暗褐色土ブロック多量

SK 23



A 13.30m



- SK 23
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 遺物少量
2 灰黄褐色土 炭化物粒子・暗褐色土ブロック少量
3 灰黄褐色土 暗褐色土ブロック少量

SK 24



A 13.30m

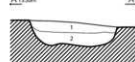


- SK 24
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘質
2 暗褐色土ブロック少量 粘質
3 にぶい黄褐色土 暗灰色粘土を主体にロームブロックを含む 粘質

SK 25



A 13.30m



- SK 25
1 黒褐色土 炭化物粒子・灰色粘土小ブロック少量 粘質
2 灰黄褐色土 暗褐色土主体にロームブロック含む 粘質

SK 26

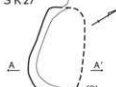


A 12.80m



- SK 26
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘質
2 暗褐色土 暗褐色土ブロック少量 粘質
3 にぶい黄褐色土 暗灰色粘土を主体にロームブロックを含む 粘質

SK 27



A 13.30m



SK 28



A 13.30m



- SK 28
1 黒褐色土 灰色粘土多量 遺物含む 粘質
2 暗褐色土 炭化物粒子・黄灰色粘土ブロック少量 粘質

SK 29



A 12.80m



- SK 29
1 黒褐色土 灰色粘土多量 遺物含む 粘質
2 暗褐色土 炭化物粒子・黄灰色粘土ブロック少量 粘質
3 にぶい黄褐色土 暗灰色粘土を主体にロームブロックを含む 粘質

0 2 m 1:60

第79図 土壌(1)

第29号土壙 (第79、84図)

O-10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.15m、短軸長0.79m、深さ0.20mである。長軸方位はN-86°-Eである。

第30号土壙 (第80図)

O-10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.14m、短軸長0.80m、深さ0.24mである。長軸方位はN-80°-Eである。

第31号土壙 (第80図)

P-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.25m、短軸長0.73m、深さ0.23mである。長軸方位はN-30°-Wである。

第32号土壙 (第80図)

P-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長0.85m、短軸長0.62m、深さ0.25mである。長軸方位はN-41°-Eである。

第33号土壙 (第80、84図)

P-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.57m、短軸長0.85m、深さ0.49mである。長軸方位はN-1°-Wである。第84図14は条痕文系土器の胴部の破片である。

第34号土壙 (第80図)

P-12グリッドに位置する。第36号土壙と重複し、土層から第36号土壙が新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長1.47m、短軸長0.70m、深さ0.20mである。長軸方位はN-18°-Wである。

第35号土壙 (第80、84図)

P-12グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長1.15m、短軸長0.51m、深さ0.17mである。長軸方位はN-23°-Wである。第84図15は出土した紐線文土器の口縁部の破片である。条線はなく、弧線文が施される。

第36号土壙 (第80図)

P-12グリッドに位置する。第34号土壙と重複し、土層から本遺構が新しい。平面形は隅丸長方形である。規模は長軸長1.95m、短軸長0.64m、

深さ0.27mである。長軸方位はN-68°-Wである。

第37号土壙 (第80図)

P-12グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.96m、深さ0.25mである。

第38号土壙 (第80、84図)

O-10グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.31m、短軸長0.93m、深さ0.45mである。長軸方位はN-82°-Wである。第84図16は出土した磨石である。上下端部は敲打で潰れている。平坦面に光沢が見られる。

第39号土壙 (第81、85図)

P-12グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.51m、短軸長0.97m、深さ0.27mである。長軸方位はN-45°-Wである。

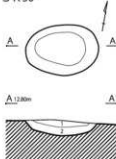
遺物は中層から上層にかけて土器や石器が比較的多量に検出された。短期間にまとめて廃棄されたものと考えられる。

第85図17~24は出土した土器である。17は深鉢形土器で、復元口径は34.8cmである。括れ部に刺突列が巡り、上下に対向する弧線文と渦巻状の沈線文が施される。18は台付鉢で、復元口径は30.4cmである。三叉状入組文で磨消縄文が施される。19は深鉢形土器の底部である。残存部分は無文であった。底径6.0cmである。20は括れのある平口縁深鉢形土器で、縄文帯の下に磨消文様を持つ。21は浅鉢形土器である。口唇部に突起を貼付し沈線が施される。その両脇と直下に刻みのある貼付文が付され、弧線による磨消縄文が施される。22、23は紐線文土器の内傾する口縁部破片である。23は、口縁部に弧線が見られる。

第40号土壙 (第80、85図)

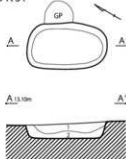
P-10、11グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.94m、深さ0.48mである。遺物は晩期安行式期の土器片が主体的に出土した。第85図24は深鉢である。口縁部に沈線で区画された縄文帯を持つ。横位の条線が施される。

S K 30



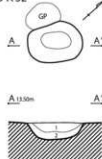
- S K 30
1 褐灰色土 灰色粘土多量 遺物含む 粘質
2 褐灰色土 炭化物粒子・黄灰色粘土ブロック少量 粘質

S K 31



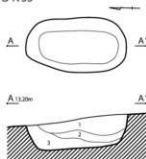
- S K 31
1 褐灰色土 灰色粘土多量 遺物含む 粘質
2 褐灰色土 炭化物粒子・黄灰色粘土ブロック少量 粘質

S K 32



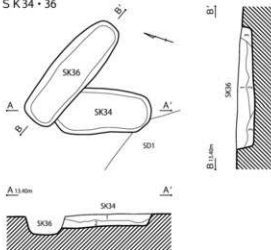
- S K 32
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘質
2 褐灰色土 暗褐色土ブロック少量 粘質

S K 33



- S K 33
1 黒褐色土 稀に灰色粘土粒子 粘性ややあり
2 灰黄褐色土 稀にロームブロック (径1 cm) 含む 粘性ややあり
3 にぶい黄褐色土 ソフト褐色土ブロック (径3~5 cm) 含む 粘性ややあり

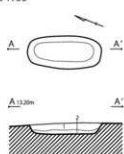
S K 34・36



- S K 34
1 黒褐色土 粘性ややあり
2 灰黄褐色土 粘性ややあり

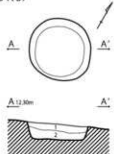
- S K 36
1 黒褐色土 粘性ややあり
2 灰黄褐色土 粘性ややあり
3 にぶい黄褐色土 ソフトロームブロック (径3~5 cm) 含む 粘性ややあり

S K 35



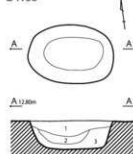
- S K 35
1 黒褐色土 鉄分よく入り込む 粘性ややあり
2 灰黄褐色土 ソフトロームブロック (径1~3 cm) 少量 粘性ややあり

S K 37



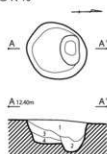
- S K 37
1 黒褐色土 粘性ややあり
2 灰黄褐色土 粘性ややあり

S K 38



- S K 38
1 黒褐色土 炭化物粒子少量 遺物少量含む 粘質
2 褐灰色土 暗褐色土ブロック多量 粘質
3 灰黄褐色土 暗褐色土主体 黄褐色土含む 粘質
4 灰黄褐色土 ロームブロック少量 粘質

S K 40



- S K 38
1 黒褐色土 粘性ややあり
2 灰黄褐色土 黒褐色土ブロック (径3~5 cm) 含む 粘性ややあり
3 にぶい黄褐色土 粘性ややあり



第80図 土壌(2)

第41号土壌 (第81図)

P-Q-11グリッドに位置する。第11号住居跡、第42、43、44号土壌と重複する。第42号土壌より古く、第11号住居跡、第43、44号土壌との新旧関係は不明である。平面形は楕円形と推定される。残存規模は長軸長2.53m、短軸長1.24m、深さ0.49mである。長軸方位はN-69°-Wである。中央には焼土が検出されたが用途は不明である。

第42号土壌 (第81、85図)

P-Q-11グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.65m、短軸長1.38m、深さ0.48mである。長軸方位はN-82°-Wである。

第85図25、26は羽状縄文系土器で、25は前期前半、26は前期初頭の花植下層式期の口縁部片で、器面に側面瓦痕文が施される。

第43号土壌 (第81、85図)

P-Q-11グリッドに位置する。第42号土壌に壊されている。平面形は不整楕円形である。残存規模は長軸長1.76m、短軸長1.40m、深さ0.44mである。長軸方位はN-31°-Wである。第85図27は出土した早期後半の条痕文系土器の口縁部の破片である。

第44号土壌 (第81図)

P-11グリッドに位置する。第41号土壌と重複しているが、新旧関係は不明である。重複により平面形は不明である。残存規模は長径1.21m、短径0.67m、深さ0.30mである。

第98号土壌 (第81図)

R-12グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.11m、短軸長0.77m、深さ0.22mである。長軸方位はN-40°-Wである。

第99号土壌 (第81図)

Q-12、13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.45m、短軸長0.80m、深さ0.18mである。長軸方位はN-63°-Wである。

第100号土壌 (第82図)

Q-13グリッドに位置する。中近世の第6号溝

跡に壊され、平面形は不明である。残存規模は長径0.96m、短径0.79m、深さ0.25mである。中期末や晩期前葉の安行式土器の破片がわずかに出土したが小片のため図示できなかった。

第101号土壌 (第82図)

R-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.35m、短軸長0.85m、深さ0.20mである。長軸方位はN-37°-Wである。

第102号土壌 (第82、85図)

R-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.27m、短軸長0.78m、深さ0.18mである。長軸方位はN-41°-Eである。第85図34は中期末の加曾利EⅢ式である。

第103号土壌 (第82図)

S-13グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.90m、深さ0.42mである。

第104号土壌 (第82図)

S-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.25m、短軸長0.92m、深さ0.45mである。長軸方位はN-2°-Wである。

第105号土壌 (第82図)

S-14グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は直径0.86m、深さ0.20mである。

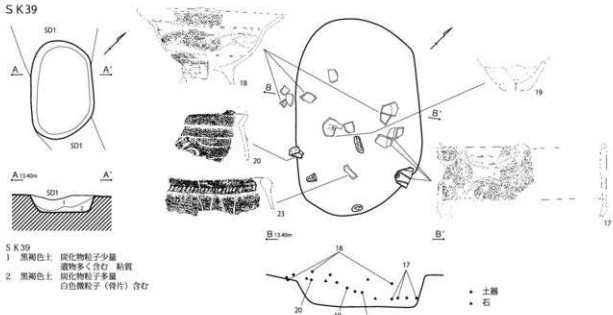
第106号土壌 (第82図)

S-14グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.41m、短軸長1.07m、深さ0.25mである。長軸方位はN-13°-Wである。

第107号土壌 (第82、85図)

R-13グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長軸長1.79m、短軸長1.26m、深さ0.41mである。長軸方位はN-73°-Eである。遺物は早期後半の条痕文系土器が主体的に出土した。第85図28～30は条痕文系土器の口縁部の破片である。28は波状口縁で波頂部の突起部から隆帯が垂下している。突起上面や口唇部に刻みが施されている。

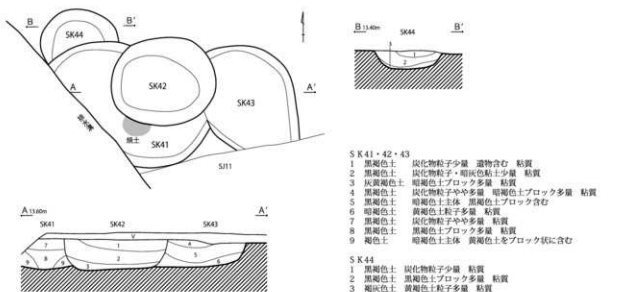
S K 39



S K 39

- 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 遺物多く含む 粘質
- 2 黒褐色土 炭化物粒子多量 白色微粒子（骨片）含む

S K 41・42・43・44



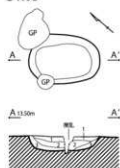
S K 41・42・43

- 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 遺物含む 粘質
- 2 黒褐色土 炭化物粒子・暗灰色粘土少量 粘質
- 3 灰黄褐色土 暗褐色土ブロック多量 粘質
- 4 黒褐色土 炭化物粒子やや多量 暗褐色土ブロック多量 粘質
- 5 黒褐色土 暗褐色土主体 黒褐色土ブロック含む
- 6 暗褐色土 黄褐色土粒子多量 粘質
- 7 黒褐色土 炭化物粒子やや多量 粘質
- 8 黒褐色土 黒褐色土ブロック多量 粘質
- 9 褐色土 暗褐色土主体 黄褐色土をブロック状に含む

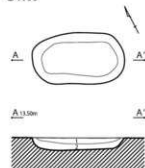
S K 44

- 1 黒褐色土 炭化物粒子少量 粘質
- 2 黒褐色土 黒褐色土ブロック多量 粘質
- 3 暗灰色土 黄褐色土粒子多量 粘質

S K 98



S K 99



S K 98

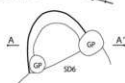
- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量 白色微粒子粘土少量
- 2 黒褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロック少量
- 3 灰黄褐色土 粘質土 暗灰色小ブロックとローム土の混土

S K 99

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量 白色微粒子粘土少量
- 2 黒褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロック少量

第81図 土壌(3)

S K 100



A 13.30m A'



S K 100

- 1 黒色土 炭化物粒子少量 白色微粒子少量 粘質土粘性がやや強
2 灰黄褐色土 粘質土 暗灰色小ブロックとローム土の混生

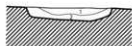
S K 101

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量 白色微粒子粘土少量
2 黒色土 粘質土 暗褐色土小ブロック少量

S K 101



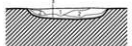
A 13.50m A'



S K 102



A 13.50m A'



S K 102

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量 白色微粒子粘土少量
2 黒褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロック少量
3 灰黄褐色土 粘質土 暗褐色小ブロック少量

S K 103



A 13.30m A'



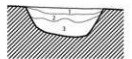
S K 103

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量 白色微粒子粘土少量
2 黒色土 炭化物微粒子少量 しまりにやや欠ける
3 黒褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロック少量
4 灰黄褐色土 粘質土 暗褐色小ブロックとローム土の混生

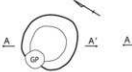
S K 104



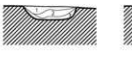
A 13.30m A'



S K 105



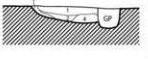
A 13.30m A'



S K 106



A 13.20m A'



S K 104

- 1 灰黄褐色土 粘質土 炭化物粒子微量
暗灰色粘土ブロック多量
2 暗褐色土 シルト質 ロームブロック少量
3 灰黄褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロック多量

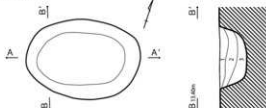
S K 105

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量
白色微粒子粘土少量
2 黒褐色土 粘質土 暗褐色土ブロック少量
3 灰黄褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロックと
ローム土の混生

S K 106

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量
白色微粒子粘土少量
2 にぶい黄褐色土 粘質土 1層より多く炭化物
ブロックを含む
3 暗褐色土 炭化物を含む 砂質少量
4 暗褐色土 粘質土

S K 107



A 13.40m A'



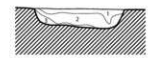
S K 107

- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量 白色微粒子粘土少量
2 黒褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロック少量
3 灰黄褐色土 粘質土 暗褐色小ブロックとローム土の混生

S K 108



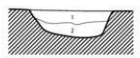
A 13.40m A'



S K 109



A 13.40m A'



S K 108

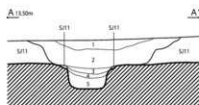
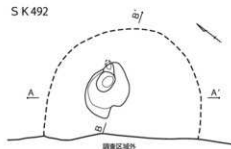
- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物粒子微量 白色微粒子粘土少量
2 黒褐色土 粘質土 暗褐色土小ブロック少量
3 灰黄褐色土 粘質土 暗褐色小ブロックとローム土の混生

S K 109

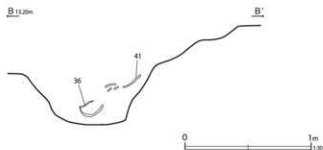
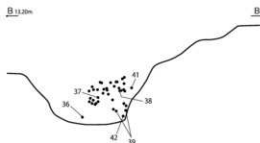
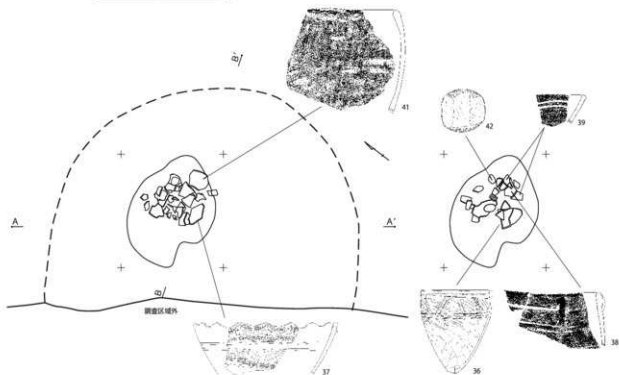
- 1 黒褐色土 粘質土 炭化物ブロック多量 しまり強い
2 灰黄褐色土 粘質土 炭化物ブロック少量 しまり強い

0 2m 100

S K 492



- S K 492
- | | | | | |
|---|------|--------------|----------|----------|
| 1 | 黒色土 | 炭化物粒子多量 | 遺物少量 | 粘質 |
| 2 | 黒色土 | 炭化物粒子多量 | 焼土粒子少量 | 破砕遺物 |
| 3 | 黒褐色土 | 炭化物粒子多量 | 焼土粒子やや多量 | チャート剥片多量 |
| 4 | 黒褐色土 | 炭化物粒子少量 | 焼土アロク多量 | 底面に遺物含む |
| 5 | 黒褐色土 | 炭化物粒子・焼土粒子少量 | チャートチップ | 土層含む |



第83図 第492号土曜遺物出土状況

第108号土壌 (第82, 85図)

R-13グリッドに位置する。北半分は調査区域外にある。平面形は隅丸方形である。残存規模は長軸長1.43m、短軸長1.13m、深さ0.30mである。長軸方位はN-43°-Wである。第85図35は胴部の破片である。前期前葉の隅山式土器である。

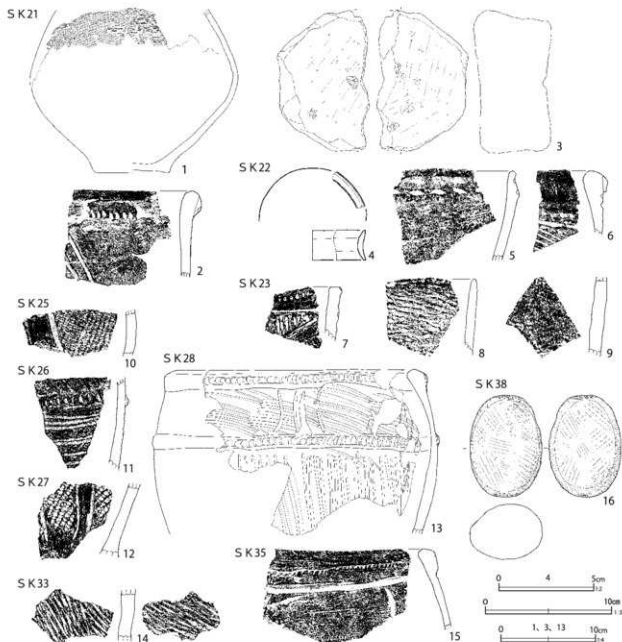
第109号土壌 (第82, 85図)

R-13グリッドに位置する。平面形は不明であ

る。残存規模は長径1.32m、短径1.03m、深さ0.42mである。条痕文系土器が主体的に出土した。第85図31~33は早期後葉の条痕文系土器である。31は口縁、他は胴部の破片である。32は二帯の文様構成を持つもので区画交点に刺突文が施される。鶴ガ島台式に相当すると考えられる。

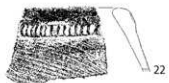
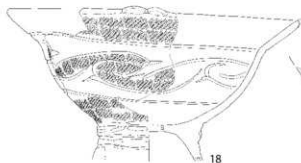
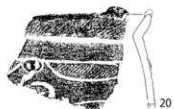
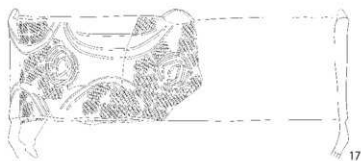
第492号土壌 (第83, 86図)

Q-11グリッドに位置する。第11号住居跡の調



第84図 土壌出土遺物(1)

S K 39



S K 40



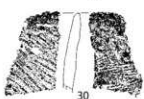
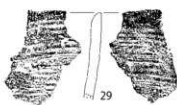
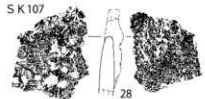
S K 42



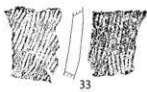
S K 43



S K 107



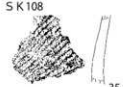
S K 109



S K 102



S K 108



第85図 土城出土遺物(2)

査中、土層断面の観察によって確認された。住居跡の埋没後に掘削し、灰跡を壊している。

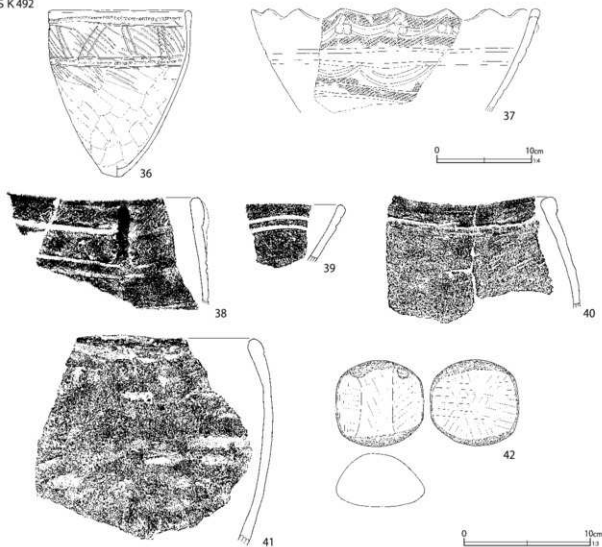
平面形は不明である。土層断面で確認された規模は長径2.43m、短径1.75mである。

遺物は中央の堀り込み部分から多量に出土した。

第86図36は深鉢形土器である。胴部上半に条線

が施される。口縁部と胴部に沈線と刺突が施される。37は台付鉢である。口縁は波状で、波頂部に豚鼻状貼付文を付される。38は口縁が内湾する平口縁深鉢形土器である。刻みのない縦長の貼付文が施される。39は浅鉢形土器である。40、41は粗製の深鉢形土器である。42は敲石である。

S K 492



第86図 土庫出土遺物(3)

第20表 土庫出土遺物観察表 (第84、86図)

番号	器種	最大径	最小径	高さ	残存	文様	形状	備考・出土位置	図版
4	耳飾り	(5.6)	(5.3)	1.6	15	無文	環状	SK22	46-4
3	石皿	長さ14.9cm	幅9.8cm	厚さ8.4cm	重さ1941.4g			角閃石安山岩 SK21	
16	磨石	長さ8.2cm	幅5.7cm	厚さ4.4cm	重さ295.2g			礫岩 SK38	
42	敲石	長さ6.8cm	幅7.0cm	厚さ4.2cm	重さ306.7g			安山岩 №41 SK492	

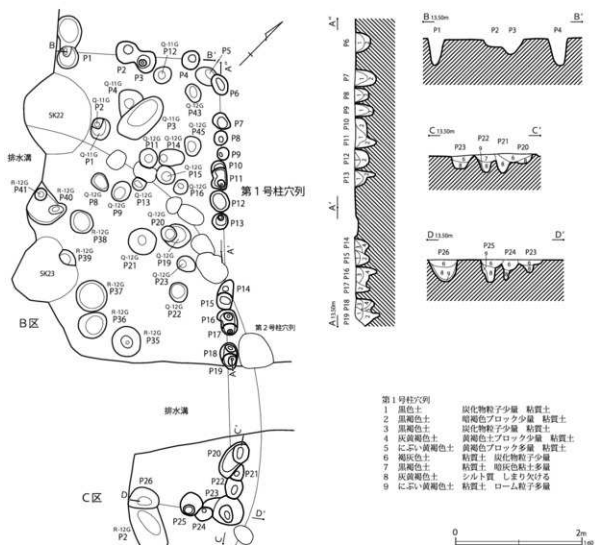
(4) 柱穴

Q-11、12、R-12、グリッドに位置する。L字状と弧状に並ぶ柱穴が2列検出されたが、炉跡を伴わないことから住居跡としなかった。新日については明らかにできなかった。

第1号柱穴列 (第87図)

Q-11、12、R-12グリッドに位置する。柱穴は方形に並んでいる。北列が4本、東列が18本、南列が4本、合計26本であった。

遺物は縄文時代晩期の土器が少量出土した。



第87図 第1号柱穴列

第21表 第1号柱穴列柱穴一覧表 (第87図)

番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P1	83	22	37
P2	36	(34)	36
P3	36	(32)	42
P4	30	28	41
P5	(30)	28	24
P6	35	25	22
P7	31	21	25
P8	24	21	22
P9	20	19	25

番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P10	(10)	22	20
P11	36	20	31
P12	25	29	18
P13	26	25	33
P14	(22)	22	22
P15	26	15	19
P16	(23)	26	35
P17	26	20	27
P18	(18)	26	31

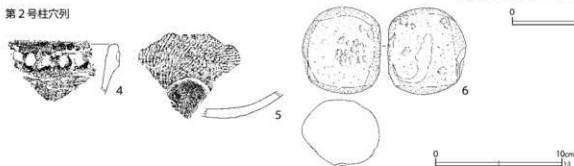
番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P19	25	23	36
P20	62	32	18
P21	22	(16)	30
P22	(29)	27	27
P23	(66)	32	22
P24	25	(20)	27
P25	37	31	37
P26	47	32	35

— 104 —

第1号柱穴列



第2号柱穴列



第89図 第1、2号柱穴列出土遺物

第23表 第1、2号柱穴列出土遺物観察表 (第89図)

番号	器種	最大径	最小径	高さ	残存	文様	形状	備考・出土位置	図版
3	耳飾り	(7.0)	(6.8)	2.2	40	沈線	環状	V層 第1号柱穴列 Q12G R12G	47・7
6	磨石	長さ6.8cm	幅6.1cm	厚さ5.2cm	重さ171.5g			安山岩 第2号柱穴列	48・35

(5) ビット (第90～92図、第24、25表)

ビットは第二面上層で196基を検出した。

ビットは縄文時代晩期の住居跡が検出されたB区南東部からC区北西部にかけて分布が集中している。その多くが、晩期の住居跡に関連する柱穴の可能性が高いが、配列や帰属する時期が明確にできなかったため、ビットとして一括して報告することとした。

計測値についてはビット一覧表 (第24、25表) に記載した。ビットはグリッド単位で1から番号を付している。

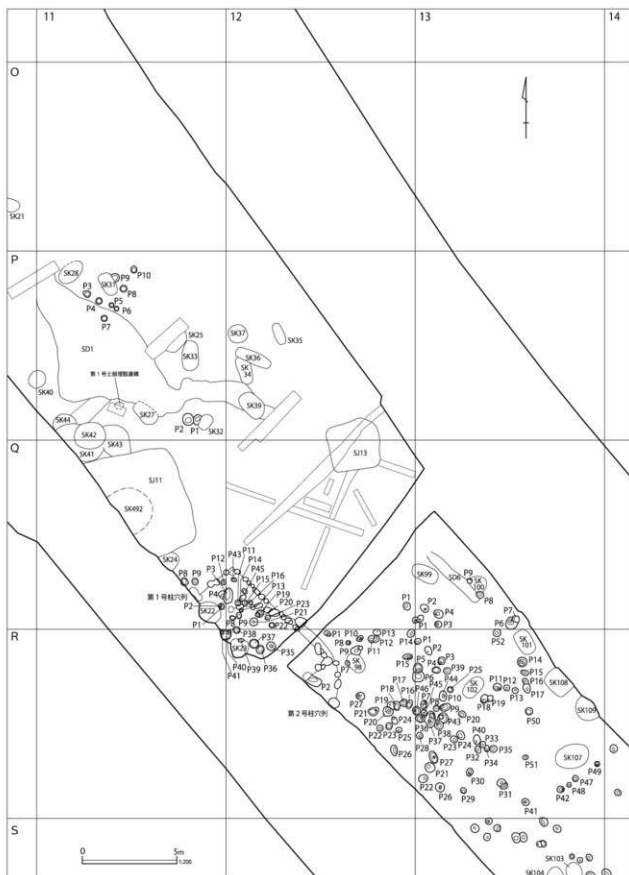
平面形は円形もしくは楕円形を呈する。

ビット内から出土した遺物はごく少量で、流れ込みによるものが多いと考えられる。第92図に出土した遺物を図示したが、各ビットに明瞭に帰属すると判断できたものはなかった。

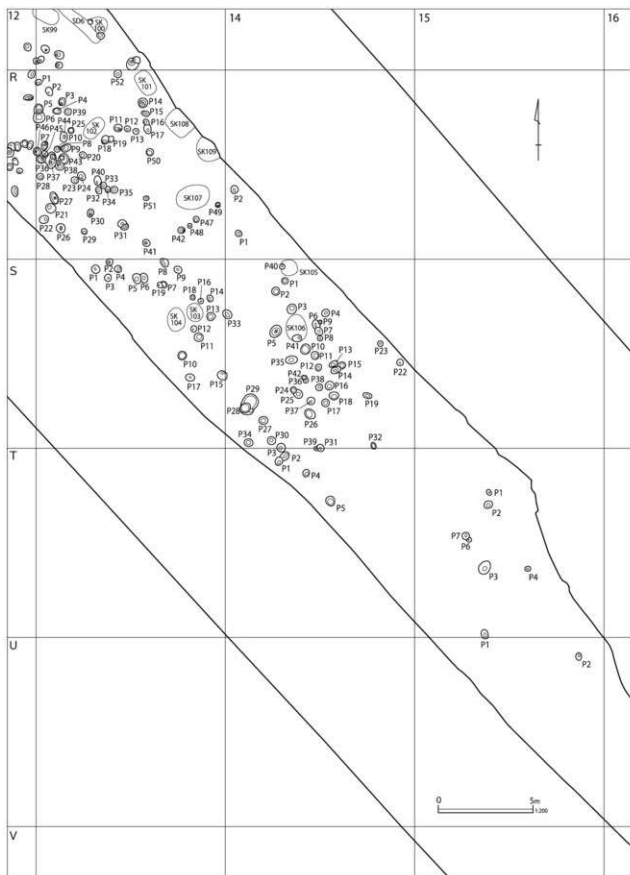
第92図1～9は、各ビットから出土した土器で

ある。いずれも破片である。出土ビットは挿図に示した。

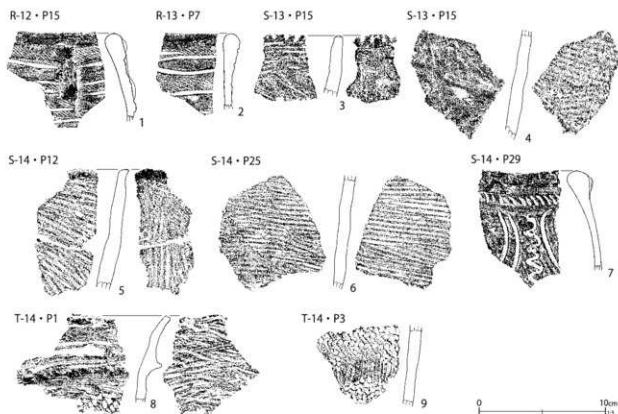
第92図1は、安行3 a 式の平口縁深鉢形土器である。口縁が内湾する器形である。帯縄文が三本巡る。刻みのない縦長の貼付文が施される。2は出土した安行3 a 式の括れのある深鉢形土器である。口縁部に縄文帯を持つ。沈線で区切られた縄文帯の下に磨消部を持つ。3～6は早期後半の条痕文系土器の破片で、鶴ヶ島台式期と推定される。3、5は口縁部の破片で4、6は胴部の破片である。いずれも文様帯を持つものではなく、内外面に条痕が認められるのみである。7は晩期前葉の紐線文土器である。胴部には対向する弧線文間に蛇行沈線文が施される。8は前期初葉の花積下層式土器の口縁部である。口縁部にはたが状の突起を持っており、口縁部文様帯には側面圧痕文が施される。9は前期前葉の関山Ⅱ式の胴部破片である。



第90図 第二面上層ビット分布図(1)



第91図 第二面上層ビット分布図(2)



第92図 ビット出土遺物

第24表 ビット一覧表(1) (第90.91図)

グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
P-11	P1	66	(37)	26	Q-12	P13	20	20	28	R-12	P7	27	23	35
	P2	64	58	32		P14	40	24	47		P8	27	23	22
	P3	40	35	21		P15	30	27	14		P9	67	47	27
	P4	35	35	17		P16	25	22	19		P10	40	28	29
	P5	26	26	23		P19	37	(21)	15		P11	40	(30)	20
	P6	26	26	21		P20	25	25	28		P12	(35)	32	23
	P7	32	32	21		P21	42	42	23		P13	40	31	22
	P8	38	35	25		P22	30	28	9		P14	45	36	34
	P9	47	(38)	11		P23	30	24	35		P15	52	30	30
	P10	37	32	20		P43	30	23	21		P16	46	30	32
Q-11	P1	32	(17)	13	Q-13	P45	30	25	20		P17	42	40	38
	P2	(15)	(22)	31		P1	63	32	36		P18	48	33	32
	P3	84	(45)	40		P2	47	37	43		P19	46	35	36
	P4	42	(32)	40		P3	37	35	25		P20	55	53	45
	P8	43	38	20		P4	52	43	49		P21	55	42	26
	P9	36	34	27		P6	63	63	39		P22	33	33	43
Q-12	P12	30	26	51		P7	42	38	36		P23	37	34	33
	P1	45	38	23		P8	40	35	38		P24	41	27	32
	P8	31	24	15		P9	26	26	26		P25	32	27	29
	P9	32	28	15	R-12	P1	38	26	25		P26	55	35	34
	P11	30	27	47		P2	(70)	(47)	32		P27	46	40	40

第25表 ビット一覧表(2) (第90,91図)

グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	グリッド	番号	長さ(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
R-12	P35	48	45	20	R-13	P39	40	38	28	S-14	P10	55	50	22
	P36	43	42	14		P40	51	37	17		P11	43	41	30
	P37	50	48	16		P41	40	35	24		P12	40	32	34
	P38	40	35	15		P42	39	35	32		P13	51	28	19
	P39	(33)	(20)	9		P43	55	55	32		P14	55	34	38
	P40	(62)	(53)	20		P44	50	(45)	42		P15	40	37	17
	P41	18	16	11		P45	30	30	24		P16	49	43	35
R-13	P1	35	30	24		P46	45	40	30		P17	40	40	25
	P2	47	34	49		P47	34	31	34		P18	50	43	21
	P3	44	36	30		P48	24	24	30		P19	46	28	25
	P4	44	35	22		P49	28	28	38		P22	35	35	32
	P5	50	48	22		P50	40	40	27		P23	30	30	20
	P6	63	(50)	29		P51	30	25	20		P24	36	32	37
	P7	47	33	32		P52	42	40	21		P25	(43)	43	24
	P8	35	30	32	R-14	P1	37	32	26		P26	61	50	45
	P9	56	40	59		P2	44	40	30		P27	50	46	23
	P10	55	40	44	S-13	P1	45	42	31		P28	51	50	31
	P11	44	38	47		P2	35	35	32		P29	116	80	18
	P12	32	31	32		P3	38	35	38		P30	43	43	16
	P13	32	32	24		P4	38	37	23		P31	40	35	26
	P14	50	50	34		P5	53	(42)	20		P32	36	26	37
	P15	43	28	26		P6	52	(45)	22		P33	54	42	20
	P16	(33)	28	30		P7	35	(15)	21		P34	47	47	23
	P17	(47)	39	32	S-14	P8	50	38	31		P35	63	41	49
	P18	48	36	39		P9	45	37	23		P36	28	21	32
	P19	40	32	26		P10	45	45	21		P37	41	40	28
	P20	41	34	30		P11	49	47	24		P38	38	36	27
	P21	55	52	29		P12	34	31	28		P39	24	(20)	27
	P22	50	40	41		P13	46	43	30		P40	31	30	27
	P23	38	35	19		P14	38	30	31		P41	46	36	50
	P24	46	39	26		P15	52	47	53	T-14	P42	30	(20)	29
	P25	32	31	25		P16	30	28	23		P1	46	37	37
	P26	48	46	52		P17	50	36	45		P2	(50)	39	32
	P27	67	41	28		P18	28	25	33		P3	47	45	25
	P28	35	34	25		P19	33	(26)	27		P4	40	35	29
	P29	32	30	27		P1	35	35	23	T-15	P5	53	48	33
	P30	44	33	22		P2	45	42	16		P1	33	25	16
	P31	60	43	30		P3	55	48	47		P2	47	40	24
	P32	40	31	20		P4	44	37	17		P3	78	56	25
	P33	35	31	22		P5	70	55	21		P4	31	25	15
	P34	36	25	28		P6	(42)	42	23	U-15	P6	25	(20)	16
	P35	40	37	22		P7	45	36	16		P7	40	40	22
	P36	49	34	29		P8	27	27	23		P1	50	35	15
	P37	(55)	(45)	43		P9	20	20	10		P2	42	32	17
	P38	55	45	56										

3. グリッド出土遺物

ここでは、縄文時代の遺構内で出土した遺構外出土遺物を土器、土製品、石器の順で報告する。

(1) 土器 (第93～123図)

B区南半からC区にかけての縄文時代の遺構内では早期前葉から晩期中葉に至るまで、多様な時期の土器が出土している。その一部は遺構の記載とともに紹介したが、以下では、これらをいわゆる「土器群/様式」を目安に9つの群に分け、記載を進める。

第Ⅰ群 捺糸文系

第Ⅱ群 沈線文系

第Ⅲ群 条痕文系

第Ⅳ群 羽状縄文系

第Ⅴ群 竹管文系・前期末

第Ⅵ群 阿玉台系

第Ⅶ群 加曽利E系

第Ⅷ群 称名寺・堀之内系

第Ⅸ群 安行系

第Ⅰ群土器 (第93図1～第94図88)

早期前葉の捺糸文系土器をこの群とするが、さらに二つの類に分けられる。

第1類 (1～83)

捺糸文系中葉にあたるもので、縄文を失い口唇部の肥厚・外反が弱まる段階である。大部分はC区の南半分で出土しており、南端で急激に落ちる台地の縁辺が主たる活動域と推定できる。

1～50に口縁部片を示したが、断面形は、厚さや外反の有無、さらには口唇部の膨らみ加減等、細かな形態は様でない。しかし、いずれもやや外側に重心が偏る円頭状の口唇部断面であることが共通しており、口縁直下に捺糸文系後葉のような凹線や沈線はない。

施文は捺糸文が主体であり、肉眼で観察した範囲では、捺糸は総てRが施文されている。1～9、51～64等の細くて深い圧痕、16、23、75のよう

なための原体で浅く施文されたもの等が混在し、その中間層も多いため、すべてを細かに分別することはできない。

また、24～27等、わずかに残るくぼみが施文の経歴を憶測させるものもあり、無文と分類した28～50も同類であることを否定できない。図を見渡すと胴部の施文率が高く見えるが、これは掲載遺物の優先度起因するもので、胴部片にも多くの同類が含まれている。

器壁の薄さ46～50は、内径から察するとミニチュア品ではなく、少なくとも径10cm以上はあるだろう。特に50は押型文系土器の口縁部を想起させるが、他の破片と同様な砂質感の強い胎土の特徴を有している。

口唇部の形態と捺糸文施文の特徴からすると、これらは稲荷台式から稲荷原式の範囲内に含まれると考えられる。

第2類 (84～88)

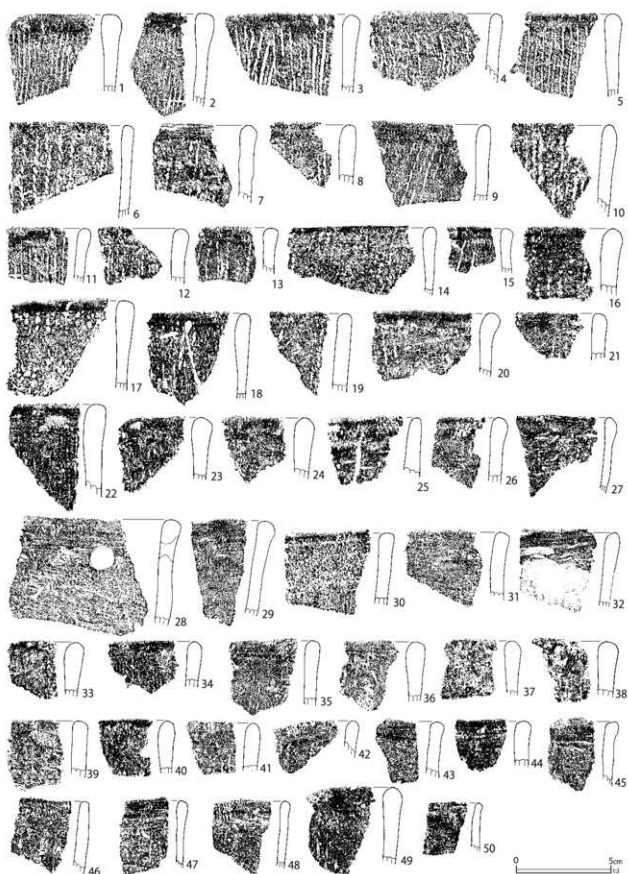
捺糸文系土器の終末にあたり、年代的には初期の沈線文系と交錯するとも考えられる無文土器である。石英粒を大量に含む胎土が特徴的で、図示した5点は粒子の混合比や色調から複数の個体があると推定できる。

口唇部を外に削ぎ、粒子を荒々しく引きずる外面のケズリが特徴的で、粒子の移動によって生じたザラつきはそのままにされている。内面は、飛び出した石英粒を粘土の内部にナデ込んでおり、外面のザラつきが意図的に作り出されたことがわかる。器形は細い砲弾形になるだろうが、底部の先端は平らに整えられている。

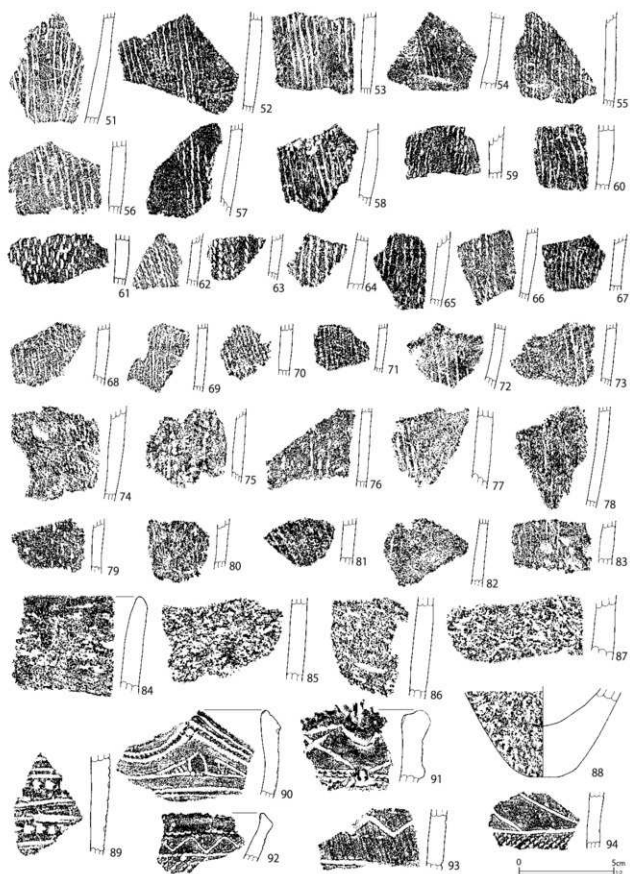
第Ⅱ群土器 (第94図89～94)

早期中葉の沈線文系土器をあてた。出土分布域は捺糸文系と共通するが、出土量は格段に少なく、図示できたのは6点のみである。

89は平行線間に刺突文を巡らす田戸下層式土器で、施文はすべて竹管によっている。これに対し、



第93図 グリッド出土遺物(1)



第94図 グリッド出土遺物(2)

90～94の同上層式では、90、91の細隆帯上だけが竹管施文されるものの、その他の文様区画線は単沈線で描かれている。

90、91は波頂部下にU字区画を配することで、波状口縁が作り出す三角区画を小分けする効果をj得ている。口唇部は緩やかな外削ぎで波頂には突起を追加する。また、91、92、94の下位には貝殻腹縁文が充填される。

第Ⅲ群土器（第95図95～第100図249）

早期後葉の条痕文系土器で、第IX群後期後葉から晩期にかけての土器群に次ぐ出土量があった。この時期にはめずらしい土城がC区中央で多く見つかっており、その周辺に出土が集中するのは当然であるが、他の土器群に比べて分布は広く、後日報告するA区等でも、遺構こそ伴わないものの、相当量が出土している。

第1類（95～120）

有文土器の中で、2段の屈曲部を目安として文様帯を設定し、微隆起や沈線・押圧文で文様を構成する典型的な鶴ガ島台式を一括した。このうち95～112が微隆起線によって文様帯内の基本線を描画するもので、各線の結節点を中心に円形押圧文が加えられる。

これらの具体的な構図ははっきりしないが、並行する複数線で縦横斜の区画帯を描き出し、単沈線や結節単沈線で余白を埋める。しかし、縦位線が三線以上並列する箇所には充填文はない。波状口縁と連動した単位区画となるのだろう。器壁は概して重厚である。

これに対し、113～120は同じ構成ながらも微隆起を附けしないもので、結節点の円形押圧が線脇の余白にまで進出している。

第2類（121～127）

沈線等の描画等が認められるものの、前類には当てはまらないものを一括した。このうち121は口縁上端に絡条体圧痕文が巡る。小波状口縁に沿って沈線を巡らす122とともに薄手で繊維の含有

率も少なく、口縁直下にわずかな文様が施されることから、子母口式と考えられる。

また、123は破片右端に縦位の隆帯が認められ、横位方向の基本区画を目安に縦斜位の平行沈線文を段状に施文する。周辺では類似例はないものの、器面上半に大きく文様が展開することから、同じ横位線文区画を描画する126とともに、西関東以西の影響下に製作された条痕文系前葉の土器であると考えられる。

124、125は、123までの条痕文系に比して質感や文様に違和感があるが、とくに125の有段あるいは隆帯は鶴ガ島台式に通じることから、同式内の偏差ととらえることができる。また、127は器形に段を有し、荒いRLを横位に施文する。繊維痕を多く残す器面の特徴から茅山下層以降に相当するだろう。

第3類（128～156）

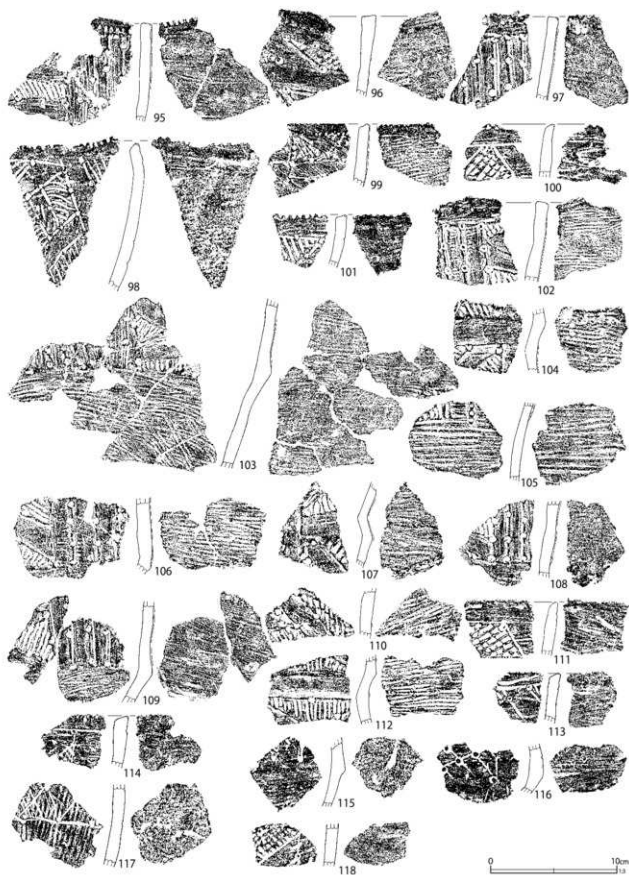
隆帯もしくは段部を設けて器形に変化をつけたものである。このうち128～145の隆帯や段上には刺突文が加えられている。また、128、133では波状口縁の頂部を起点として胴部上半の横位隆帯まで縦位の区画文が垂下している。

刺突は半截竹管や丸棒状工具を使い、その手法も様々であるが、円形押圧は存在しない。その中で、131、132は竹管を少し引きずる単沈線を連続して施文しており、刺突帯を形成している。

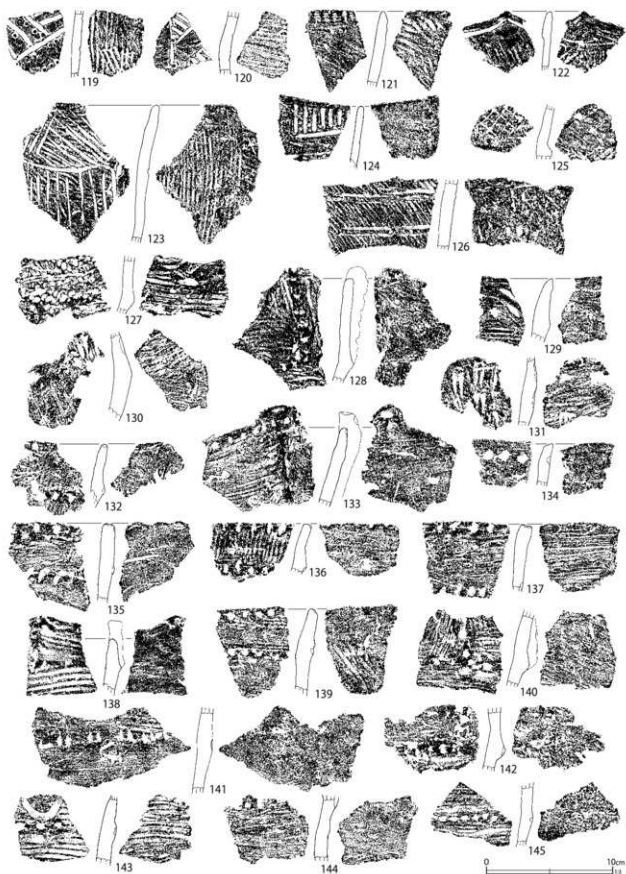
146～156に示した隆帯のみが加わる破片を含め、前述した第1類鶴ガ島台式と比べると胎土に砂質感がなく、成形時に含めた繊維の空洞が目立つ。横位の段や隆帯は半段で終始すると考えられる点も鶴ガ島台式とは異なっている。沈線文様に乏しく断定はできないが、大方が茅山上層式前後に相当するだろう。

第4類（157～172）

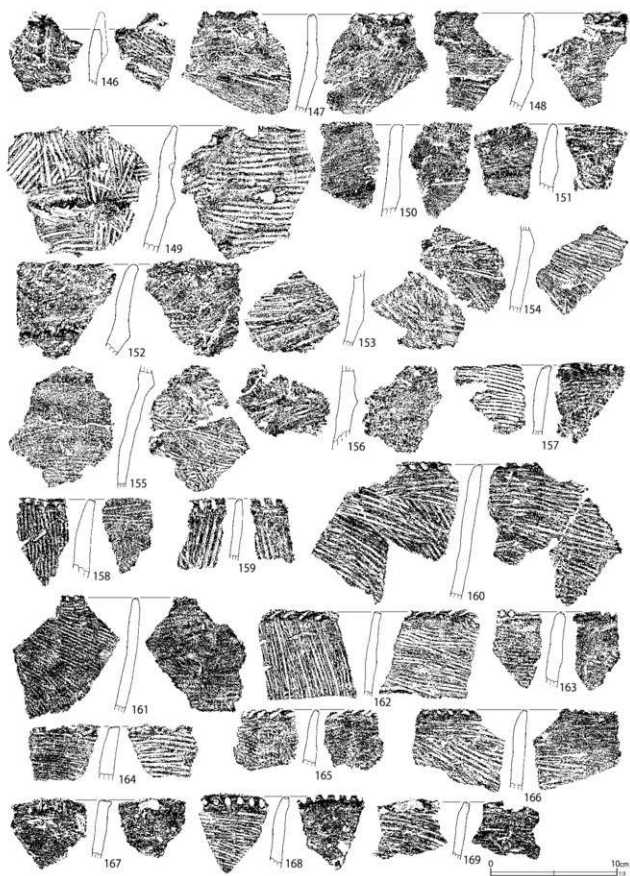
条痕のみの破片のうち、口唇上に押圧や刺突が加えられているものである。これらも前種と同様、点列の加え方は様々であるが、概してしっかりと



第95図 グリッド出土遺物(3)



第96図 グリッド出土遺物(4)



第97図 グリッド出土遺物(5)

丁寧に、そして等間隔に施文されており、第3類とした隆帯付きの破片類と比べると砂質感が強く条痕も深く施文方向に乱調が少ない。このようなことから、大半は鶴ガ島台式有文土器に伴うものと考えられる。

第5類 (173～249)

173～249は条痕のみの破片である。条痕文のみの破片を一括して扱う。中間相も多いものの、ここでも前述した砂質感の多寡についての胎土差が認められる。第1から3類にあてた有文土器の時期差が反映されたものだろう。

ただ、ほとんどに条痕が施される中、244、245、249は表裏ともに擦痕が印されるのみである。これらは第IV群で紹介する初期の羽状縄文系に伴う条痕文系最末の下吉井式であるかも知れない。その249は、やや丸底気味の底部直上片であるが、他に掲載可能な底部片は出土しておらず、これが下吉井式となると、鶴ガ島台式に特徴的な小平底を含め、当遺跡での主体を占める条痕文系中葉の底部はほとんど無いことになる。

口縁部片や胴部片との比率で見ると底部が格段に少ない傾向は、長竹遺跡ほど顕著でないものの、条痕文系土器を出土する他の遺跡でも見られるものである。しかし、その理由については、当遺跡でも追究できなかった。

第IV群土器 (第101図250～278)

この群は前期中半羽状縄文系土器としたが、早期末から前期初頭と曖昧に位置づけられることが多い羽状縄文系土器初頭の一群を含む。第III群の条痕文系には出土量で劣るが、似たような分布を示している。

第1類 (250～254)

羽状縄文系初頭にあたり、花積下層式として扱われることが多い群である。250、251は肥厚させた幅狭の口縁部や胴部上位の段器形を目安に燃糸側面王痕が押圧されている。胴部は0段多条R Lの施文位を転移させることにより鋭角の羽状縄

文を作り出している。

第2類 (255～278)

多くが前期前葉の関山式に相当するもので、255～258は有口縁部文様帯土器である。竹管幾何文様に刻みと点状貼付文を加える構成は共通しているが、文様帯下位区画線に有無の二種があることから別個体であるのは確実である。259は片口注口土器の両脇突起の一部で、こちらは櫛状工具でコンパス文等が施文されている。

260～277は縄文主体の破片である。260～262は無節斜縄文が施文されるが、262の施文原体は1段2条で撚り込まれており、附加条的な圧痕となっている。263～266は環状末端を多段化させており、267～273は末端に変化がない単節斜縄文である。大半の原体は0段多条だが、267、271等は2条である。

274、275は附加条縄文が施文されるが、274の原体はRにrをS方向附加しており、275はL RにR 2本をS方向附加した原体と、その逆逆りを用いて羽状を作出している。

一方、276は原体不明、277はR R L Lの組紐縄文が施文され、278はハイガイの肋脈下半を押しつけた貝殻背圧痕文が印されている。

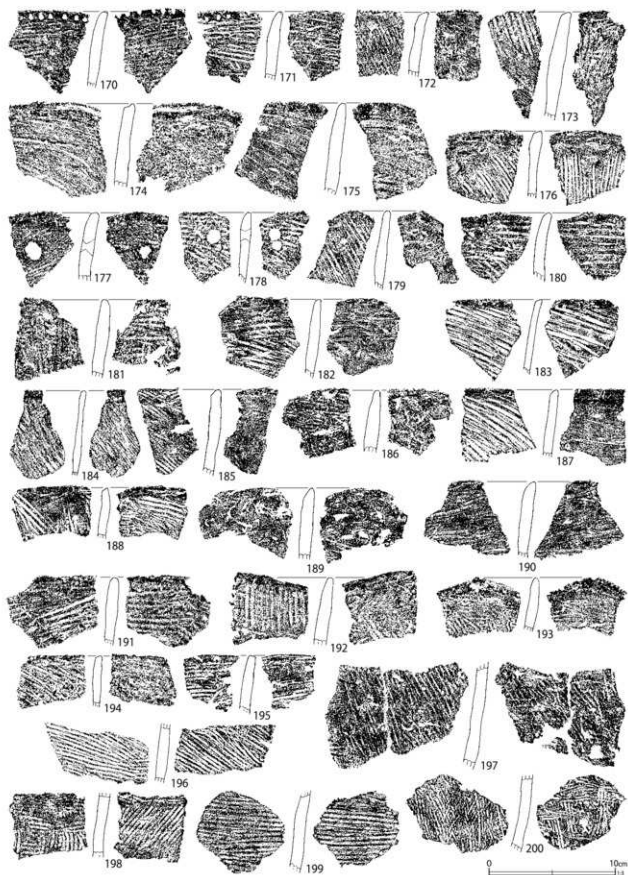
有口縁部文様帯土器と多段ループ文、片口注口土器の様相は関山Ⅰ、Ⅱ式移行期のものであるものの、附加条縄文や無節縄文は整然とした横帯区画が意識されていない。あるいは一部が黒浜式となるかも知れない。

第V群土器 (第101図279～295)

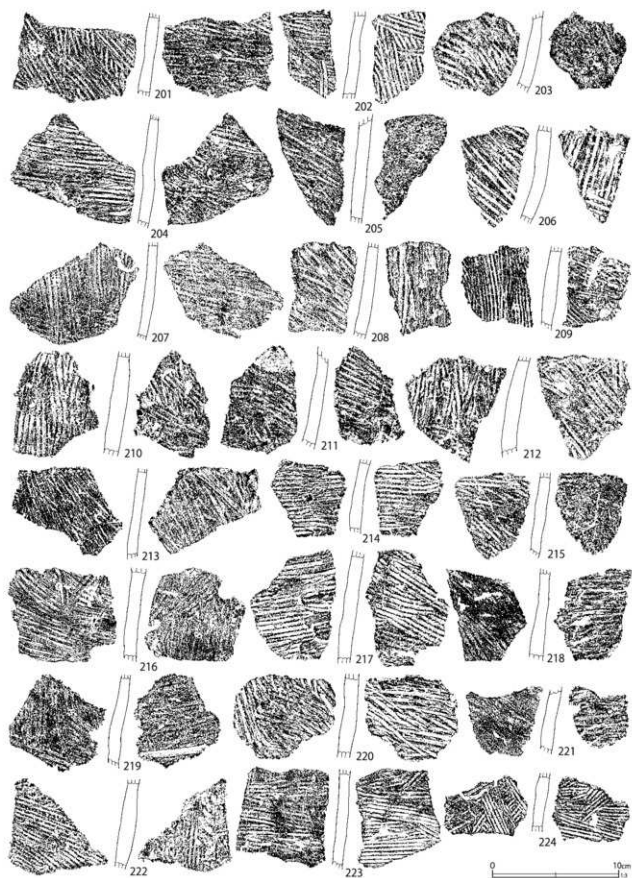
前期後半の竹管文系と、前期末の土器群をこの群とした。全体でも少量の出土しかなく、細かな時期ごとの分布を云々することはできない。

第1類 (279～289)

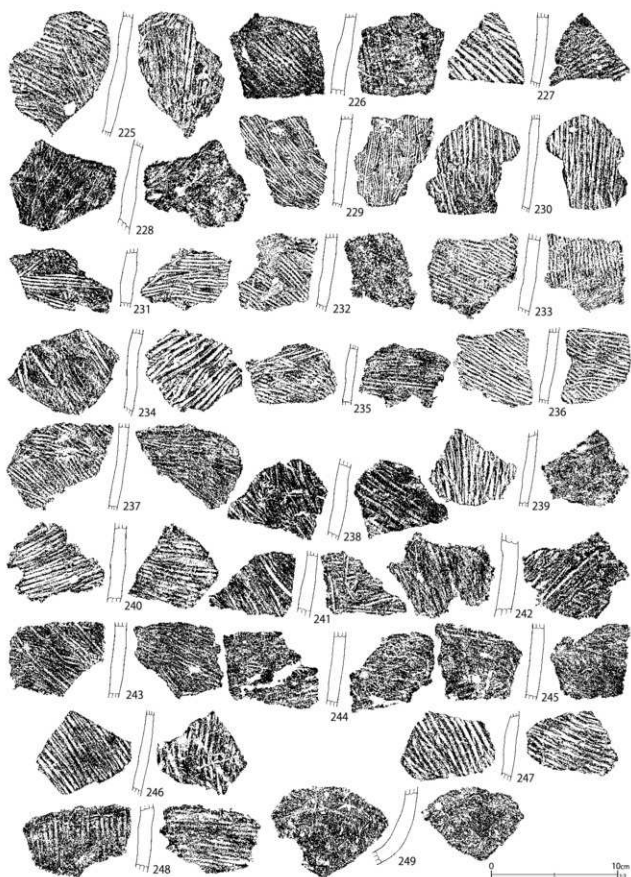
竹管文系または諸磯系とされる土器群を扱った。279、280は諸磯a式で、前者は大波状口縁を擁する深鉢の上半に爪形文を展開させる。口縁下は隆帯で縁取りされている。また、後者は縄文地に半



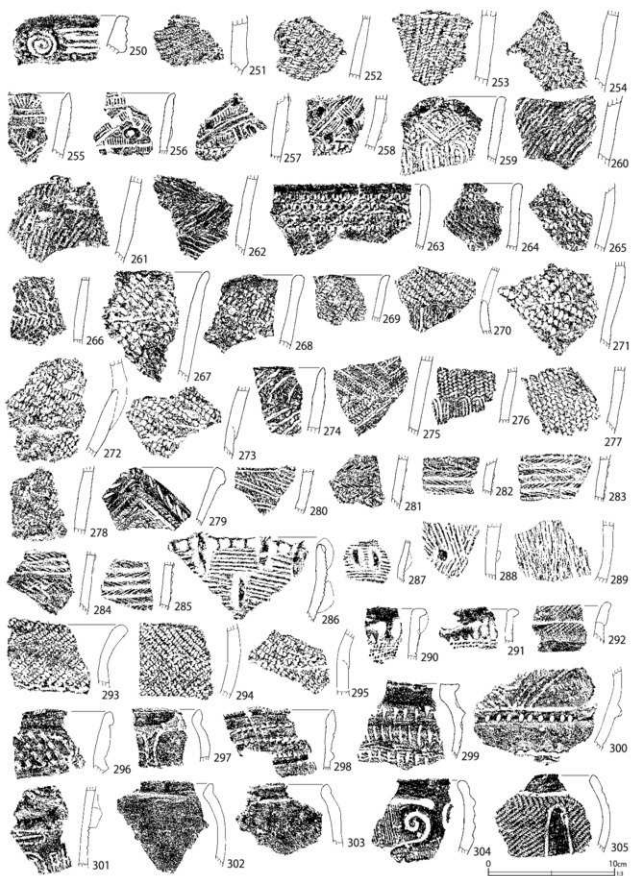
第98図 グリッド出土遺物(6)



第99図 グリッド出土遺物(7)



第100図 グリッド出土遺物(8)



第101図 グリッド出土遺物(9)

截竹管で木の葉文類似の文様を描く。

281~285は諸磯b式に相当する浮線文土器である。いずれの浮線も扁平で、浮線上の刻みは單方向と羽状の二者がある。地文は縄文である。

また、286~289は諸磯c式の平行沈線文土器である。286、287は口縁部もしくはその付近の破片で、横位の平行線を地文に縦長の貼付文を脈絡無く加える。286の口唇部には点状の抉り出しも連続している。

第2類 (290~295)

前期末の土器群で、さらに西関東系の有文土器と東関東系の縄文施文土器に分けられる。

290、291は口縁下に三角陰刻文を作り出す十三菩提土器で、印刻の位置や肥厚した口唇部から垂下する縦長貼付文の形態的特徴から、同じ個体と判断できる。陰刻文の下は竹管による刻み付き平行沈線が巡る。

292~295は前期末葉の縄文施文土器で、292は輪積痕を意図的に強調する。293は口唇上にも縄文が押捺され、下位には他縛結節の回転痕も印されている。縄文の施文方向は横位、294、295の羽状縄文は原体を替えて作出されている。

第Ⅵ群土器 (第101図296~303)

今回の調査では中期前半の土器もわずかに出土しているが、すべて阿玉台系の土器であった。いずれもC区からの出土である。

296~301は有文土器で、楕円区画 (296、297)、横位線列 (298、299)、三角連続文 (300)、垂下隆帯 (301) 等の文様が描かれている。302、303は口唇端部が直立する無文浅鉢で、有文土器ともども雲母を多く含む。

第Ⅶ群土器 (第101図304~第102図325)

中期後半の土器群をあてた。304は曾利系で、他はすべて加曾利E系土器であった。加曾利E系の前半は出土しておらず、すべて後半に帰属するものである。分布は第17号住居跡を発見したC区の北半を中心にB区にも及ぶが、台地の縁辺となる

C区の南半は激減する。

304は地文が条線となる曾利系のキャリバー形の深鉢形土器の口縁部の破片である。

305~312は連続波状文の個体で、口縁下に一線を設け、以下に波状区画文を連続させる。胴上下の並が揃うか入り組むかは310でしか観察できないが、同番では対面し、先端は曲線的に閉じている。308は口縁下区画線がなく、306ではこれを刺突帯で行っている。

312、313は小波状下の渦巻きを中心として余白に充填縄文帯をあてる類である。口縁部は極端に内湾し、胴部上半が大きく膨らむ。314、315は扁平な隆帯が基幹線となり、渦巻きや連結区画を成する類である。胴部片のみで全形は判定したいが、前類と似た器形となるはずである。

316~323は縄文のみの個体である。316~321は口縁下を微隆起線や突帯で区画し、無文帯を確保している。また、323はこれを刺突帯で行っている。316、319は他とは異なる浅い縦位施文が特徴的であり、この施文帯から同一個体であることがわかる。317、320は微隆起下を横位施文することで施文の効率を上げている。321は口縁下を区画せず、縄文の条方向を縦で統一するよう斜位施文している。勝坂式の手法でもあるが、本群に含めて報告した。

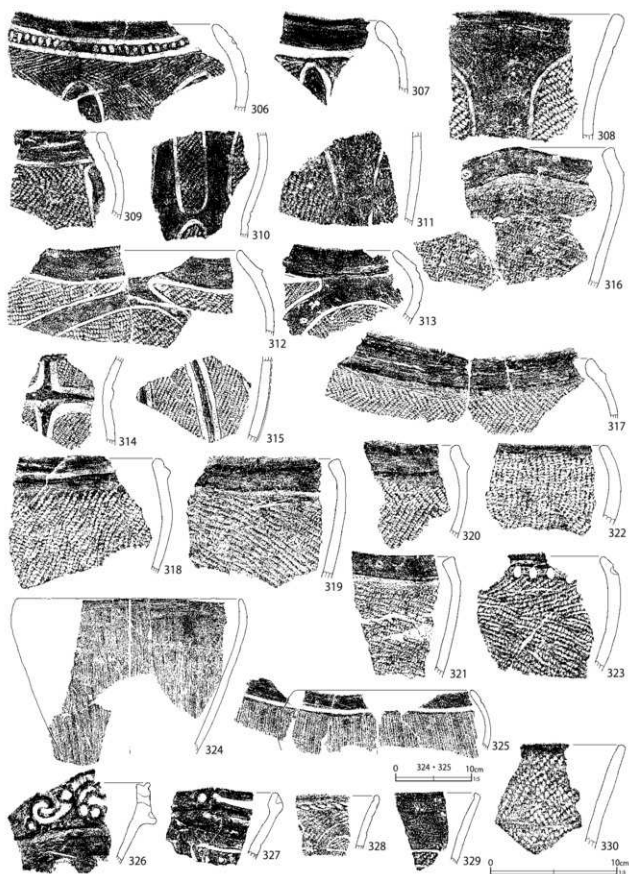
324、325は縦位方向の条線文で全面を埋める深鉢と鉢である。口縁近くは内湾し、325ではしっかりと、沈線が巡っている。

これらは第17号住居跡と同じく、加曾利EIV式と認められるだろう。

第Ⅷ群土器 (第102図326~330)

後期前葉にあたる称名寺、堀之内系を一括した。わずかな出土であり、分布の傾向は判断できない。ちなみに、後日報告するA区やD区の縄文面では堀之内期の集落が発見されている。

326、327は称名寺系の深鉢片で、326は口縁下に線文を巡らす他を無文とし、括れ下の胴部に文様



第102図 グリッド出土遺物(10)

帯を設ける菱形の土器である。これに対し、327は全面展開の区画文中に列点を充填する。

328～330はいずれも堀之内Ⅱ式で、口唇部を内屈させるか内面に沈線が引かれる。328、329は精製系の小型深鉢で、朝顔形に開口する器形の上半に縄文帯で区画文が描かれる。330は単純開口全面縄文の粗製系深鉢である。

第Ⅸ群（第105～123図）

後期後葉～晩期前葉安行式をこの群とする。12の類に分けられる。基本土層Ⅴ層、B区南半からC区北半にかけて出土した。

第1類 安行1式（第105図359～383）

第105図359～379は平口縁の深鉢形土器である。

360～362、378、379は口縁部が外傾する。360、361の口縁部には縦長の貼付文を付す。

359、363～373は口縁部が内湾する。363、364、366、368、369、371は縦長の貼付文が付される。365、367、370、372は円形の貼付文が付される。

380～383は瓢形土器である。382は胴部に弧線による充填縄文が施される。

第2類 安行1～2式（第105図384～394）

384～388は口縁部が外傾する深鉢形土器である。縄文帯の下に磨消部を持つ。

389は口縁部が内湾する深鉢形土器である。

390、392、393は瓢形土器である。392、393には弧線による磨消縄文が施される。同一個体か。

391、394は台付鉢である。391は口縁である。394は脚部である。上下に円孔が穿たれる。

第3類 安行2式（第103図347、第106図395～415）

395～399は波状口縁深鉢形土器である。395は三角形区画文に刻みが施される。三角形区画文下に帯状の装飾帯を持ち、RL縄文が施される。395、397は同一個体の可能性がある。

400～405は口縁部が内湾する深鉢形土器である。刻みのある貼付文、豚鼻状貼付文が付される。

406～408は口縁部が外傾する平口縁深鉢形土器

である。406は渦巻状の沈線文が施される。408は稲妻状の磨消縄文が施される。

409～413は浅鉢である。409、410は口縁部の貼付文を中心に弧状の縄文帯が巡る。

414は台付鉢である。口縁部と脚部を欠損する。隆帯に刻目を施し、豚鼻状貼付文が付される。

415は注口土器である。胴部は球形である。口縁部下に棒状の区画を持ち、刻目のある隆帯が付される。

347は異形台付土器である。器部の口縁と台部を欠損する。口縁部に向かってわずかに開いている。二方向の突起と刻みのある貼付文により、四区画に分けられる。底面には放射状の沈線と横沈線が施される。側面には刻みを施した二本の隆帯が施される。隆帯の上から円孔が穿たれている。

第4類 安行2～3a式（第107図416～433）

416～425は口縁部が外傾する平口縁深鉢形土器である。416、417は口縁部に横沈線と刻目を巡らせる。418、419は鋸歯状の磨消縄文と蛇行沈線が施される。421、422は菱形の沈線で磨消縄文が施される。421は菱形の沈線が口縁部の沈線と同化している。421、422は菱形文様の中で縄文の位置が逆転している。424はステッキ状の沈線が施される。

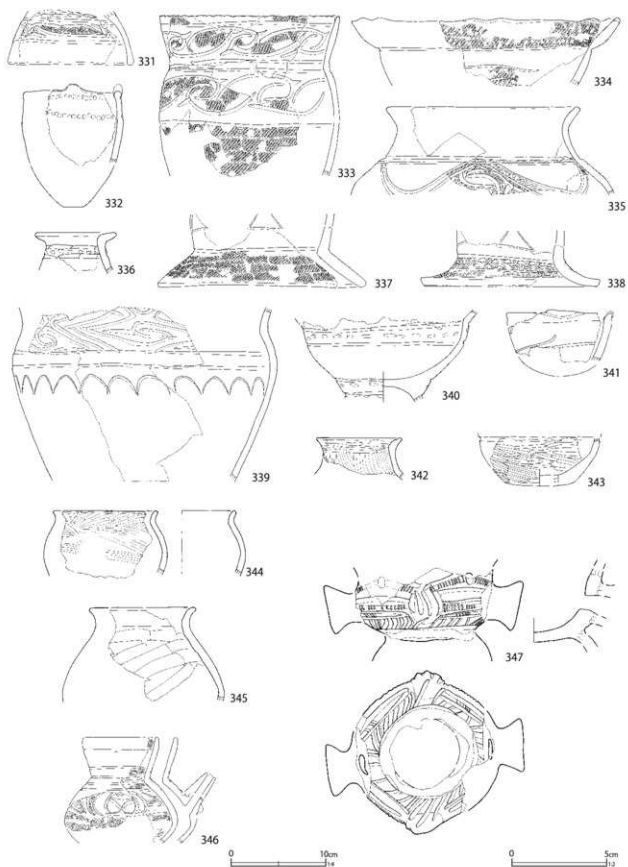
427～432は口縁部が内湾する平口縁深鉢形土器である。428は口縁部に縄文帯を持たない。弧線による磨消縄文が施される。430～432の胴部には楕円形の沈線による磨消縄文が施される。

433は浅鉢である。口縁部の縄文を沈線で区切り、磨消縄文が施される。

第5類 安行3a式（第103図331、第108図434～第110図502）

434～445は波状口縁深鉢形土器である。434～440は波頂部である。434は豚鼻状貼付文を三叉文で囲む。436は上端が薄手で装飾性が低い。437～439は豚鼻状貼付文を二段重ねる。

440は円形の貼付文を二段重ねる。441～445は



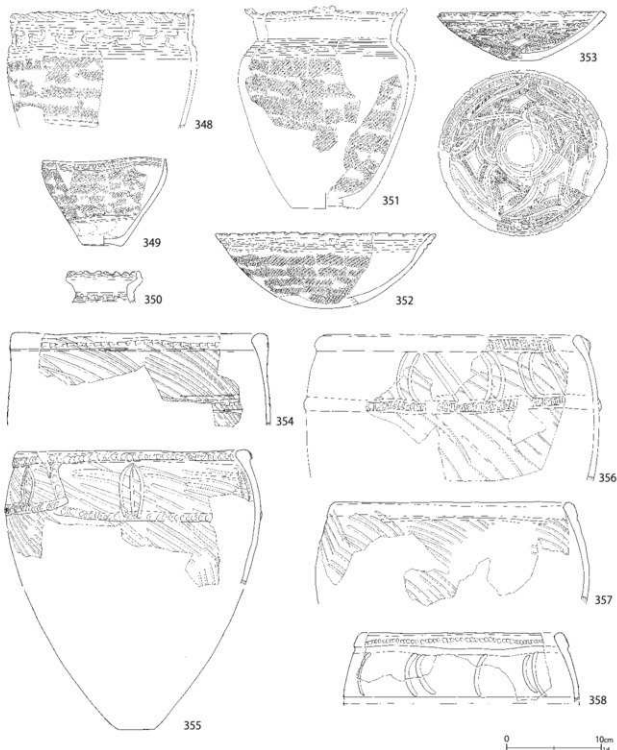
第103図 グリッド出土遺物(11)

波底部である。445は三角形区画文と口縁の縄文帯が近く、貼付文でつながれる。

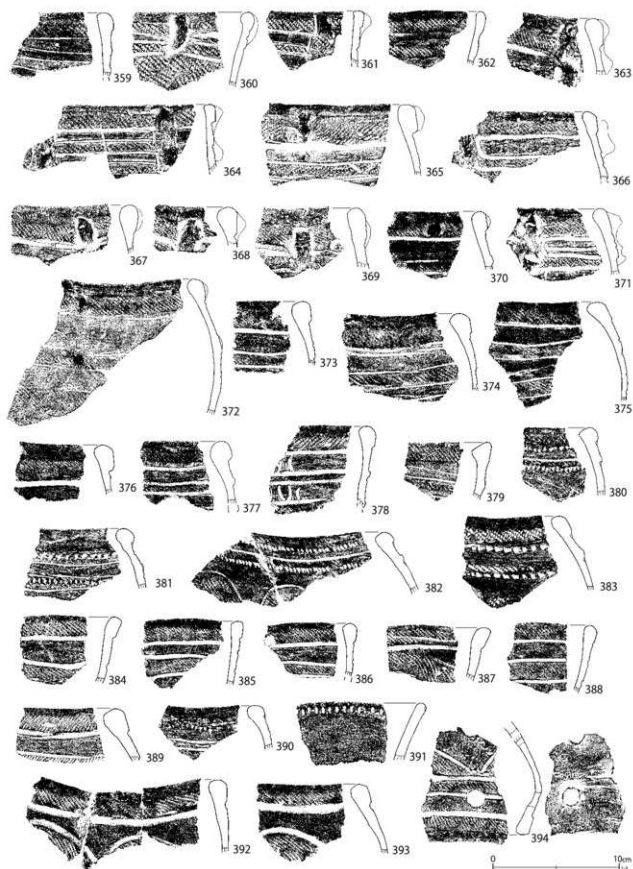
446～481は口縁部が内湾する平口縁深鉢形土器である。446～451、471には縦長に伸びた貼付文が付される。452～458には刻みのある縦長の貼付文

が施される。459～465には刻みのある横長の貼付文が施される。466～470にはくぼみのある円形の貼付文が施される。

482～492は口縁部が直立気味か外傾する深鉢形土器である。484はレンズ状の磨消縄文と蛇行沈



第104図 グリッド出土遺物(12)



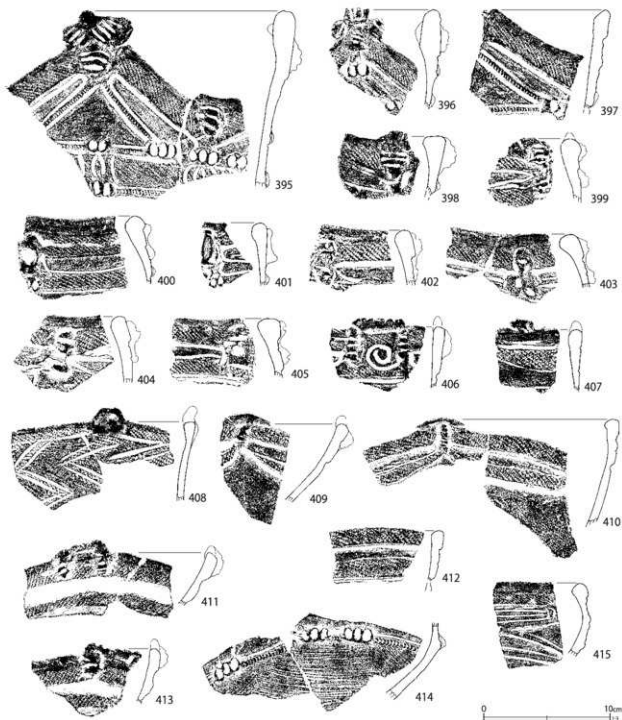
第105図 グリッド出土遺物(13)

線が施される。485は口縁部に細かな爪状の刻みを有し、横沈線の区画内に入組文が施される。

487、488は同一個体の可能性がある。貼付文を中心に磨消縄文が施される。490は鋸歯状の沈線文が施される。492は口縁部に刻みを持つ。LR縄文に三叉文の文様が施される。

496、497は口縁部が厚く、胴部に向かって薄くなる。口縁部に平坦面を持つ。くぼみのある円形の貼付文を三叉文、沈線文で囲む。

498～501は浅鉢である。三叉文、玉抱き三叉文等が施される。500は安行3 a 式に見られるレンズ状の突起が胴部に付される。501は口縁が波状



第106図 グリッド出土遺物(14)

で、波頂部に三叉文が配される。薄手の作りで胎土は緻密である。内外面とも赤褐色を呈するなど他の浅鉢と異なる特徴を持つ。

331、502は台付鉢の脚部である。331は横沈線の区画内に三叉状入組文による磨消縄文が施される。

第6類 安行3a～3b式 (第103図332、第110図503～506)

503、504は波状口縁深鉢形土器の波底部である。

332は小形の深鉢形土器である。口縁部近くに刺突列が巡り、口縁部に貼付文が施される。

505は括れのある深鉢形土器である。506は浅鉢である。細い沈線で文様が施される。

第7類 安行3b式 (第103図333、334、第111図507～526)

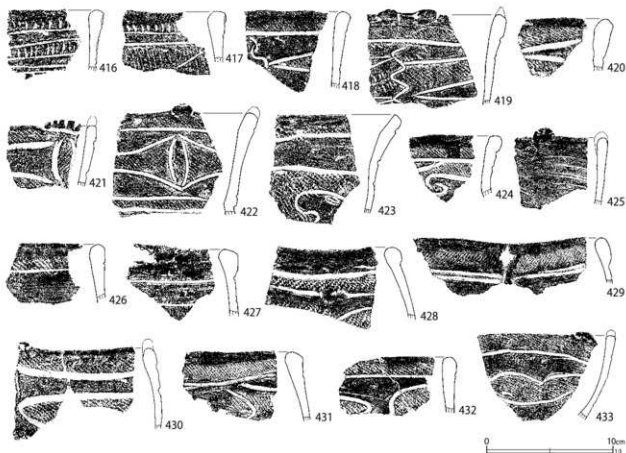
507～513は波状口縁深鉢形土器である。507、508、510の波頂部上端は薄く、装飾性は低い。縦長に伸びた豚鼻状貼付文が二段重ねられる。

511は三角形区画文の隆起が低く、平坦な作りである。三角形区画文の頂点にくぼみのある円形の貼付文が施される。512は姥山系の土器である。波頂部に鉢巻状の突起が付される。513は波底部である。

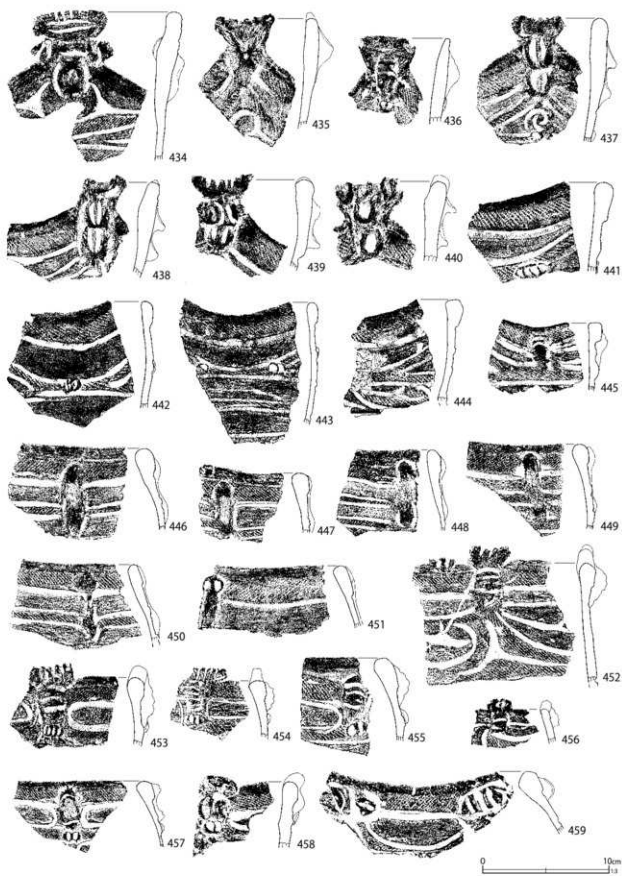
333、514～518は括れを持つ平口縁深鉢形土器である。333は口縁部に刻目が付される。口縁部、括れ部・胴部に沈線を巡らせ、間に三叉状入組文で磨消縄文が施される。514は口縁部に爪状の刻みが施される。条線はまばら等施文が粗い。

515～518、522は口縁部近くに括れを持つ深鉢形土器である。522は入組状三叉文で磨消縄文が施される。胴部に横沈線と三～四列の刺突が施される。515は口縁部に縄文を施さず、円形の沈線文が施される。516、517は口縁部縄文帯の下に磨消部を持つ。518は縄文を細密沈線文に置き換えて施文したものである。

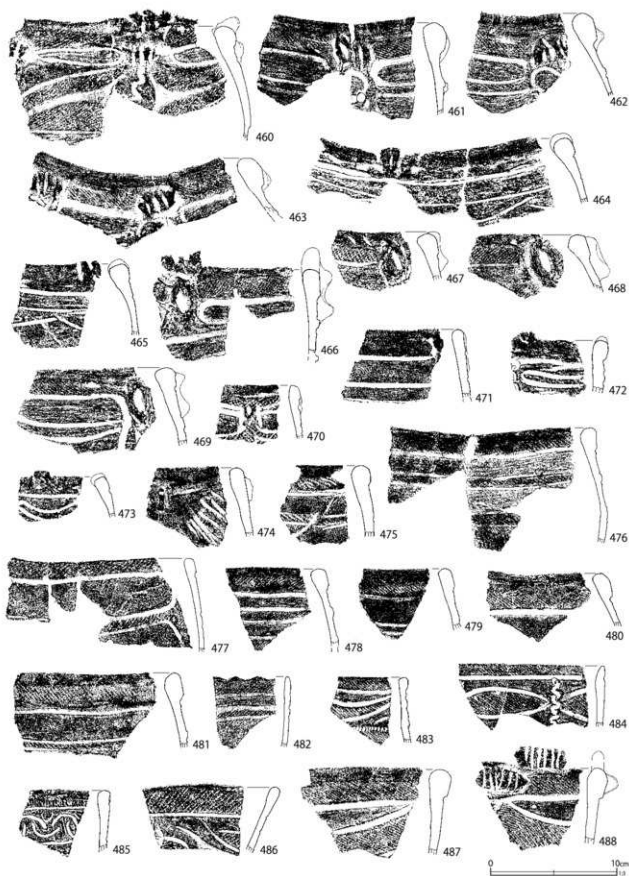
519～521、523～525は浅鉢である。519～521は



第107図 グリッド出土遺物(15)



第108図 グリッド出土遺物(16)



第109図 グリッド出土遺物(17)

底部との境に稜を持ち同一個体の可能性がある。口縁部は厚く、口唇部に平坦面を持つ。口縁部の無文帯の下に沈線と列点、棒状の沈線が施され、底部との境目に沈線と列点を巡らせる。口縁部に円形の貼付文を三段重ねる。地文は単節LRの縄文である。523は玉抱き三叉文による磨消縄文が施される。524は細い沈線で放射状の文様が施される。525は口唇部に平坦面を持ち、そこに弧線と短沈線による文様が施される。口縁部外面に列点が巡る。体部外面には円形と列点の文様を中心に弧線文が施される。

334、526は台付鉢である。334は風化が激しく文様が不明瞭である。口縁部の突起は六単位である。括れ部の沈線で口縁の縄文を区切り、胴部に沈線文が施される。地文はLRの縄文である。526は台付鉢の脚部である。裾部が開く器形である。括れ部に沈線と列点を巡らせる。沈線による磨消縄文が施される。

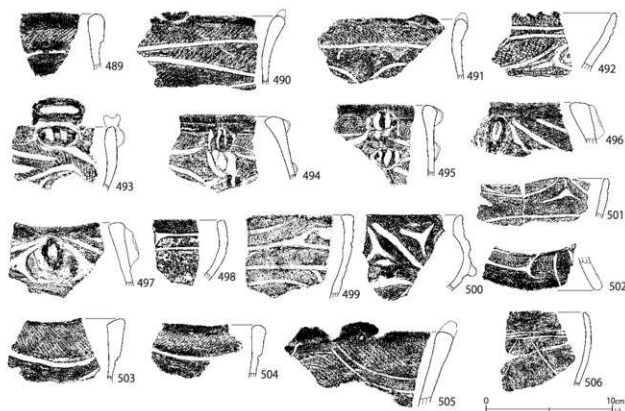
第8類 安行3b～3c式 (第103図335～338、第112図527～539)

527～536は口縁部近くに括れを持つ深鉢形土器である。527は口縁部に刻み、括れ部に沈線が巡り、入組文が施される。528は括れ部が沈線で区切られる。上下に対向する弧線を施し、縦方向の沈線で区切る。529は弧線の間に列点を配した文様である。530は口縁に刻みが施される。534～536は口縁に二列の列点、括れ部に沈線が施される。

537～539は浅鉢である。537は列点と沈線の文様を2段配する。538、539は口縁部に四本の沈線を巡らせる。同一個体の可能性がある。

335は壺形土器である。口縁部内面に沈線が施され、口縁部の内外面が磨かれている。三叉文と弧線文を組合せた磨消縄文が施される。地文はLの縄文である。

336は壺である。口縁部内面の平坦部を磨く。外面は磨かない。二本の沈線間に刺突が施される。



第110図 グリッド出土遺物(18)

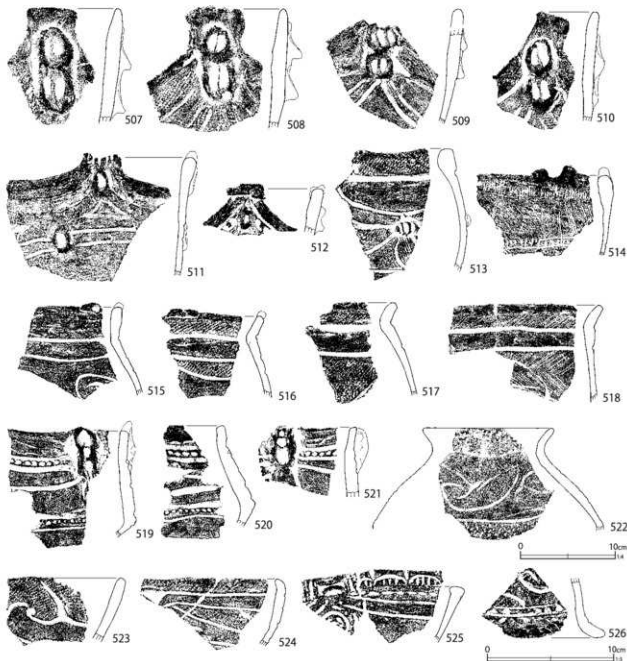
337, 338は台付鉢の脚部である。337は三角形の透孔が5単位、裾部にL R縄文が施文される。括れ部に沈線が巡っている。338は透孔を4方向に穿たれる。透孔は残存部の角度から三角形と考えられる。RLの縄文が施される。沈線で区画し、2列の刺突が施される。

第9類 安行3c式 (第103図339, 340、第112図540~547)

いずれも縄文を施さず、沈線と列点を組み合わせた文様が施文される。

540は波状口縁深鉢形土器である。縄文を持たず口縁部に列点と沈線が施される。三角形区画は沈線で表現され、区画内に列点が施される。

339, 541~547は括れを持つ深鉢形土器である。339は胴部に二本の横沈線を巡らせ、括れ部に三叉文を組み合わせた菱形モチーフと胴部に連続す



第111図 グリッド出土遺物(19)

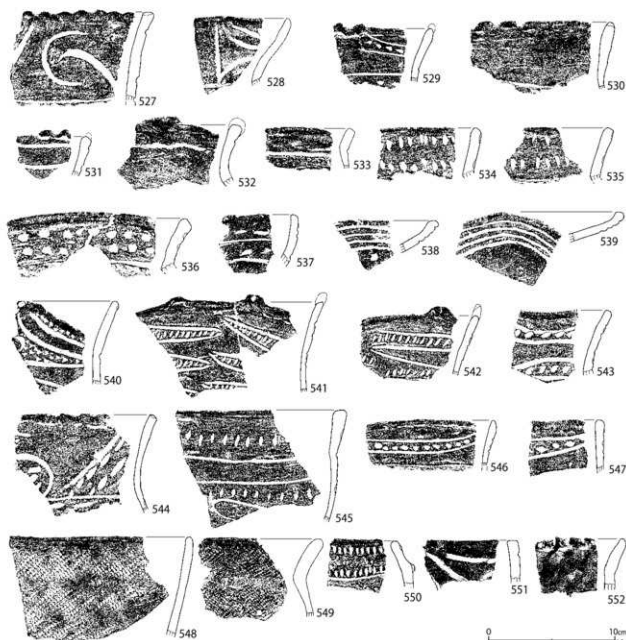
る弧線が描かれる。541、542は列点を沈線で囲んだ文様が鋸歯状に配置される。543は列点を弧線で囲んだ文様が上下に配置される。544は口縁部に刻みが施される。括れ部に横沈線と列点を組み合わせた文様を配置される。円形の沈線文、斜行する沈線と二列の列点が施される。545は口縁部に列点を施し括れ部が沈線で区切られる。546、547は横沈線に列点が施される。

340は台付鉢で脚部と口縁部を欠損する。器形の変換点に列点と横沈線の文様が施される。

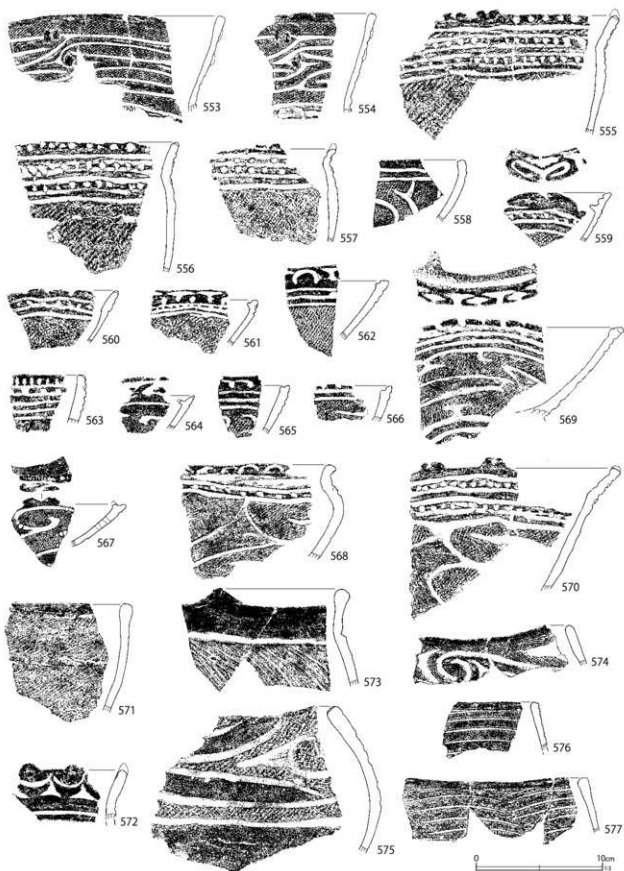
第10類 安行式に伴う土器（第103図341～345、第112図548～552）

548～552は安行式に伴う深鉢形土器である。

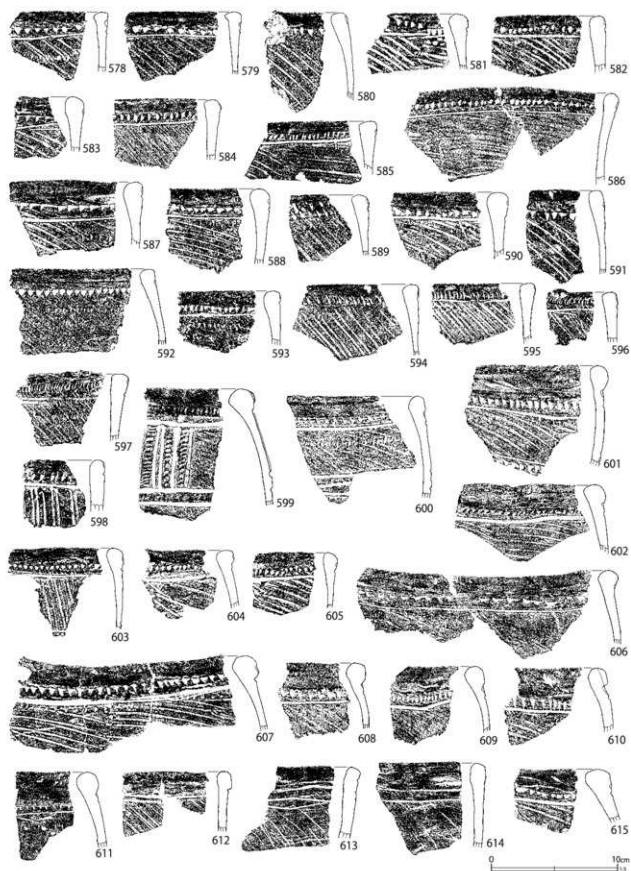
548は口縁が外傾し、単節L R縄文が施される。549は括れのある深鉢形土器である。L R縄文が施される。550は口縁部が内湾し口縁部と隆帯に



第112図 グリッド出土遺物(20)



第113図 グリッド出土遺物(21)



第114図 グリッド出土遺物(22)

二列の列点が施される。551は口縁部に平坦面を持ち沈線文が施される。552は括れを持つ深鉢形土器で、口縁部に刻みが付される。指頭瓦痕が二段残る。

341, 343は浅鉢である。341は胴部に沈線文が施されるが風化が激しく文様が不明瞭である。343は口縁部を欠損する。胴部に横沈線を有し胴部外面を磨いている。

342, 344, 345は壺形土器である。342は外面全面と内面が磨かれる。口縁部内面に沈線を巡らせる。344は内外面を磨かれている。外面の肩部と内面の胴部下半に炭化物が付着する。

第11類 安行式に伴う異系統の土器 (第103図346、第104図348～353、第113図553～577)

553, 554は瘤付土器第IV段階の深鉢形土器である。安行2式並行である。地文はL R縄文である。瘤を中心に三叉文を組み合わせた磨消縄文が施される。沈線上に二個一組の瘤が貼付される。

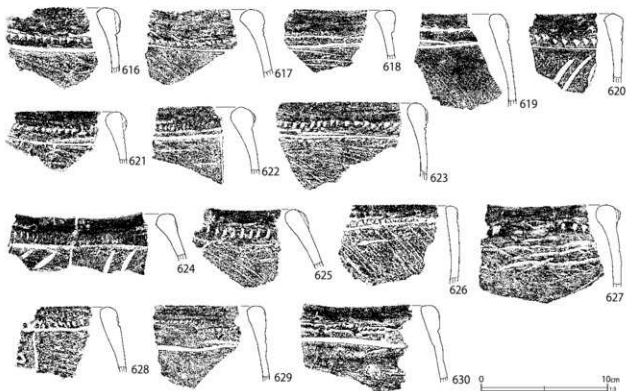
348～353、555～571は大洞系の土器である。

348, 351, 555～557は深鉢形土器である。348は大洞B C式、555～557は大洞B C～C 1式である。351は大洞C 1式である。

348は口縁部に刻みと、B突起を有する。横沈線で区画された中に沈線による羊歯状文が施される。胴部は回転縄文である。351は口縁部沈線下が無文である。肩部に五本の沈線を巡らせ、刺突列が施される。555, 556は口縁部に刻みが施される。口縁部に沈線を六本巡らせ、二列の刺突が施される。地文はL Rの縄文である。555の口縁部には二箇所のB突起を有する。557には沈線四本と、刺突が二列施されB突起が貼付される。結節ある縄文が施される。

558～567, 352, 353は浅鉢である。558は大洞B式、559～562は大洞B C式、563はB C～C 1式、352, 353, 564～567は大洞C 1式である。

558は口縁部に平坦面を持つ。口縁部に二本の沈線と、三叉文による磨消縄文が施される。559～561は口縁部に沈線と刺突が平坦面に施される。

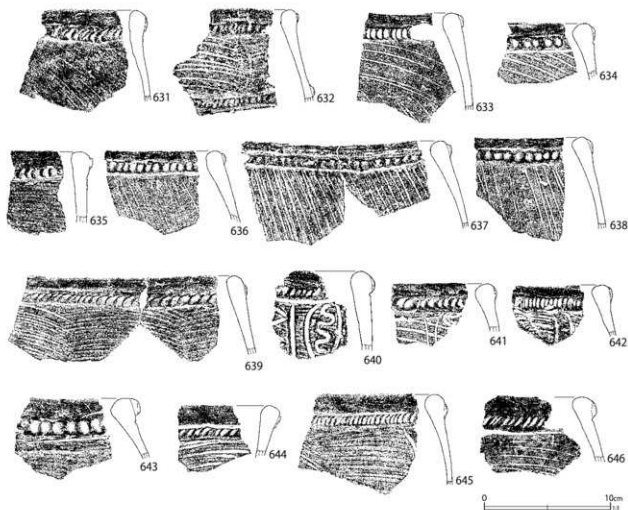


第115図 グリッド出土遺物(23)

559は口縁部内面に刻みまたは文様が施される。
561は口縁部平坦面にT字状の沈線が施される。
562は口縁部平坦面に弧状沈線が連続して描かれ、
三本の沈線を巡らせる。563は五本の沈線と二列
の刺突列が施される。564は口縁部にB突起が施
される。565は口縁部平坦面に弧線、外面に三本
の沈線が施される。566は口縁部平坦面に弧状の
文様が施される。567は口縁部にB突起が貼付さ
れ。口縁部に横沈線を施さず雲形文が配されてい
る。口縁部内面に刻みのあるかえりが付され、2
箇所の円孔を有する。352は口縁部に刻みが施さ
れる。口縁部に三本の沈線を巡らせる。上から二
本目の沈線と三本目の沈線をらせん状につなげて
描かれている。沈線のつなぎ目や刺突にずれが見

られ、施文が粗い。353は口唇部にT字状の沈線
が施され口縁部に沈線と刺突を巡らせる。底面に
菱形をモチーフにした三単位の文様が描かれる。

349、568は鉢形土器である。349は口縁部に三本
の沈線と刺突が巡り結節回転ある縄文が施される。
底部近くにナデの痕跡が見られる。大洞BC式。
568は口縁部に括れを持つ。口縁の平坦面に弧線
が連続して配置され、沈線を二本巡らせ刺突が施
される。胴部は雲形文である。大洞C1式である。
569、570は台付鉢である。大洞C1式。569は口縁
部と脚台部との接合部にそれぞれ沈線を巡らせ、
その間に雲形文が施される。内面にT字状の刻目
をつけ貼付文のように削り出す。570は口縁部に
B突起を有する。



第116図 グリッド出土遺物(24)



第117図 グリッド出土遺物(25)



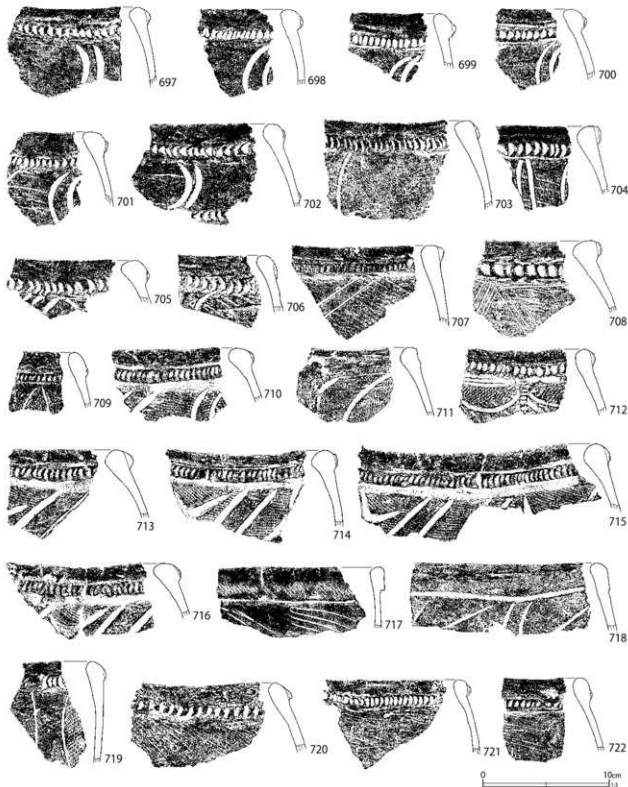
第118図 グリッド出土遺物(26)

雲形文を有す。

346は注口土器である。注口と底部を欠損する。
縁部は外に開き、胴部は算盤玉形を呈する。注口

の下に凹形の貼付文が付される。三叉文が横位に
連続して描かれる。大洞B式である。

350は壺形土器である。口縁部にB突起を貼付



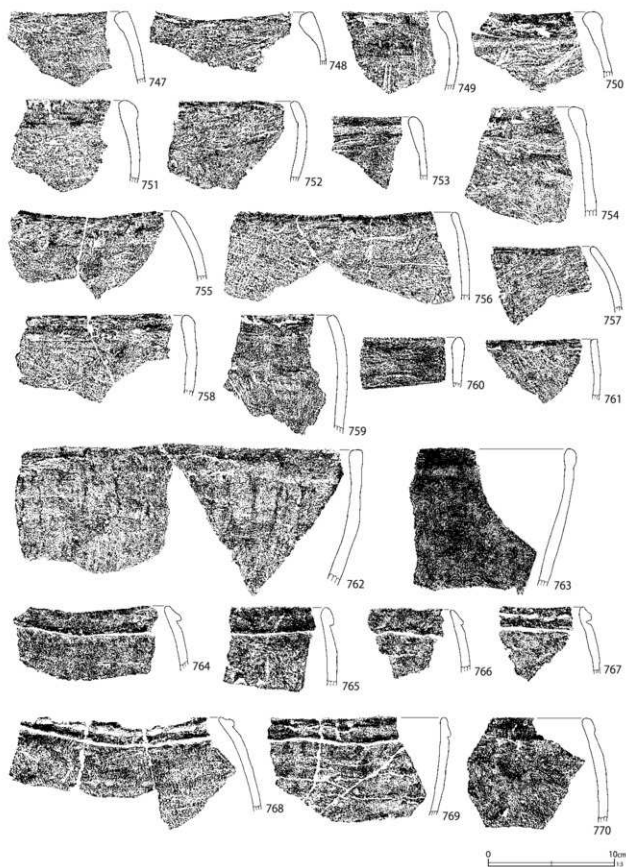
第119図 グリッド出土遺物(27)

し、沈線で囲む。口縁部の内外面は粗く磨かれる。
大洞BC式である。

571は深鉢形土器である。結節回転ある縄文が
施される。



第120図 グリッド出土遺物(28)



第121図 グリッド出土遺物(29)

572は北陸系の土器である。貼付文を沈線で囲み三叉文が配される。括れ部に横沈線が施される。573は滋賀里Ⅲ a 式の深鉢形土器である。口縁部は無文で、肩部から条線が施される。

574、575は前浦系統の土器である。574は前浦式直前の型式で、安行3 c 式併行である。三叉文と弧線文を組み合わせた文様である。575は安行3 c ～3 d 式併行の土器である。口縁部は厚く、ゆるやかな波状を呈する。

576、577は前浦式に伴う粗製土器である。外面に横位の条線が施される。

第12類 安行式に伴う粗製土器 (第104図354～358、第114図578～第123図800)

578～630は条線文土器である。

578～598は安行1式である。口縁部は直立気味で条線を施し、口縁部に刺突と沈線が巡る。

354、599～602は安行2式である。354は口縁が直立気味である。斜位の条線を施し、口縁部と胴部に沈線と連続する刺突を巡らせる。603～623は安行2～3 a 式、624～627は安行3 a 式、628～630は安行3 b 式である。

631～746は紐線文土器である。

631～646は安行1～2式である。口縁部に指頭

押圧の紐線が施され、一部に弧線、蛇行沈線等の文様も見られる。

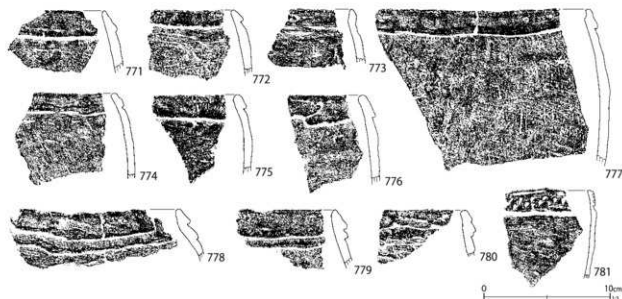
647～650は安行2式である。

651～683は安行2～3 a 式である。口縁部は肥厚し、内湾する。文様には弧線の内側を磨り消すもの、弧線の内側を磨り消さず条線が残るもの、蛇行沈線が施されるもの等がある。675は紐線に貝殻状の工具で刻みが付けられる。681、682は口縁部に縄文を有す。683は口縁部に紐線を持たない。

355～357、684～722は安行3 a 式である。条線が消失したものが多く、文様は弧線、蛇行沈線、磨消縄文等がある。

355は斜位の条線が施され、口縁部と胴部に紐線を付し、口縁部の紐線が一部垂下している。対向する弧線文は六単位である。356は斜位の条線が施される。弧線文と斜位の沈線からなる文様が施文される。357の口縁は肥厚せず、紐線を持たない。口縁部が沈線で区切られ、斜位の条線が施されるが文様は施さない。

358、723～739は安行3 b 式である。条線を施さない。358は口縁部に刺突と沈線が施される。横沈線で文様を区切る。弧線文が施される。739は



第122図 グリッド出土遺物(30)

斜位の沈線に刺突を施した文様が配である。735～737は同一個体の可能性がある。弧線文と単節L R縄文による文様が施される。

740～745は安行3 b～3 c式である。

746は安行3 c式である。口縁部に深い刻目が施される。

747～798は粗製の深鉢形土器である。

747～759は口縁部が肥厚し、内湾する。760～763は口縁部が直立するか、外傾する。

764～781は折り返しの口縁を持つ深鉢形土器で

ある。778～780は折り返しが二段である。781は折り返し口縁部に二列の刺突列が施される。

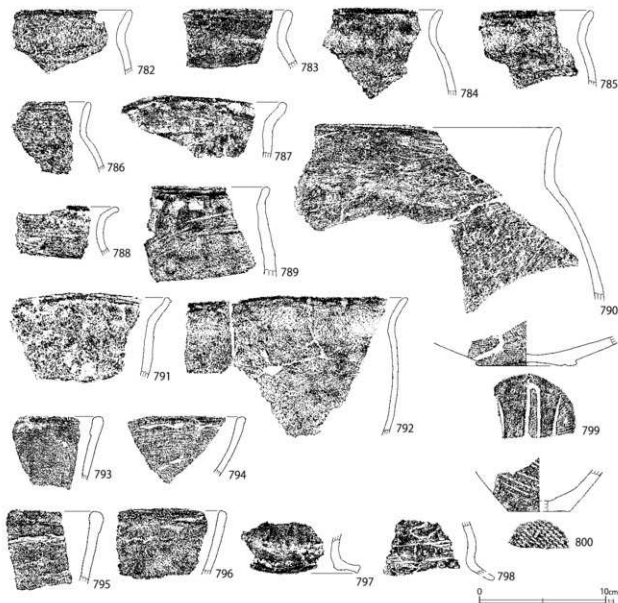
782～792は括れを持つ深鉢形土器である。

793、795は口縁部が外傾する深鉢形土器である。

794、796は鉢形土器である。

797、798は台付鉢の脚台部である。798には二本の横沈線が巡る。

799、800は深鉢形土器の底部である。799の底面は弧線による磨消縄文が施される。800の胴部には斜位の条線が施される。底部には網代痕が残る。



第123図 グリッド出土遺物(31)

(2) 土偶 (第124図)

B区のグリッドから土偶が4点出土している。

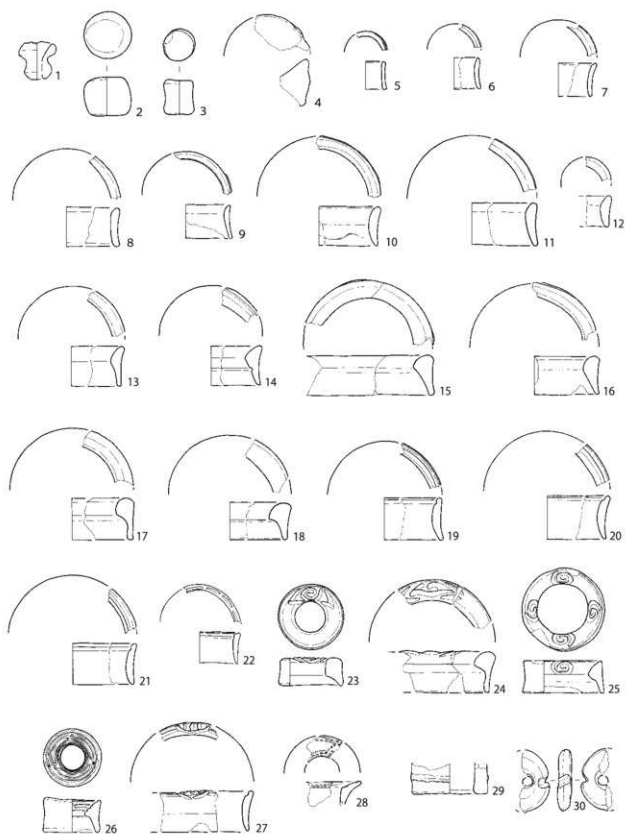
1はミズク土偶の頭部で、O-10グリッドのV層から出土した。顔の右半分が目を中心に残っている。比較的大きめの土偶と思われる。中実で、残存高は約3.7cm、幅は4.4cm、厚さは1.8cmになる。茶褐色から黒褐色を呈し、胎土は密で、白色砂粒を含む。焼成は良好である。顔の輪郭及び眼の隆帯上には細かい刻みが入る。頬には文身と思われる

円形刺突が並列で施される。また、眼を貼り付けた際についたと思われる刺突が、眼の周囲に連続して残る。背面には、結髪を表現する沈線が施される他、後頭部中央の頸部近くには、コブ状の突起の痕跡が残る。なお、背面の一部には赤彩痕が残る。晩期前葉の土偶であろう。

2はミズク型中空土偶の右脚で、P-12グリッドのV層から出土した。比較的小ぶりのミズク型中空土偶で、残存高は約6.2cm、幅は4.1cm、



第124図 グリッド出土遺物(32)



第125図 グリッド出土遺物(33)

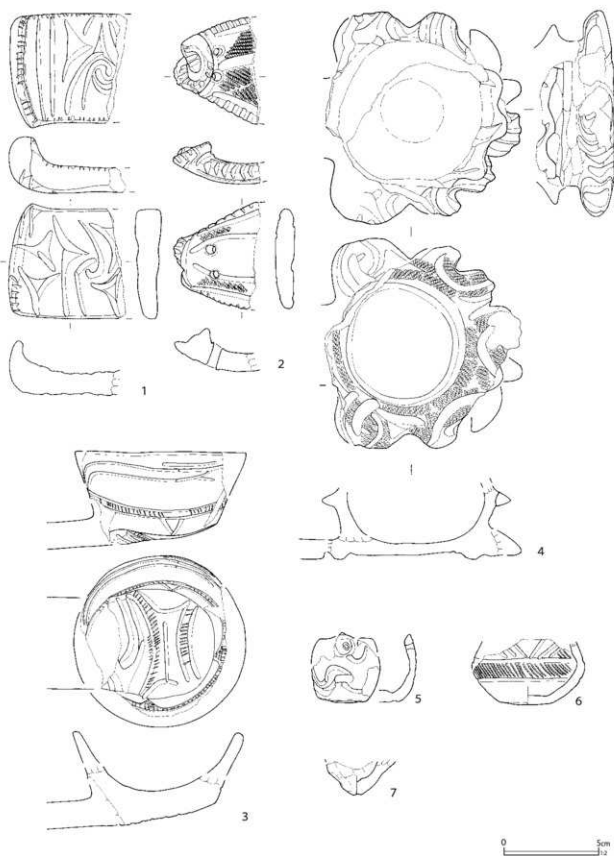
第26表 グリッド出土遺物観察表(1)(第125図)

番号	器種	最大径	最小径	高さ	残存	文様	形状	断面形	備考・出土位置	図版
1	耳飾り	2.0	1.1	2.0	60	沈線	白形	ボタン形	貫通孔あり 内面赤彩 P11G №50	74-1
2	耳飾り	2.5	—	2.1	100	無文	白形	長方形	V層 R13G ㉗	74-2
3	耳飾り	1.7	—	1.9	100	無文	白形	長方形	V層 Q12G ㉘	74-3
4	耳飾り	(4.5)	(4.1)	2.5	25	無文	白形	三角形	V層 Q12G ㉙	74-4
5	耳飾り	(2.2)	(2.0)	1.5	30	無文	環状	長方形	V層 P11G ㉚	74-5
6	耳飾り	(2.8)	(2.6)	1.7	20	無文	環状	「く」の字	VI層 P12G ㉛	74-6
7	耳飾り	(4.0)	(3.5)	1.8	20	無文	環状	「く」の字	VI層 P12G ㉜	74-7
8	耳飾り	(5.6)	(5.4)	2.1	15	無文	環状	「く」の字	V層 Q12G №11 ㉝ ㉞	74-8
9	耳飾り	(4.8)	(4.6)	1.8	20	無文	環状	「く」の字	VI層 Q12G ㉟	74-9
10	耳飾り	(6.5)	(6.1)	2.1	25	無文	環状	「く」の字	V層 Q12G ㊱	74-10
11	耳飾り	(6.8)	(6.7)	2.3	15	無文	環状	三角形	V層 Q12G ㊲	74-11
12	耳飾り	(2.6)	(2.4)	1.7	25	無文	環状	「く」の字	V層 R12G №6	74-12
13	耳飾り	(5.6)	(5.2)	2.2	15	無文	環状	三角形	V層 Q12G ㊳	74-13
14	耳飾り	(5.4)	(5.0)	2.1	15	無文	環状	P字形	V層 P11G ㊴	74-14
15	耳飾り	(6.9)	(6.7)	2.2	45	無文	環状	三角形	V層 P11G №62 ㊵ №72	74-15
16	耳飾り	(6.8)	(6.6)	2.0	25	無文	環状	三角形	Q11G P11G	74-16
17	耳飾り	(6.5)	(6.3)	2.3	20	無文	環状	P字形	V層 Q12G ㊶	74-17
18	耳飾り	(6.4)	(6.0)	2.0	20	無文	環状	P字形	Q11G P3	74-18
19	耳飾り	(6.2)	(5.9)	2.3	20	無文	環状	「く」の字	Q12G №60	74-19
20	耳飾り	(6.6)	(6.1)	2.4	20	無文	環状	「く」の字	Q12G ㊷	74-20
21	耳飾り	(6.7)	(6.4)	2.2	15	沈線	環状	「く」の字	Q12G №59	74-21
22	耳飾り	(4.2)	(4.0)	1.7	25	沈線	円筒状	長方形	Q11G P3	74-22
23	耳飾り	3.5	3.3	1.5	100	沈線	環状	P字形	V層 Q12G №13	74-23
24	耳飾り	(6.6)	(6.0)	2.2	25	沈線	環状	P字形	V層 Q12G ㊸ ㊹	74-24
25	耳飾り	4.3	4.1	1.8	95	沈線	環状	P字形	V層 Q12G №2	74-25
26	耳飾り	3.0	2.8	1.9	95	沈線+刺突	環状	P字形	文様内赤彩 V層 表採	74-26
27	耳飾り	(6.4)	(5.9)	2.2	15	沈線+貼付	環状	「く」の字	V層 Q12G ㊺	74-27
28	耳飾り	(4.0)	(2.4)	[1.3]	10	刺突	環状	「く」の字	文様内赤彩 V層 Q13G ㊻	74-28
29	耳飾り	(4.0)	—	[1.7]	25	隆帯	環状	長方形	VI層 T14・15G	74-29
30	垂飾	3.2	—	0.7	50	沈線	—	—	V層 R11G ㊼	74-30

厚さは3.9cmである。黒褐色を呈し、胎土は密で、白色砂粒を含む。焼成は良好である。脚部の外側には径約1.3cmの円形の孔が開けられている。足頸と膝下には併行する沈線が施され、膝を中心にした上半には円形の孔を中心に併行する沈線で施文される。沈線の空白部にはRLの縄文が施されるが、施文は縄⇒沈線の順である。足先には土踏まず側を除いて、刻みが施され、脚部の内側(股部)は無文である。背面の一部には赤彩痕が残る。中空の内面には、輪積みの痕跡がわずかに残り丁

寧に整形されている。足底は開口していない。晩期前葉安行3a式期の土偶と考えられる。

3は中型の中実土偶で、Q-12グリッドのV層から出土した。両腕先と両足先を欠き、残存高は約9.3cm、幅は6.8cm、厚さは2.4cmである。赤褐色で、胎土は密、焼成は良好である。無文で、全体に作りが簡略化されている。T字状の眉と鼻、U字状の隆帯で顔面が表現される。眼の表現は不明瞭で、T字状の眉の下部にかすかに表現され、鼻孔は細く短い沈線のみで表される。眉上方の頭



第126図 グリッド出土遺物(34)

部には左右及び中央に小さなコブ状の突起が付けられる。頭部は輪郭に沿って後方にせり出し、後頭部の中央にはコブ状の突起が付けられている。乳房の表現はなく、腹部も膨張しない。胸部と背中の中央には若干のくぼみが観察できる。全体に摩耗が激しい。頭部や全体に簡略化された特徴から晩期前葉～中葉の土偶と考えられる。

4は右腕で、Q・12グリッドのVII層から出土した。省略タイプの小型土偶であろうか。中実で、残存高は約2.0cm、幅は2.2cm、厚さは1.6cmである。黒褐色で胎土は密、焼成は良好である。沈線で施文される。おそらく晩期の所産であろう。

(3) 耳飾り (第125図)

1はボタン形、2～4は白形である。3は上面をくぼませ、4は上面のみ残存する。5～18は無文で環状の耳飾りである。断面形には、長方形、三角形、P字形がある。5～9は厚さ2～3mmで薄手である。19～29は環状の耳飾りで、文様を有する。断面形には、長方形、P字形、「く」の字形がある。19～21は上面に沈線を巡らせる。22は内面に沈線を巡らせ、上面に短沈線が施される。23、25には渦巻状のモチーフが描かれる。26には棒状の沈線文が描かれる。上面に赤彩が残存する。27は刻みのある貼付文を沈線で囲む。28は上面のみ残存する。上面に二列の刺突を施し、列に直行する刺突が施される。刺突の中に赤彩が残存している。29は側面に降帯が付けられる。30は垂飾である。中央に孔を穿つ。側面に挟りを付ける。

(4) 土製品 (第126、127図)

1～4は手觸形土製品である。1、2は把手部の破片である。1は表面と裏面には、入り組んだ弧線を中心に三叉文が配置される。裏面の稜線に細かな刻みが施される。2は稜線に沿って刻みが施される。二個一對の孔を穿つ。安行3a式であろう。3は器部である。残存する把手部は、器部に対して斜めに付けられている。器部径は推定9.0cm、残存する高さは5.0cmである。側面には横沈線と刻み、底面には弧線、三叉文、刻みによる文様が施される。4は器部と台部である。器部上半と把手部を欠損する。台部にはU字状の突起3点と半円形の突起2点が付される。U字状の突起に沿って弧線が描かれる。半円形の突起に三叉文と弧線が描かれ、沈線文の間にL Rの縄文が充填される。安行3a式であろう。

5～7はミニチュア土器である。5は底部が出尻に作られる。6は風化が激しく文様が不明な部分が多い。外面に沈線が施文される。赤彩が残存する。7は手づくね状で指整形の痕跡が残る。

8は犬形土製品である。左耳、右前脚部、左後脚部を欠損する。頭部から尾部までの長さ7.3cm、脚部底面から耳頂部までの高さ4.9cm、胴部幅2.3cm、重さ40.5gである。中実の胴部に頭部、脚部、尾部の各パーツを貼り付け、接合部分には指押さえの痕跡が認められる。顔面部は板状の扁平な作りで、目、鼻、口の表現は見られない。立ち上がる尾部の先端は胴部側に丸まっている。尾部付け根部分には円形の刺突が施される。



第127図 グリッド出土遺物(35)

(5) 石器 (第128～132図)

1～15は石鏃である。

1～3は無茎で基部に深い抉りを持つ。2と3は一次剥離面を大きく残している。

4～9は無茎で基部に浅い抉りを持つ。5は先端部、6は右脚部を欠損後再加工されている。8は両側縁を鋸歯縁状に加工している。

10は無茎で基部が丸みをおびて外湾する。全体に粗雑な調整を行っている。

11～13は有茎で基部が逆三角形に突出する。いずれも先端が細長い。基部に浅い抉りを入れて茎を細長くしている。11、12は茎部先端を欠損する。13は肉厚で茎部先端の一部と先端部を欠損する。

14、15は石鏃の未製品である。14は肉厚で粗雑、15も同様の作りで、先端部が鋭利でない。

16～19は石鏃である。16は縦長剥片の末端を表裏面から加工し、錐部を作る。上端部を欠損するが、同様に加工しており、錐部の横断面形は三角形に近い。17は不定形なつまみ部を作るもので、錐部の両側縁が平行し、細長く棒状に作り出そうとしたものである。先端部を欠損する。18は全体に調整を加え、棒状に加工しており、錐部は上下端部が鋭利で、摩耗が見られる。錐部の横断面形は菱形である。19は極小である。棒状に加工する。錐部は先端が鋭り、使用により摩耗する。錐部の横断面形は菱形である。

20～25は挿・刮器である。20、22、23は挿器と考えられる。20は縦長剥片を用い縁辺を一周するように楕円形に加工している。器体の一部に油性物質が付着しているが、詳細は不明。22は風化が進み、調整は不明瞭である。21、24、25は刮器と考えられる。21は右側縁を欠損する。24は縦長剥片を使用し、左側縁の一部を調整加工している。末端を欠損する。25は上面が摩耗していることから、磨石の破片を転用したと考えられる。

26～28は磨製石斧である。26、27は大型の定角式磨製石斧である。26は側面を明確に作らないた

め、横断面形は楕円形である。上下端部は敲打により潰れている。特に刃部の潰れが顕著である。敲石に転用したと考えられる。27は側面が明確に作られ、横断面形が隅丸長方形である。光沢が見られる。28はいわゆる局部磨製石斧である。小型で薄手の楕円磔を用いて、下半部を中心に研磨している。側縁部もわずかに面を持つように整形している。刃部にわずかな刃こぼれの痕跡がある。

29～34は打製石斧である。29～31の平面形は楕円形に近いが、製作、技法から撚形と考えられる。風化が進み剥離が不明瞭である。32、33は分銅形である。32は風化が進み、剥離が不明瞭である。33の柄縁部は敲打によって潰れている。34は刃部の一部が摩耗している。被熱のため一部黒色化し、表面が剥落している。風化が進む。

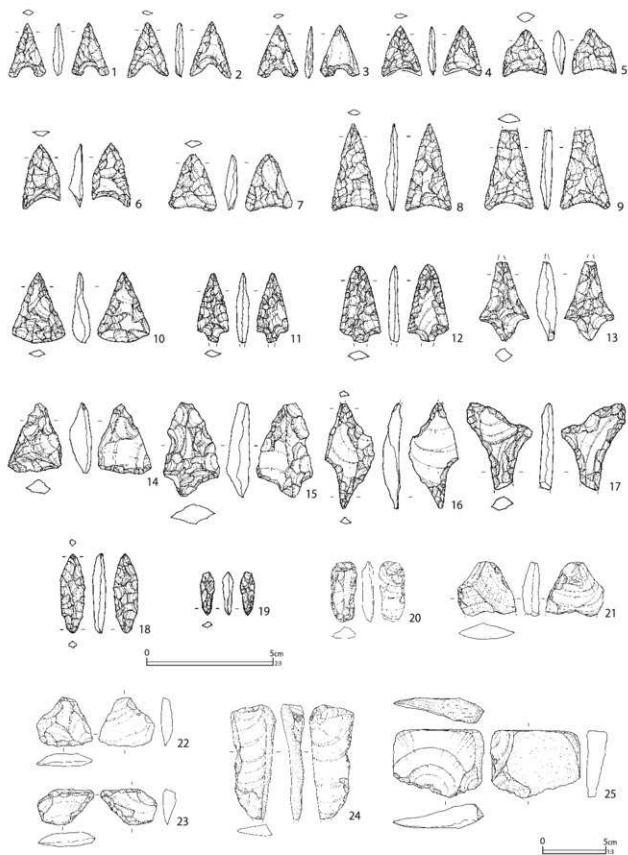
35～38は磔器である。磔を分割し、縁辺を加工して刃部を作っている。37は楕円磔を素材として横位に置き、交互に調整加工している。

39は砥石である。部分的に赤味を帯びているため被熱した可能性が考えられる。

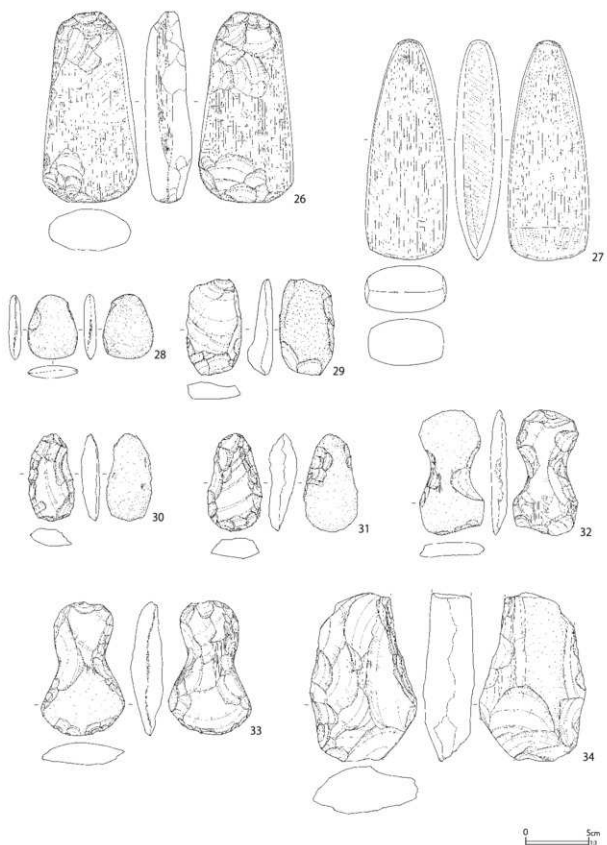
40～42は石錘である。40は多孔質で厚みがある円磔を使用している。磔の中央部を一周するように敲打で凹ませており、紐かけのためと考えられる。上下端部も敲打により凹んでいる。41は有溝石錘である。小型の楕円磔の上下端部に敲打による抉りを入れた後、V字状の溝を半周するように入れている。42は打欠石錘である。小型の扁平磔の上下端部に敲打による抉りを入れている。

43～45はスタンブ型石器である。43と44は横断面形が三角形の棒状磔を使用する。持ち手を部分的に加工している。43の底面は使用による摩耗や敲打痕が見られない。44の底面は敲打で潰れている。45は棒状磔を使用して持ち手を加工している。下半部を欠損し、底面の状態は不明である。

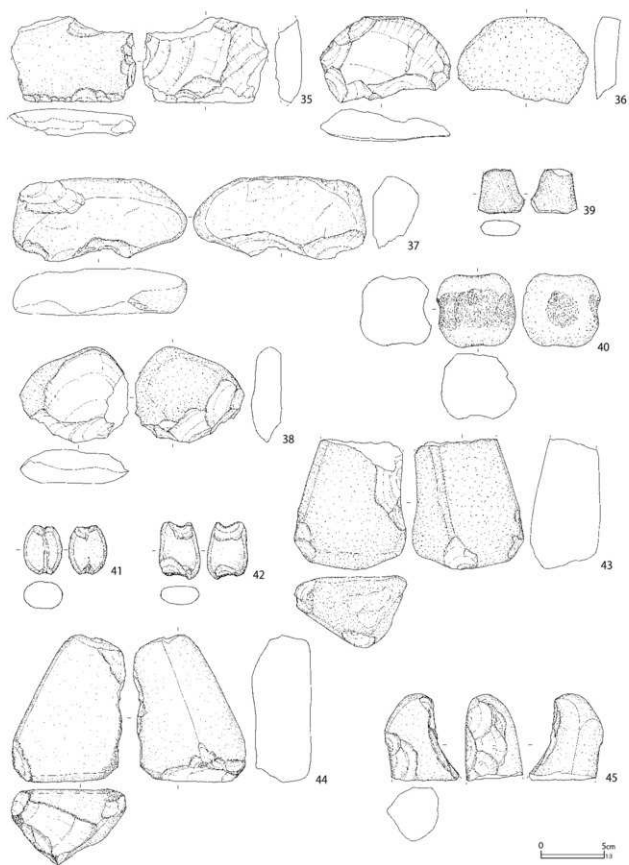
46は敲石である。扁平な小型の楕円磔を使用する。全面を研磨し、部分的に光沢が見られる。上下端部が敲打により潰れている。



第128図 グリッド出土遺物(36)



第129図 グリッド出土遺物(37)



第130図 グリッド出土遺物(38)